

やはり私が遊ばれるの  
は間違っている

TAKUMA<sub>v2</sub>

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

雪ノ下家の長女として親の懇親会に参加していると、妹とそっくりな少女に話しかけられる。

陽乃は少女と仲良くなるが、少女の目的と裏の顔は知らなかった。

※本格的なエロは4話からです。

陽乃がエロい目に合う話ですが、どこまでエロくするか全く考えてません。

また処女作なので誤字脱字、日本語がおかしい等々あると思いますが暖かく見守って欲しいです。

奉仕部編の「やはり私たちがご奉仕するのは間違っている」も投稿始めました。

# 目次

1.	会合	1
2.	裏の顔	20
3.	敗北と本性	26
4.	メイド	37
5.	決壊	52
6.	ブルマ	61
7.	筋トレ	73
8.	有酸素運動	81
9.	筆	91
10.	チアガール	104
11.	バニースーツ	121
12.	レディーススーツ	144

13.	開発	162
14.	開発―2	178
15.	ランチ	187
16.	スク水	200
17.	三番勝負	220
18.	お風呂	238
19.	電マ	252
20.	ブルセラ	264
21.	晩御飯	273
22.	マツサージ	285
	マツサージ2	295
	刷毛水車	303



## 1. 会合

花のJDある私、雪ノ下陽乃はとても暇な時間を過ごしていた。

父の後援会に参加しているが、やることは参加者の自慢話やお見合いの話を聞くばかりで何も面白くなかった。

今も老人の昔話を聞いている最中だが飽きてきた。

「貴重な体験談ありがとうございます。また機会があれば是非聞かせてください。」

いつも通りの言葉を言い、いつも通りの愛想笑いをしてすぐに離れた。

（なんで休日の日にオッサン達の相手にしないといけない）

いのよ！あーあ暇だなく何か面白いことないかな）

と不機嫌に会場を歩いて食べ物で物色していると当然後ろから声聞き覚えのある声で話かけられた。

「雪ノ下陽乃さんで間違いないでしょうか？」

初めまして、松原百合と言います」

そこには妹の雪乃とそっくりの顔の人が居た。

そのため陽乃は一瞬固まったがすぐに持ち直し仮面を被り答えた

「はい、雪ノ下陽乃であつてます。こちらこそ初めまして。何か御用ですか？」  
（危ない、危ない雪乃ちゃんとそっくりで驚いたよ。本当に似ている、黒髪のロングとか声、体の細さも一緒だよ。）

「いえ、用事は無いのです。ただ少しお話をしたくて。

父と一緒に来ましたが同世代の人が居なく、適当に歩いていたら、雪ノ下さんを見つけて声をかけました。

あつ、ご迷惑でしたか？」

手を握りながら上目遣いで陽乃に近づいた。

「いえいえ私も暇で歩いていただけなので大丈夫ですよ。」

（何この子、凄くかわいいんだけど！

普通の子がやったらあざといんだけど、この子はそれが無い、めぐりと同じ天然なふわふわなタイプね。）

本物の雪乃ちゃんも良いけど、このタイプも良いわね。）

陽乃は本人にバレないように全身を観察したが、ここで衝撃の真実を知った。

（本当に雪乃ちゃんとそっくり、あつ待つて、ちよつとタイム。この子と雪乃ちゃんとの決定的に違う所がある！

この子、私と同じくらい胸がある。雪乃ちゃんと顔や体格一緒なのに雪乃ちゃん可哀想・・・)

雪乃に哀れみを感じていた。

その頃雪ノ下は

「へっくしゅん。あら風邪かしら、それとも誰かが噂してるのかしら。もしかして比企谷君かしら、それなら嬉しいわ。早く月曜日にならないかな、そしたら比企谷君に会えるのに・・・」

陽乃が松原の胸を一瞬見ただけだが、松原はその視線に気づき、顔を赤めながら小さい声で話した。

「あの、すみません。あまり胸元を見られると恥ずかしいです。

着なれていないドレスなので似合っているか不安で。」

「すみません。妹に似ているもので見てしまいました。」

ドレス凄く似合ってますよ。」

(危ない、危ない胸元を見すぎちゃった。これはお姉ちゃん大反省と。しかし一瞬しか見てないのに良く気がついたね。今までバレたことがないからお姉ちゃんビックリだ。あとやっぱりあざとい、そこら辺に居る男ならコロツと落ちるね、これを無意識にやる

なんて本当にめぐりそっくり。

雪乃ちゃんの姿で、性格はめぐりって最高じゃない。」

「ありがとうございます。陽乃さんみたいな大人の女性に言われると自信がきます！」

私の方が年下なので敬語で話さくても大丈夫ですよ？」

「そう、ありがとうございます。今日はずっと敬語だから疲れてから嬉しいわ。松原さんも敬語じゃなくてOKよ？」

あと私のことは陽乃って読んで大丈夫、それかお姉ちゃんやお姉様でも大歓迎だよ。」

「私もサクラと読んでください。陽乃さんすみませんが、私にも姉が居るのでお姉ちゃん呼びは恥ずかしいです。」

「そうなんだ。あと良かったら2階にベランダあるから、そこでお話しない？景色が良くてリラックスしできるの。」

陽乃は松原との会話を自分が思ってるよりも楽しんでいた。そのため他の人に話しかけられないお気に入りのベランダを提案した。

「はい、行きましょう！」

松原はガッツポーズをした後に小走りで階段を上がりベランダの方に向かって行った。陽乃も微笑みながら、それに着いて行った。

「良かった、風もあるから思ったより暑くはないわね。」



それより大丈夫？疲れてるように見えるけど。」

「大丈夫です、恥ずかしながら体力が全く無いので、テンション上がるとすぐに疲れてしまっています。」

「もつと運動しないとダメよ、健康は健全な心と肉体に宿るんだから。」

陽乃は微笑みながら返答したが心の中では全く別の恐ろしいことを考えていた。

(本当に純粋な子ね。昔の雪乃ちゃんそつくり、ちよつとからかつてみたいなく。)

そして陽乃は頭をフル回転させ、ある考えを思い着いた。

「サクラちゃん暇だからゲームしない？」

「負けたら罰ゲーム有りの」

「ゲームですか？ゲームは苦手なので私はできたら陽乃さんとお話したいです。あと罰ゲームが怖いです・・・」

「大丈夫、大丈夫難しいゲームじゃないし罰ゲームも軽いものだから。話もゲームしながら出来るし、ゲームが終わった後にでもしよ。」

(我ながら強引だけど、思い付いっっちゃやし仕方ないよね。雪乃ちゃんの声でお姉ちゃん呼びとか色々言わせたいなく。それを録音して雪乃ちゃんに聞かせるのも面白そう。)

松原は少し悩んだが、陽乃に押しきられる形でゲームをすることにした。

ゲームするために陽乃と松原は近くのテーブルに座った。

「じゃゲームの説明をするね。これはとてもシンプル、トランプの神経衰弱。捲って同じ数字が揃ったら取ってていく、揃ったら連続で捲れて失敗したら裏側に戻して相手のターンになるわ。」

これでゲームの説明は終わるわね。ここまでは大丈夫？」

「はい、大丈夫です。説明続けてください。」

「了解。次に罰ゲームの説明ね。これは少し長いわよ。」

まず紙に罰ゲームの内容を5つ書きます。後一緒に1〜13の数字を選んで書いてね。数字も罰ゲームの中身は相手に見せないように、書き終わったら裏がしといて。あと罰ゲームの内容だけど無理難題は無しね、例えば1億円の罰金やここから飛び降りるとか。」

「流石にそんな事書かないですよ。」

「そうよね。それじゃ説明続けるわね。」

罰ゲームなんだけどゲームに負けたら罰ゲームじゃなくて、自分が書いた数字を揃えた場合に紙に書かれている罰ゲームを命令できるわ。例えば自分が紙に7を書いて7を揃えたら相手は書かれた罰を実行する。

そしてジョーカーを揃えたら場合は相手の罰ゲームのカードからランダムに選んで

相手は自分で書いた罰を受ける。だからジョーカーを揃えたらラッキーね。」

「なるほど。同じ数字を書くのはありですか？」

「うん。ただ一組揃えたら1つだけ紙を捲るから、二組揃えないと2つとも命令できないよ。他に質問はある？」

「大丈夫です。」

その言葉を聞くと二人は相手に見せないように罰ゲームを書き始めた。

（早く、お姉ちゃん呼び聞きたいな。もう何年位言われてないだろう、お姉ちゃん悲しいよ。）

二人とも書き終わ陽乃がトランプを適当に並べ初めた。

「カードは綺麗に並べるタイプ？それとも適当な感じ？」

「綺麗に並べると、数字が覚えやすいので適当でお願いします。」

「おっ自信家だね。でも私、ゲームとか強いけど手加減できないからゴメンね。そのかわり罰ゲームは軽いのにしといたから。」

「私も負けませんよ！こう見えて負けるのが嫌いで、やられたらやり返すタイプ何です！あと、すみません。喉が渴いたので飲み物貰ってきて大丈夫ですか？」

「あつ良いよ、私も喉が渴いたから何か取ってくる何が良い？」

陽乃は立ち上がり会場の方に行き、自分と松原の分の飲み物をウェイトレスから貰っ

た後、またベランダに向けて歩き始めた。

（負けず嫌いで体力が無いつて本当に雪乃ちゃんこそつくり。冗談半分で罰ゲームにスクワット入たけど正解、面白くなりそうだね〜）

「はい、待たさせ。それじゃ始めようか！」

その言葉を皮切りに勝負は始まる。

先行は陽乃で一巡目は揃わなかった。

（仕方ないよね〜、いきなり揃うなんてどんな確率よ。⑦⑬）

しかし松原の一巡目に彼女はいきなり数字を揃えた、しかも自分が指定した数字だ

「やったー！ 見てくださいいきなり揃いましたよ。しかも罰ゲームの数字です、陽乃さん覚悟してください！⑦⑦」

自信満々に松原が罰が書かれた紙を捲った内容を見て陽乃は笑った。

（何々、自分の好きなのところを自慢話を交えて語る。

何これ？何が罰ゲームなの？普通に考えて自慢話を聞く方が嫌じゃないの？）

疑問を感じながらも陽乃は話を始めた。

松原は陽乃の話を一字一句聞き漏らさないように真剣な目で陽乃を見つめた。

「さっきも言ったけど、私はゲームとか好きなんだけど誰にも負けたことがないんだ。

もちろんゲームの最初は負けたり、劣性になるけど最後は私がいつも勝ってる。

高校生の時に将棋部の男の子が将棋で私が負けたら、付き合うって条件で勝負したけど圧勝したの。

しかも私はルールは知ってる程度で向こうわ千葉大会の準優勝者。これが私の自慢話ね。」

松原は相づちを打ちながら最後まで真剣に話を聞いており、終わった後は面白かったからか笑顔を浮かべている。しかし対照的に陽乃はやはりこれが罰ゲームなのかと疑問を持っており、真剣な顔で考えていた。そしてゲームは再開された。

〜2 順目〜

(もしかしてこの子今みたいな全部今みたいな罰かしら。そしたら何か気まずいなく。結構際どい罰ゲーム書いちゃったし。)

「はい、失敗。サクラちゃん番よ。⑫⑩」

「残念です私も、揃いませんでした・・①?」

その後は以外にも両者なかなか揃わなかった反動か8順目以降陽乃が数字を揃え始めた

〜8 順目〜

「はい、これで揃った④④!ただ残念なことに罰ゲームの数字じゃないんだよね〜」

→10 順目

「はいこれもゲット⑤⑤。次はこのペア④④、その次はコレ①①。」

怒濤の3連続成功をすまなげなかな陽乃が書いた数字は揃わなかった。

一方松原は最初の一組以外ペアを作れず、捲ったカードは陽乃に取れる一方的な展開になっていた。

→13 順目

「やつと揃った!!はいサクラちゃん罰ゲームね。それじゃ罰ゲームの内容はゲーム中ずっと私のことを陽乃お姉ちゃんと呼ぶこと！」

はい、サクラちゃん私は誰でしょう?②②

「陽乃お姉ちゃんです・・・」

「聞こえないよ、はいもう一回!」

「陽乃お姉ちゃんです!!」

「はい、クリア。ただこのゲーム中はずっとその呼び方ね」

「さつき、お姉ちゃん呼びは恥ずかしいって断ったじゃないですか!もう本当に恥ずかしい・・・」

松原は顔を赤めながら陽乃ことを睨んでいるが、本人にしてみればチワワに睨まれてる位にしかな感じてない。

陽乃はずでに神経衰弱に集中し始めた。

く15 順目く

「はい、また揃ったよ。今度はスクワット20回だよ。」<sup>⑬</sup><sup>⑬</sup>

「スクワット20回なんて無理ですよ。せめて10回にしてください」

「ダメ、はい開始。1く、2く、3く、」

陽乃が数字を数え初めると松原は頑張つてスクワットを開始した。スクワットを開始すると陽乃の視線は胸に向いた。膝を曲げたら谷間が良く見え、膝を伸ばすと反動で胸が震えた。あと少しだけドレスからピンクのブラが見えていた。一方罰を受けている松原は陽乃視線に気づいているが足をプルプル震させ、顔を真っ赤にして頑張つていた。

「陽乃お姉ちゃん、スクワット中ずつと胸見てたでしょ!」

「とても眼福でした。でも凄いいじゃない、20回も本当にするなんて思わなかった。失敗すると思つて腕立て伏せ10回提案しようと思つていたのに。」

「ええ、罰ゲームつて1つじゃないんですか!？」

「罰ゲームに失敗した場合のペナルティよ。複数の罰ゲームじゃないわ。だってペナルティつけないと罰ゲームを実行しない可能性もあるしね。」

く16順目く

「はい揃った⑦⑦、ただ罰ゲームの数字じゃないわ。

次は、失敗ね。サクラちゃんの番よ①・⑤」

（悩んでる、悩んでる。ほとんど捲られて表になったカードは私が取ったし、これも私の勝ちね。雪乃ちゃんみたいにムキにならないから面白くもないし少し手加減してあげますか。1つヤバイ罰ゲーム書いちゃったから揃え過ぎるのも良くないし丁度良いわね。）

「うーん、これ！⑬ 13はさつき取られたから無理ですよ・・」

「諦めたらそこで試合終了だよ。このセリフ一回は言ってみただよ。でも本当に諦めたらダメよ、適当に捲っても当たる時あるし。」

「そうですね、諦めたらそこで試合終了ですよね！」

よしこれに決めました⑩。」

「残念でした。でもまだ半分位カードあるし、まだ諦めるのは早いよ。」

く17順目く

陽乃は今サクラが捲ったのは別の1ー1が序盤に捲られたて

のを覚えているがここはサクラにも揃えるように手助けをすることにした。

「お姉ちゃんの番ね。まずはこれ①



うくんこれのペアはまだ出てないよね、じゃこれ⑪」

(これでさつきサクラが捲つた1ーと今の1ーで揃えるでしょう、でもこれで罰の数字だつたら嫌だな〜)

「1ー!これは揃えますよ。まずこれ、次にこれ。やったー、二組目揃えましたよ。⑪

⑪」

「凄いいじゃない。まだサクラちゃんの番だから次の

「罰ゲームです。陽乃さんが一番悔しいと思うことを言つてください」

陽乃の言葉を遮り、松原が罰ゲームを読み上げた。

陽乃は一瞬後悔したが、自分がアシストしたため仕方がないと思ひ話をし始めた。

「うくん。なかなか難しいな。悔しこと、悔しいことね。やっぱり勝てない時かな、どれだけ考えても敗ける結果しか無いときが悔しいかな。」

「確かにそんな感じしますね。でも陽乃さんがそんな状況になるのが思い付きませんが、もしそんな状況になったら凄い顔をしてそうですね。」

「誉めてえるのか、貶しているか解らない言葉ね。」

後、罰ゲーム忘れていてでしょ。」

その言葉で松原は自分が陽乃のことをお姉ちゃん呼びしてない事に気がついた。陽乃は悪い顔をして松原に対するペナルティを考えてている。そんな顔を見て松原は必

死に罰を軽くしてとお願いした。

「よし決めた。ペナルティはサクラちゃんの将来の夢を言うよ。」

松原はそれを聞いたとき、自分が考えてた物よりも軽く驚いていた。それを陽乃に指摘されると、慌てて首を振り否定したが、陽乃に通じなかった。松原はこれ以上は分が悪いので、将来の夢を語り話をそらそうとした。

「親がアパレル会社の社長なので、その影響で服とかに小さい頃から興味がありました、だから私の将来の夢は一流のファッションデザイナーにななり、そして自分で新しくブランドを立ち上げた事です。」

「凄く良い夢じゃない。願いが叶うように協力するわ。」

（思ったよりしっかりしてるのね。めぐりみたいなき感じだからお嫁さんと思ってたのに全然違うわね。）

「なら、高校の部活で新しい服をデザインしているんですがモデルをお願いしたんです。丁度モデルを探していました。」

「それ位なら御安い御用よ。いつでも声をかけてね。」

「それなら来週、三連休があるので金曜日から私の家で合宿するので陽乃お姉ちゃんも来て欲しいです。お姉ちゃんお願いします。」

「土曜日の夕方に行くね。」

(何いきなりお姉ちゃん呼び＋上目遣いで私を殺す気?)

予定も確認せずに行くって行つたじゃない。本当に未恐ろしい子だわ。)

陽乃がいつ行くか返答すると松原は喜び、二人は連絡先を交換した、そして一息ついた後に松原のターンの続きでゲームが再開された。

～17 順目の続き～

「では捲ります、はい①。これって陽乃お姉ちゃんが捲つたカードのペアじゃないですか、たしかさつき陽乃お姉ちゃんが捲つたカードはこれだ②。」

「残念違うよ。1はその右隣のカードよ。」

～18 順目～

「それじゃいきますか。ホイ、ホイ①①。」

はい罰ゲームね。1の罰ゲームはしつぺね。さつ腕を出して。」

「お願いします、利き腕だけは見逃してください。骨折すると部活に影響が出るので。」

「全く私を何だと思ってるの、私のことゴリラとも思っている? 私は弱い女の子なのよー。」

「すみません、冗談です。それではお願いします。」

あと陽乃お姉ちゃんからかってゴメンね、機嫌直して。」

「お姉ちゃん呼びしたら、何をしても言いと絶対に思ってるでしょ。」

陽乃は怒ってますを全身で表しているが、それを見て松原は小さい笑い、陽乃も続けて笑った。

そして罰ゲームの実施後ペアを揃えた陽乃のターンが続き、なんと次のカードも連続で揃えた。しかも罰ゲームの数字だったので松原は一巡で2回も罰ゲームを受けることになった。

「まさか、二回連続揃うとは思っていなかったわ⑤⑤。でも揃っちゃたし罰ゲームね。

罰は10秒間のくすぐりに耐えることよ。」

「またですか、今、罰ゲーム受けたばつかなのに……。今後ゲームやる時は絶対に倍返してやる。」

「はいはい、頑張つてね。それじゃ始めるわよ。」

松原の捨て台詞に適当に返事を行い、陽乃は背後に回り脇の間に手を入れて、くすぐり始めた。くすぐりに弱いのか松原は激しく顔を顔を振るうが陽乃はしつかり10秒間くすぐり続けた。

（この子、凄くいい匂いする。それにやっぱり胸大きくて柔らかいわね。頑張つて耐えている姿も可愛いし、いじめるのすごく楽しいわ。また誘ってみようかしら。）

「はい。終了。どうだった、気持ち良かった?」

「気持ちいい良いと思うなら、今からやってあげましょうか?」

「遠慮するわ。私はくすぐりをするのは好きだけど、やられるのは嫌いなよ。」

松原は絶対に仕返ししてやると呟きながら、スマホを触り始めた。陽乃はそれを見て笑顔浮かべた。松原が誰かにメールを送った後、椅子に座りゲームを再開しようとする。陽乃携帯が鳴った、最初は無視しようか考えたが発信者が親のため、松原に一言かけて席を離れた。内容は後援会の最後の挨拶があるから、20分後に会場に戻るようなことだった。

「ゴメンね。もう少ししたら戻らないとダメになっちゃた。」

「いえいえ大丈夫です。仕方ないですよ。私の場で中断ですね。」

「申し訳ないけど、そうね。」

陽乃は時間がないため手早くカードを捲るが3連続ペアにはならなかった。

そして陽乃は自分の都合でゲームが中断してしまうため、松原がもしペアを揃えたら何か一つ特別に命令を聞いてあげる事を提案した。

「最後にペアを作って、陽乃お姉ちゃんを見返してやりますよ。」

松原が捲ったカードはジョーカーだった。このゲーム中一度も捲られていないカードだったため、陽乃は苦笑した。カードの枚数は半分程度になっているが、ジョーカーは二枚しか入っていない。さらにゲーム開始してから一枚も捲れてないので、揃えるのは無理だと思ったからだ。しかし松原は何も迷わずに自分の手元にあるカードを捲つ

た。

「やったー。揃いましたよ、揃いました?。ジョーカーは相手の罰から選ぶんですよ。陽乃さんが書いたラストの罰ゲームは何ですかね。それと一つ何でも命令できるんですよね?」

松原は陽乃に罰ゲームの書かれたカードを見せるように急かしてしるが、陽乃は渋っていた。

なぜなら陽乃が書いた中で一番きつい罰ゲームを自分で受けることになるため、どうにかならないか考えていた。

(ヤバい、ヤバいこれ本当に私がやるの。まさかここでジョーカーを揃えるなんて考えてないじゃない。どうしよ、とにかく何か打開策を考えないと。)

「陽乃お姉ちゃんどうしました?顔がすごく怖いんですけど。」

「大丈夫、ちよつと考え事をしてただけだから。」

「そうですか?じゃ紙を捲りますね。」

松原は陽乃の髪を取って表にした。書かれた内容を見て松原は陽乃にジト目を向けた。向けられた陽乃は苦笑いして視線を逸らした。

7番・自分が身に着けている下着を相手に説明する。

陽乃が書いた罰ゲーム

- ① しっぺ1回
  - ② このゲーム中、相手のことをお姉ちゃんと呼ぶ。
  - ⑤ 相手を10秒間くすぐれる。
  - ⑦ 自分が身に着けている下着を相手に説明する。
  - ⑬ スクワット20回
- 松原が書いた罰ゲーム
- ⑦ 自分の好きなどころを自慢話と一緒に話す。
  - ⑪ 自分が悔しいと思うことを言う

## 2. 裏の顔

陽乃はこの状況を打開する方法はあるのか考えていた。

いくら同性の人とはいえ今日知り合った仲の人に自分の下着を説明など出来ない。ただ自分で誘ったゲームで、無茶な罰はなしと言ってしまった。つまり自分が書いた時点で、陽乃にとって下着の説明は無茶じゃないとなつてしまい、言うしかない状況になつた。

(本当に言うの？あー何でこんなこと書いたんだろ、過去の自分を殴りたいわね。とにかく何か考えないと。)

「陽乃お姉ちゃん早く答えて下さい。時間無いですよ。もしかして恥ずかしいんですか？、自分が書いたんだから早くしてくださいよ。」

松原はいたずらが成功したような子供のよう陽乃に対して話している。

陽乃はこの子こんな性格だったかしらと疑問に思ったが、もう言うしかないので下着の説明をする決心をつけた。

「じゃ言うわよ。一回しか言わないから良く聞きなさい。下着の色は黒色以上。」

「えーそれだけですか？、だって下着の説明って書いてあるに、それだけじゃ全くわから



ないですよー。」

陽乃は出来るだけ早く終わらせるように色だけしか言わなかったが、やはり松原は納得してない。しかしここで無理やり説明したと押し切り、後援会の時間だからと逃げすることはできる。ただそれではゲームから逃げることになりプライドが許さない。陽乃は女のしてのプライドか自分のプライドを天秤にかけた。

「だってサクラちゃんが何を知りたいか分からないもん。質問したら、しつかり答えるよ。」

「そうなんですね。早とちりしてごめんなさい。てつきり陽乃お姉ちゃんが恥ずかしいから、このまま説明したって言って会場に戻ると思いました。」

「そんなことするわけないじゃない。それに下着を見せるんじゃない、説明するだけよ恥ずかしくなんてないわ。」

陽乃は女としてのプライドより今まで作り上げてきたプライドを優先した。

「では下着の模様は？」

「花の模様が入っているわ。」

「色も黒で大人な下着ですね。私にはまだ早そうです。他に特徴はありますか？」

「そうね。ブラもパンツにもサクラちゃんとの下着と同じ色のピンクのリボンがセンターについているわ。」

「やっぱり私の下着見てんですね!!もう容赦はしませよ。ではパンツとブラの形を教えてください。」

「なかなか深く質問するわね、ブラはハーフカップ、パンツはローライズよ。」

「やっぱり大人の下着だ!ではそろそろ時間などで、この質問で終わります。」

「ずばりカップ数はいくつですか?」

「・・・Fカップよ」

「そんなに大きいんですか。やっぱり大人のお姉さんですね。すみません。質問じゃなくお願い何ですが、下着少しでも良いので見せて欲しいですけど……。」

「さすがに無理ね。ロングスカートだし屋外だから誰かに見られたら大変な騒ぎよ。はいこれで、罰ゲーム終了。やっぱり人に下着のことを言うなんて恥ずかしいわ。それに誰かさんに思ったより深く聞かれたのが原因だね。」

陽乃も最初は恥ずかしがっていたが、質問を答え終わるころには多少であるが恥ずかしさがマシになっていた。そして陽乃は親に呼ばれているため席を離れた。

「これで、おしまいね。最後はアレだけ楽しかったわ。今度の土曜日に泊まりに行けばいいのよね?あとトランプはそのままにしているのも大丈夫よ、後で片付けさせるわ。」  
「はい♪お待ちしています。また詳細な時間や住所などは連絡します。楽しみに待っています。今日はわざわざ付き合って頂きありがとうございます。」

陽乃がベランダから出ていき姿が見えなくなった。松原はベランダの柵に持たれた。「楽しかったー。特に陽乃ちゃん自身気が付いてるか知らないけど、下着の質問の時すごく悔しい顔してて余計に虐めちゃった。そうそう水野出てきて良いわよ。」

「はい。お嬢さま」

松原が名前を呼んだ瞬間、ベランダ付近の木から女性が下りてきた。

「写真は撮れたかしら？」

「はい、しつかりと。陽乃様の笑顔、悔しそうな顔。考える顔など全て撮っております。」  
「さすが水野ね。次は陽乃ちゃんのことを調べて来週の木曜日の夜に報告して。それを聞いてからお泊り会の予定を考えるわ。きっと楽しいお泊り会になるわ。」

「承知しました。お嬢様も旦那様の所に向かってください、ここは片付けておきます。」  
「別に片付けなくて良いって言ってたのに律儀ね。じゃこれも片付けておいてね。」

松原はポケットからトランプの7を渡し、会場に戻っていた。

### 陽乃の部屋

ドレスのまま勢いよくベットに飛び込み、スマホをいじり始めた。

「あー疲れたよ。なんで大人ってあんな面倒なんだろうね。でも今日だけは許しちゃ

う、だつて面白い人見つけたし。ここまで面白いのは比企谷君以来よ。早く土曜日にならないかな、今度はしっかりとお姉ちゃんを調教してあげるのに。そうだしつかり録音できてるか確認しないと。」

「ハルノオネエチャン、オネガイシマス。ハルノオネエチャン。ハルノオネエ〜」

再生されたデータはゲーム中に陽乃が松原に言わせた言葉や会話であった。

陽乃はそれを嬉しそうに何回も聞き、飽きた時に電話をかけた。

〜雪乃と電話中〜

「もしもし今晚は雪乃ちゃん、お姉ちゃんだよ、元気にしてる？」

「今晚は姉さん。要件は何？無ければ切るわよ。」

「今日も辛らつだね。でも雪乃ちゃんの変わりに後援会に出席した姉への態度じゃないよね」

「くっ。ありがとう姉さん感謝しているわ。」

「うん、良いよ。今日に関しては良いことあったしね。」

陽乃は上機嫌のまま雪乃に今日の出来事を話し、電話を切ると着替えて眠りについた。





ここからは本編にあまり関係のない解説コーナーです。

作者の文章力が酷いので、作者が書きたかったことを書いていきます。

松原がトランプの7を持っていた理由ですが、トランプを配った後に陽乃がジューズを取りに行った内に罰ゲームの内容と数字を見てジョーカー2枚とトランプの7を一枚ポケットに入れました。その時に7ペアの位置を把握した状態でゲーム開始。1順目で7を揃えたら陽乃が7のペアを揃えられないので残る。他の罰の数字をすべて揃えるように仕向けたら、最後にジョーカー2枚を揃え、陽乃に罰ゲームを実施できます。このジョーカーを場に並べたのは陽乃が親の電話を受けたときにこっそりを入れて。雪ノ下父からの電話も松原が水野に連絡を入れて、あとは水野が上手く雪ノ下父を誘導した結果です。

### 3. 敗北と本性

～木曜日～

水野は松原から命令された通り、陽乃について調べた結果を報告していた。

「では雪ノ下陽乃は妹の雪ノ下雪乃を溺愛しています。これは陽乃様の情報ではありませんが雪乃様はお嬢様に変似ている方でした。初めて写真を見たときは私でもお嬢様と勘違いする位です。他にはお嬢様の指摘通りプライドがとても高いお方です。知人や家族などにも弱みや弱点を見せないようです。」

「そう。ではお泊り会ではそのプライドを捨てさせ謙虚な人に更生させてあげるわ。部に連絡して、良い餌が手に入ったから金曜日には作戦会議をするとね。」

「承知しました。」

～土曜日～

そして何も知らずに陽乃は松原の屋敷にやってきた。出迎えには松原とメイド服の松原が出てきていた。

「陽乃さま、お待ちしておりました。荷物をお預かりします。」

「ありがとう。都築もありがとうね。帰るときは連絡するか電車で帰るわ。」

(それにしてもメイド服可愛いわね、家も取り入れようかしら。)

「わかりました。それではお気をつけて。」

「陽乃さん、待っていました。それでは一度客室に案内書しその後には部員が居る部屋に案内しますわ。」

陽乃と松原は部員が居る部屋に入り、松原から軽い部員の紹介が始まった。

「こちらの方が今回モデルを引き受けてもらった雪ノ下陽乃さんです。無礼がないように気を付けてください。次に部員の紹介をします。まず私が部長の松原サクラ、つぎに向かつて右から土井カエデさん、火野ツバキさん、風間スミレさん。最後は先ほどのメイドの水野アオイの5名で部活を行っています。全員したの名前で呼んでもらって大丈夫です。」

「わかったわ。カエデちゃん、ツバキちゃん、スミレちゃんよろしくね。」

「「よろしくお願ひします」」

「では陽乃さんに今回の服を紹介しましょう。」

水野も合流し夏服のコーディネートなどを紹介し、陽乃が批評を行い。良い点はさらに生かせるように悪い点は改善を行い、また批評をするという工程を全員が納得するまで行つた。また部活動だけでなく、学業の方も手助けした。そして夕方になり、3時のおやつを食べた後は全員で気分転換に遊びをすることとなった。マ○オカートやスマ

○ラ、山手線ゲームなど色々なゲームを行ってきたが、松原が陽乃に罰ゲームありのゲームを提案した。

「私と二人でゲーム？」

「はい。他の人にはお願いして別の部屋に行ってもらいました。ここで私と真剣勝負をしてください。」

「どうゆうこと？」

陽乃は今までの笑顔から真剣な顔となった。松原もまた真剣な顔で陽乃が座つてる席の逆側に座った。

「私の性格は前回言いましたよね？私はあなたと同じで負けるのは嫌いなんです。前回の借りを貸したいのです。」

「ふくん、サクラちゃんに私に勝つね。言うようになったね、でもお姉ちゃん戯言は嫌いだよ。特にビック Maus みたいな自分の出来ないことを言うのが一番嫌いなもの。」

「確かに前回の神経衰弱は私の負けでした、ただ今回は負けません。」

陽乃は松原の真剣な姿を見て、笑いが漏れた。はつきりと言ってこの子と何回勝負した所で負ける気がしないからである。陽乃はこの勝負を受けることにした、さらに勝負するゲーム、罰ゲームも松原が決めても良いと破格の条件でだ。

「では陽乃さん勝負と罰ゲームの内容です。罰ゲームについて説明します。」



まず二人で話し合い罰ゲームをひとつ決めます。その後には各々罰ゲームを考えます、これは相手には秘密です。そしてゲームに負けたときに、自分が書いた罰と相手が書いた罰、二人で決めた罰を全て受けます。なので負けると思った場合は罰に何も書かなければ受ける罰が一つ減りますよ。」

「そんなことする必要がある？ どうせ勝つのは私よ。」

「そうですね、ではゲームの説明をします。ゲームはピクシーガーデンです。」

ルールは知っていますか？」

「初めて聞くわ、ルールの説明をして頂戴。」

「では、基本ルールはトランプのダウトとUNOが混ざったゲームと考えてください。」

まず1〜5の♥♦♣とジョーカーを使い合計21枚となります。

プレイヤーは5枚の手札からスターとして先に手札を0枚にした方が勝ちです。

山札がなくなった場合は出されたカードと山札を合わせてシャッフルします。

ここまではゲームが始まるまでのルールです。大丈夫ですか？」

「余裕よ。続けて。」

「まず場に一枚もカードがない状態で始まったプレイヤーは数字とマークを宣言して裏向きの状態に出します。この時から嘘をついても大丈夫です。次に場にカードがある状態でターンが始まった場合は場のカードと同じ数字または同じマークのカードを宣

言して出します。もちろんここでも嘘をついても大丈夫です。そして相手が嘘をついていると思ったら、ダウトを宣言してください。もしダウトが成功すれば相手は3枚引き、失敗すれば自分が3枚引きます。

最後にこのゲームで一番重要な説明です、ジョーカーはどのカードとしても扱います。なのでジョーカーをだして、ダウトと宣言すると失敗になります。ただし相手がジョーカーを出したと思った場合は妖精見つけたと言ってください。これも成功すれば相手が3枚引き、失敗すれば自分が3枚引きます。ジョーカーで上がっても勝利となります。以上で説明は終わりです。何か質問はありますか？」

「じゃ、妖精見つけた・ダウトを宣言した後はどちらのターンで始まるの？」

「すみません、説明不足でした。その場合はカードを引いた方から場のカードをリセットしてゲームを再開します。」

「うん了解。」

「あとこれは我が家の特別ルールなんですが出すカードは1枚ですが一度だけ2枚同時に出すことができます。またその時にダウト・妖精見つけたを宣言された時は2枚とも確認し一枚でも嘘や、ジョーカーが混じっていた場合は出した人が3枚引きます。」

ただしダウトといって本当の数字+ジョーカーの場合はダウト失敗、同様に本当の数字+偽の数で妖精見つけたと宣言しても失敗なので、どちらを宣言するか考えて使用し

てください。」

「OK完璧に理解したわ。」

「では最後にアドバイスを運を味方にしてください。」

ルール説明のあと、二人で相談して決める罰ゲームについて話し合った。

陽乃はまだお姉ちゃん呼び、松原は恥ずかしい言葉を言うとしど違った罰をそれぞれ希望した。ここで陽乃の提案で相手が紙に書いた言葉を読み上げるで両者合意した。

そして個人の罰ゲームを書きゲームが始まった。

↳ピクシーゲーム1巡目

先行は松原、陽乃手札（1♥3♠4♣4♥5♠）

「それではいきます。2♦」

「じゃ4♦」1♥

「ダウトです、確認します。1♥ですなダウト成功なので3枚引いてください。」

「わかったわ。」

（いきなり来たわね、こんな情報が少ないなかでダウトするってことは確実に4♦を持つてるわね。）

↳2巡目

陽乃手札（2♥3♠4♣4♥5♦5♥）

(まず状況確認ね♡が1枚墓地3枚が私の手札にある、つまり相手がハートを持っていても3♡のみ。それ以外のハートの数字を宣言したらダウトが通るはず。そして相手は4♦を確実に持っているわ4かダイヤで相手に回さないと相手はあがれない。)

「それじゃ行くわよ、2♡」2♡

(手が止まった、考えているわね。ここでハートをだすか数字でですか・・・)

「3♡です。」

(3♡は持っている可能性もあるからここはパスね。)

〜3巡目〜

陽乃手札 (3♠4♠4♡5♦5♡)

(ここは4♡は4♦で返される可能性があるけど、5♡は♡は全部潰れた。そして私が5♦を持っていて出るから出てくるのは♠・♦のみ、それ以外なら攻める。)

「5♡」5♡

「3♡を2枚」

(はあ、どういうこと。さつき自分で出したカードを宣言?しかも2枚。どういうこと・・・さつきの3♡は嘘で、今回3♡とジョーカーの可能性もあるし、嘘とジョーカーの可能性もある)

まっつてそれ以前に2枚とも嘘の可能性も・・・)

「どうしますか宣言します。私あと一枚なので早く次のターンに回して欲しいのですが。」

「ちよつと待つてよ。今、宣言するか考えているわ。」

（相手の手札は残り一枚ここで攻めないと危ない。ならどつちを宣下する。ジョーカーか嘘なのか・・・）

「妖精見つけたを宣下するわ・・・」

「本当にそれで良いですか？」

「ええ、問題ないわよ。」

「それでは表にしますね。まず一枚目3♥、ジョーカーじゃないですね。では2枚目4♦。残念ながら妖精ではなく、ダウトが正解でしたね。それではペナルティです。」

く4巡目く

陽乃手札（2♦ 3♠ 3♠ 4♠ 4♥ 4♠ 5♦ 5♥）

「4♥」

（まさか私が運にかけるなんてね。ひとまず、♥はこれで全てたからハートは絶対になり、そして4もさつき4♦を確認して、手元に2枚あるから4もなし。あとは宣言を当てるだけ。）

「3♥」

「妖精見つけた!」

「本当にそっちの宣言で良いですか?」

「ええ、良いわ。」

「(お願い当たって!!)」

「では覚悟してください。」 1 ◆

この瞬間、陽乃の敗北が決定した。今までしかも自分より若い子に何もできずに敗北した。陽乃は頭の中が真っ白になり、顔を伏せた。そして死刑宣告が言い渡された。

「では陽乃さん罰ゲームです。あなたの紙を見してもらいます。」

陽乃は何も返答できなかった。それほど負けたのがショックなのだ。そんな陽乃に見向きもせず、松原はテキパキと罰ゲームの準備をするために水野に命令を出して部屋を出た。

「水野。これを持ってきてサイズ良いはずよ。終わったたら、隣の部屋に案内して。」

「承知しました。陽乃様少々お待ちください。」

松原と水野が出ていき部屋には陽乃だけになった。陽乃は今までのことを思い出している。と頭の中で一つ疑問が浮かんだ。これで自分の書いた罰を受けるのは2回目であり、何か可笑しいと。トランプの時と今回のゲームでは松原のプレイヤースキルが違いすぎる、まるで前回私にペアを揃えるようにしていた?ここで陽乃は松原が何か企

てていると気づいた。その直後ドアが開き、松原と水野が帰ってきた。

「気分はどうですか陽乃さん？落ち着きましたか？」

「ええ、落ち着いたわ。そして一つ質問良い？なんで私をここに招いたの？」

「それはモデルをお願いするためですよ。」

「嘘ね。だって服がまだ出来上がってないのにモデルなんて必要ないじゃない。本当の目的は？」

陽乃が鋭く睨めつけると松原は満面の笑みを浮かべた。

「その顔です。その顔が私好きなんです。自信を持った目、その高圧的な態度全てが美しいです。陽乃さんをここに呼んだ目的はあなたを調教したいからです。その顔を悔しさと染めたい、プライドを潰される所が見たい。だから呼びました。」

「あなた変態ね、私はモデルをするために来たのよ。変態に付き合ってるほど暇じゃないの、帰らしてもらおうわ。」

陽乃が立ち上がり、出口に向かった瞬間松原が待ったをかけた。

「命令します。陽乃さんは月曜日の夜まで屋敷からは出てはいけません。」

「はあ、何言ってるの？何で私があなたの言うこときかないとダメなの？」

「おや、忘れましたか神経衰弱の時に最後に一つだけ言うこと聞くと行つたのは陽乃お姉ちゃんですよ。ハ・ル・ノお姉ちゃん。」

それを聞くと陽乃は何も言い返さず松原を睨んだ。

「安心してください、モデルの仕事はしっかりしてもらいますから。でもひとまず罰ゲームが先ですけど。」

松原は笑いながら部屋を出て行った。



## 4. メイド

（土曜日）

陽乃は敗北した直後は落ち込んでいたが松原の本性を知つてからは、この合宿をどのように乗り切るかを考えていた。そこに水野が現れ、服と伝言を残して部屋からすぐに出ていき、陽乃は持つてた服を見るとため息が出た。

「陽乃様、服を置きましたので、お着換えください。また終わりましたらドアの前に立っているのを声をかけて下さい。お嬢さんの部屋に案内いたします。それでは失礼します。」

（やっぱり、この服なのね。しかも下着まで着替えるの？。クソ、次は叩き潰すんだから。）

陽乃は愚痴をこぼしながら着替え、入り口に立っていた水野に声をかけ松原達がいる部屋の前に立った。そして水野が暗証番号を入力すると、扉が開いたがそこは真つ暗で何も見えなかった。事前に水野から床の光を頼りに歩いて欲しいと言われたので言われた通り、光る場所まで歩いた。陽乃が立ち止まるといきなり明かりがついた。陽乃はステージの上に立っており、周りにはテレビカメラなどがあった。そして、目の前に

は松原と部員が居た。松原が声を上げた。

「やはり陽乃さん素晴らしいです、とてもお似合いですよ。そのメイド服。まさか似合う姿を私たちに見せたいから自分で罰ゲームに書いて、一方的に負けたんですか？」

それを聞くと他の部員たちも笑い。陽乃はただ堪えるしかなかった。

「それにしてもカエデさんよく、あのデザインのメイド服作りでしたね。」

「サクラ、あれは私がデザインした服じゃないよ、あれはり〇口ってアニメのラ〇と〇ムが着てた服を私なりにエロ方面に改良したんです。」

サクラは今回の服装を説明し始めた。メイド服は黒を貴重としており、一部に白のフリルが着けている。頭には白のカチューシャを着け、メイドであることを強調していた。そして特徴的なのは生地の少なさである。スカートは歩けば下着が見えるぐらい短く、花の模様が入った白いガーターベルトと共に絶対領域を作っていた。また背中は大きく空いており大人の雰囲気醸し出していた。胸元にしても背中と同様に大きく空いており正面から見ても胸の谷間が確認できる。そしてカエデの一番の押しは巫女服のように袖が分かれており、手を上げれば脇と横乳見えるようにした所だ。カエデは自分が思い付くエロをこの服に落とし込み、ただしどこか上品さを出す服としてデザインした。

「そうなのですか、私もあのような服を作ってみたいです。それでは陽乃さん共通で決

めた罰を受けてもらいますね。」

「良いよ。早くして何を言えればいいの？あなたのことを様付けで呼べばいいの？」

「いいいえ、あなたにはもつと素晴らしいことを話してもらいます。水野だしなさい。」

水野は松原からの合図でスケッチブックを取り、陽乃が見やすかつ、松原達の視界を邪魔しない位置に移動した。

「では陽乃さんどうぞ、ただし適当に読めば何回でもやり直させますよ。」

「チィ。雪ノ下陽乃です。年齢は19歳で、年下の松原様に無謀に勝負を挑み敗れました。なので私は自分で書いた罰ゲームのメイドの姿で松原様に仕えています。はいこれで良い？くだらない。」

「完璧ですわ、私の分は。水野捲りなさい、カエデさんが書いたバージョンが後ろのページにありますわ。それを読み切れば罰ゲーム終了です。」

「私は雪ノ下陽乃、花のJDでおっぱいはFカップもあります。あだ名はF乃と言われ」

陽乃が読み上げているとカエデが突然大きな声で止めた。

「カーツト!! 陽乃さん全然だめ、全くエロくない。なんで直立不動なの、もつと体を動かしてエロい体制で、もつとエロくしないと合格にはできません。」

「今回の罰は読み上げるだけ、体を使う必要はないわ。それとも日本語の意味を理解で

きないの?」

「それは・・・。」

陽乃の正論に対して盛り上がっていたカエデは大人しくなり、騒がしかった他の部員も静かになった。しかし、ここで松原が口を開いた。

「陽乃さん私の罰をここで発表します。ただ発表する前から実行されていていましたが、今あえて言います。私たちの撮影対処となることです、簡単に言うとなら私たちの言うポーズを取りなさい。」

「ちよつと待つて!!。これ録画してるの!?!」

「はい、あなたが部屋に入り明かりがついた時から録画しています。メイド服を着てる時点で罰ゲームは開始されています。その間なら事前に罰を言う必要もないでしょう。あとあまり、抵抗するとペナルティを与えますわよ。」

形成が逆転し、陽乃が静かになり部員たちが騒ぎ始めた。特に先ほど陽乃に口喧嘩で負けたカエデは陽乃に色々注文し、罰ゲームが再開される。

「私は雪ノ下陽乃、花のJDでおっぱいはFカップもありり何でも挟めます。あだ名はF乃と言われています。」

陽乃はまず腕後ろで組み、次に腕を前に持つてきておっぱいを挟み大きさを強調した。

「また、私は胸だけでなくお尻にも自信があります見て下さいこの張り。他にも見この脇や」

陽乃は後ろを向きお尻を松原達に突き出し、パンツが見えない様に小さく揺らした。今度は腕を上げ横乳と脇を見えるように体の向きを変えた。

「ムチムチな太ももも最高でしょう。」

最後にガーターベルトを履いている太ももを強調するため、短いスカートをパンチが見えるギリギリまでたくし上げた。

「陽乃さん完璧です。本当にエロいです最高です。」

カエデは興奮状態で騒ぎ他の部員や松原でさえも、少し引いていた。その間に陽乃は部屋に戻ろうとしていた。

「これで終わりよね。部屋に戻って着替えてくるわ。」

「まだですわ。まだ写真撮影が終わってません。」

「何言ってるの、読みながらポーズとつたよ、撮影なり録画していない、そつちが悪いんでしょ。」

「そうですね残念です。では元の部屋に戻りましょうか」

全員が部屋に戻ると陽乃は自分が着ていた服がないことに気づき、松原達に文句を言った。

「ふーん、言葉で言い負かせないから実行手段を取るわけ。やることが小物の考えね。」  
「いえ隠していませんよ、さっきの撮影の部屋にあります。私たちが止めたのに陽乃さんが勝手に出て行ったからですよ。だから人の忠告を聞いた方が良いと言ったのに。」  
「そう、それは申し訳なかつたわね。」

陽乃は部屋を出ていき、さっきまで居た部屋の入口まで来た。そして扉を開けようとする。鍵が掛かっていた。何回扉を何回押しても開かなかつた。後ろから松原達が来たので、陽乃は開けるように言った。

「ここ開けて頂戴。」

「そう言われましても、私たちには開けるメリツトがないです、困りましたね。」

「そういうこと、あなた本当に正確悪いわね。」

「でもこれだけで私の言うことを理解する陽乃さんも大概ですよ。それではお願いしてみても、もちろん一回しかチャンスはないですよ。」

「もつとHな写真撮らない?」

腰を曲げながら胸元を緩め、松原に白いブラが見える体制でお願いした。

「そこまで撮りたいのなら仕方無いですね。水野開けなさい。」

どうにか陽乃は部屋に入ることができたが、ここから地獄の撮影会が待っていた。

まず先ほど同じように陽乃だけステージに立たせた。

「そうですね、まず神経衰弱の時みたいに今身に着けている下着の説明をお願いします。

あと前回と違って家の中なのと、その服装なので、わかりやすく説明してください。」

「まずパンツですが白のバックレースです。中央には黒のリボン」

陽乃はスカートたくし上げパンツが見えるようにして説明を始めた。

「そして後ろには白のレースがついています。」

先ほどと同じように腰を曲げてお尻を突き出す、今回はスカート持っているため臀部が丸出しになっていた。カエデは陽乃に接近しカメラを連射していた。それでも陽乃はリンとした表情で説明を続けた。

「次にブラですが、こちらの色は白でホルターネックになっています。」

松原にお願いした時よりも、さらに胸元をブラがほとんど見える位置まで開けた。

「これで下着の説明は結構ですわ。では下着の写真撮影といきましょうか。カエデさんお願いしますね」

そういうと、松原たちは陽乃に近づいたためにステージに上がってきた。

「はい、任せて下さい。陽乃さんこっちに来て、体育座りしてください。」

カエデが指をさした所は床が鏡になっており、座ったら鏡に反射してしまう場所だった。それでも陽乃は拒否権がないため大人しく従うしかなかった。

「陽乃さん良いですね、では足を広げていってください。」

陽乃は閉じていた足を開いていきM字開脚の体制になり、下着が丸見えになった。

「おやおや、陽乃さん下着が丸出しですよ。嫁入り前なのに良くやりますね。」

「あなたの命令でしょ？嫁入り前の子がしないことを、命令するって矛盾してるわよ。もう少し勉強したら？」

「全く素直になりませんね。カエデさん次です。」

「はい。では陽乃さん今度は四つん這いになって、お尻をこっちに向けて下さい。」

陽乃は命令通り四つん這いになった。しかしスカートの丈が短いため、お尻の半分しか隠れず白のパンツが見えていた。それを見たカエデはさらにテンションが上がった。

「チラリズムですか！。エロエロですよ！。ではそのままお尻を円を書くように回して下さい。お!!これまたエロです。陽乃のさんエロの化身ですか最高ですよ。」

「陽乃さん、カエデさんがあなたを誉めているんですよ、お礼の言葉位言っても罰は辺りませんよ。」

「カエデちゃんありがとうね。」

陽乃は故意に不機嫌な声でお礼を言った。松原はため息を付いた。そこに今までずっと黙っていたスミレが松原に耳打ちを行い、聞き終わると松原はニヤつと笑い水野に何か命令をした。

「水野の頼みましたよ。カエデさん少し陽乃の面倒見といてね。少し用事ができたわ。」



「合点承知の助!!陽乃さんヨガの猫のポーズをお願いします。」

陽乃は四つん這いから、さらに腰だけを下ろした。結果お尻をさらに強調する姿勢になった。そして松原がテニスボールと同じ大きさのプラスチック製ボールを持って部屋に帰ってきた。

「陽乃のさん、今あなたは松原家のメイドです。」

なのでお手伝いをして下さい。このボールをカエデさんの所に持って行って下さい。」

「いつから私はあなたのメイドになった。何メイド服着てる人は全員あななのメイドなの?それなら秋葉原行って来なさい、そしたらあなたの命令を聞いてくれるメイドが一杯居るはずよ。」

「本当に文句しか言いませんね。まあでもそちらの方が面白いので良いですが。では私が直接持っていきますわ。」

そうするとカエデの方向に歩き出した。しかし陽乃はお尻を向けているので気がつくことはなく突然肛門を触った。

「キャ／＼何すんのよ!?!」

陽乃は突然の事で立ち上がり抗議をした。しかし松原は笑顔を浮かべて反省の色は

全くなかった。

「あらあら、随分可愛らしい声を出すじゃないですか？性格以外はやはり完璧ですね。でも今から調教して治してあげますわ。」

陽乃は声には出していないが出来るもんならやって見ろよとオーラを出していると、  
またも松原が不敵な笑みを浮かべた。

「では陽乃さん残念ながらペナルティです。カエデさんは四つん這いになる様に指示を出したのに、指示を無視して立ち上がり撮影を故意に邪魔しました。」

「はあ？あたながいきなり触ってくるからでしょ？もう数分前の記憶なくなったの？」  
「文句を言うのは勝手ですが、このままだと永遠に罰ゲームが終わりませんよ？」

「わかったわ。何をすれば良いの？」

「はい、言い方が違いますね。本気で謝って下さい。あと2回」

「・・・お願いですお嬢様、罰を教えてください。」

「次でラストです。今までの経験で何を言えば良いのかわかっているでしょ？先ほどこかわいい声でお願いしますね。」

「チィ。お願いします松原様。命令違反したダメメイドの陽乃に罰を与えてください。」

「合格です。いきなりそんな甘えた声を出せるなんて驚きました。では陽乃さん後ろで手を組んで、背中をこちらに向けて下さい。そして次、メイドとしてふさわしくない行

為をするとどうなるか考えて下さい。」

陽乃は命令通りに従い後ろで手を組み、背中を向けた。

そうすると松原は陽乃の両手にSM用の手錠をかけ、さらに腰のヒモとも結び、手を腰から動かせないようにした。

「陽乃さん挽回の機会をあげましょう。先ほどボールをカエデさんの所に持って行って下さい。」

「承知しましたご主人様。」

陽乃は手が後ろにあるので背中を向けてボールをもらおうとすると、松原は陽乃のスカートを捲り、お尻を叩いた。

「陽乃さん、あなたはメイドですよ主人に背中を向けてはいけません。」

陽乃はすぐに声を出して謝ったが、その目は今にも人を殺しそうな鋭い目をしていて。それでも一瞬で殺気を殺し、この状況を打破することを考えた。

（どうすれば良いのよ、後ろに手があるから受けとれ無いじゃない。一体何をさせたいの？）

「おや、珍しく答えがわかって無いですね？それならヒントをあげましょう。カエデさんがあなたに言わせた言葉を思い出して下さい。」

（私は雪ノ下陽乃、花のJDでおっぱいはFカップもありり何でも挟めます。あだ名は

F乃と言われています。

まさか、胸を使えってこと!?)

「おや気づきましたね。それでは答え合わせです。言つて下さい。」

「ご主人様、両手が使えないので、そのボールを陽乃の胸に置いて下さい。」

「やれやれ。不埒なメイドを持つと困りますわ。それでは胸を出しなさい。」

陽乃は黙つて背筋を伸ばし、胸を大きく張りボールを待ったが、来たのは松原の手だった。松原は両手で陽乃の胸を揉み始めた。

「ちよつと待つて、アア……こらヤメエ。ダメ」

「おおーなんて柔らかいの、そしてこの大きさ。これならどんな男でも落とせるわよ。」

陽乃は逃れようとするが手が腰にあるため、体を左右に振つて抵抗した。ただその程度の反撃で逃げられるはずもなく松原が満足するまで揉まれることになった。

「すみません。陽乃さん、いきなり胸を出されたので揉んで欲しいかと思いましたが、もう陽乃さんからお願ひされないと触りませんわ。はいボールです。3分以内で走らず、落とさずお願ひしますね。それではよろしく。」

松原はボールを陽乃の胸に置くと松原は笑顔で手を振つた。陽乃はボールを落とさないように歩こうとするが、ボールは右往左往してしまい歩くことができない。

陽乃はこのゲームの攻略方法を思い付いたが、ボールを落としてしまった。

「はい失敗です。陽乃さんお使いも出来ないのですか？今のお使いなら4歳でもできま  
すよ。」

「申し訳ありません。ダメメイドにもう一度チャンスを下さい。」

陽乃はこの最低なゲームの攻略方がわかったため、松原にプライドを捨て、もう一度  
お願いした。それを見て、陽乃が正解をわかったと松原は理解しボールをわざと先ほど  
と同じように胸に置いた。

「お嬢様、陽乃の胸の中にボールを入れてください。」

（本当にフザケルナ。いつかヤル。）

もはや怒り浸透の陽乃だが表面には出さず、精一杯の笑顔でお願いした。松原は陽乃  
の胸にボールを入れるために、服と一緒にブラも引っぱりボールが胸に直接当たるよう  
に入れた。

「それでは陽乃さんお願いします。」

陽乃は先ほどとは打って変わって順調に歩き出したが、松原がボタンを押すと胸の  
ボールが振動し始めた。

ブウウウーーン

「キャ／＼ ちょボールが、震える。」

陽乃はボールはどうかしようとするが、胸の奥にあるため刺激から逃げるができ

ない。陽乃は一瞬でボールを出すのを諦め、カエデの元に行くことにした。

カエデの前いき、膝立ちの姿勢になった。

「カエデ様、陽乃の胸の中にあるボールを受け取ってください。」

「うわ、なにこれマシユマロですか柔らかいです。」

カエデは陽乃の胸に手を入れ、腕全体で陽乃の胸を体感していた。ボールを掴み服から取り出そうとした時、ボールが乳首にカスってしまった、陽乃は喘ぎ声をあげてしまった。しかしこれでお使いは終了した。松原は陽乃に近付き、腕の拘束を外した。

「陽乃さんお疲れ様です。罰ゲームは楽しんで頂けましたか？」

「これを楽しいと思うなら、あなたがやってみれば？」

「嘘言わないで下さい。気持ち良さそうに何回もHな声を上げてたじゃないですか。」

「気持ちよくないし、喘ぎ声なんて出していないわ。耳がおかしくてそう聞こえたんじゃない？」

「だから何回も言えば分かるのですか、あなた程度が反抗すれば余計に罰が酷くなると。では陽乃さんテーパーの上に乗ってください。感じて無いことを証明してください。感じていないならパンツにシミがないはずです。感じたなら、パンツは見せたくて結構です。」

陽乃はテーブルに座りゆっくりと足を開いていった。陽乃はシミなど無いと思つてゐるが、心の奥底にもしかしてと思ひ怖かつた。それでも雪ノ下陽乃が感じてしまひパンツを濡らしたと言へる訳がなく。濡れていないと証明するためにパンツを見せて証明するしかなかつた。

(あんなの気持ち良くなかつた。お願い濡れてないで。)

陽乃は足を開げると、そこには白いパンツがあるだけだつた。松原は顔をしかめ、それを見た陽乃はニヤつと笑い足を閉じテーブルから降りた。

「これで終わりよね？それじゃ着替えるから。」

陽乃は自分の服を持って部屋に戻つていった。

## 5. 決壊

（土曜日）

陽乃が着替え部屋に戻るとテーブルが置かれ、晩御飯が並べられていた。陽乃は水野に案内され席に座った。

長方形の机で、お誕生日席に松原・陽乃が座り他の人は横に二人づつ座っていた。

そして何事もなかったように、晩御飯が開始された。

「陽乃さん、写真撮影はいかがでしたか？でも安心してください、このデータは松原家にかけて流出しないように管理しますわ。」

「すごくありがたい提案ね、管理が面倒だから消去しても良いわよ？」

「いいいえ。私の宝なので消去しませんわ。あと如何ですか水野が作った料理は？この松原家でも一二を争う腕前なんですよ。」

「そうね。確かに美味しいわ。目の前にあなたが居ないともっと美味しかったと思うけどね。」

「全く、いつまで怒ってるのかしら。もっと冷静にならないとまた負けますよ。」

「あなたが人を怒らすのが上手なせいよ。」



そんな殺伐とする中で、食事会は進んでいった。そして松原から提案が出された。

「陽乃さん今から勝負をしませんか？陽乃さんが勝てば、いつ帰ってもかまいません。ただし負けた場合は明日一日は絶対服従です。いかがですか？」

「どんなゲームで勝負するの？」

「人の尊厳をかけた戦いとだけ言っておきます。」

「少し考えさせて。」

（はつきり言って、この勝負を受けなかったら二日間何をされるかわからない。でも負けたら絶対服従で一日。どちらを取るか・・・）

「その勝負受けるわ。私も負けたままなのは嫌だから。」

「では陽乃さんルールの説明をします。勝負の内容はインディアンポーカーです。」

カードの強さはJ<1<13<12<11<10<4<3<2です。今回はマークの強さは一緒にしますので、数字だけの勝負です。そしてカードは毎回シャッフルします。

そしてここからが重要です、ベットするものですが、液体が入っているコップをコイン代わりにします。ゲームに負けたら自分と、相手の分も両方飲みます。引き分けの場合は自分がベットした分を飲みます。そして下りる場合は相手のベットの分を飲みます。この透明なカップには水と遅効性利尿剤の2種類で私にもどちらが入っています。

「かわかりません。」

「結果は先に漏らした方の負けってことね。たしかに尊厳をかけたゲームね。」

「それでは逃げますか？ゲームが始まれば、どんなことがあるかと逃げることはできませんよ。」

「冗談やってやるわ。」

「わかりました。それでは1度部屋に戻り着替えて来て下さい。漏らしたら大変ですからね。」

陽乃は松原の言うとり部屋に戻り、着替えたあと松原と共に部屋に入った。その部屋は中央にテーブルがあり、その近くのテーブルには透明な液体が入った小さいコップがたくさん置かれていた。

「やはり何を着せても陽乃さんは似合いますね。」

松原は素直に陽乃のことを褒め称えた。陽乃は紫のフリルドレスを着ており、スカートは膝丈までであるが、下の方はレース状になっており、太ももがうっすらと見えている。胸元は生地がクロスしているデザインで胸をより強調していた。

「そういの良いから始めてよ。」

「人の賛辞は受け取つといた方が良いのに、それではゲームを始めますわ。ここであなただのプライドを絶対に潰してあげます。」

〈1巡目〉

陽乃の数字は5　ベットは2

松原の数字は4　ベットは1

松原が下り、グラスを2杯飲むことになった。

〈2巡目〉

陽乃の数字は1　2　ベットは2　0杯

松原の数字は9　ベットは1　2杯

双方下りなかったため松原が3杯に飲むことになった。

〈3巡目〉

ここまで負けなしの陽乃が大きな失敗を犯す。

陽乃の数字は2　ベットは4　0杯

松原の数字は3　ベットは3　5杯

ここで双方強気に出たが結果、陽乃の負けで一気に7杯を飲むことになった。

〈8巡目〉

(なにこれヤバイ、気を緩めたら漏れちゃう。これじゃ長期戦は無理ね。早く決着を着けないとダメ。ここは諸刃の剣だけドレート高くして勝負するしかない。)

ここから陽乃はレート高くしていき、松原に多くの液体を飲ませた。

陽乃の数字は1      ベットは6      12杯

松原の数字は6      ベットは4      18杯

ここで松原が下り4杯飲むんだ。

（9順目）

（おかしいわ、何で私よりも多く飲んでるのに平気なのよ。何かおかしいわ。）

陽乃は松原の表情に違和感を感じた。自分より多くの液体を飲んでるが、今だに汗すらかかず普通の表情でゲームしていた。

「ちよつと待つて。おかしくない？何であなたはそんな平気な顔で勝負出来ているの？」

「おやおかしいですか？だつて特に体に異変がないですもの。」

「まさか私が飲んでる分だけ利尿剤を入れてるの？」

「そんなことできませんわ。仮に利尿剤入りとわかつててもゲームに負ければ私が飲む羽目になるので意味ないですわ。」

（それでも絶対に可笑しい、最初に液体を飲んだのは向こうよ私が効いているに向こうが効かないのは変よ。）

私がアイツより薬をとつてないと説明できないわよ。

私の方が先に・・・？ まさか!?

「あなた晩御飯の時に私の料理に薬入れたわね。」

「はて、何のことでしょう?」

「知らばくれないで、そうじゃないと可笑しい。この遅効性利尿剤は一時間位で効き始める薬で、私は晩御飯の時にすでに飲まされた。例えあなたがなん杯飲んでも薬が効き始める一時間以内に勝負を決めたら良い。だからインディアンポーカーを選んだのね。これなら一回ごとのゲームが短くてすむから一時間以内で決着はつくわ。」

「お見事です。ただゲームが始まる前に気がつけば完璧でしたね。ゲームが始まった以上。逃げることは許されませんよ。」

松原がボタンを押すと陽乃椅子からアームが出て来て足と太ももを拘束した。

「なによこれ!」

「逃げないようにする措置ですわ。安心してください。ゲームが終われば外れますし、ゲーム中は手を拘束はしません。ゲームができなくなりますからね。」

松原はゲームを無理に再開した。

陽乃の数字は6    ベットは2    12杯

松原の数字は6    ベットは3    24杯

引き分けのためお互いかけた量を飲んだ。

111 順目 決着がついた

陽乃の数字は4　ベツトは4　14杯

松原の数字は5　ベツトは5　27杯

ここで陽乃は勝負したため9敗飲むことになった。

しかしこれ以上飲めば漏らしてしまう陽乃はグラスに手をかけることができなかつた。すると松原が再度ボタンを押すと、今度は陽乃手をアームで固定し完全に動けなくした。

「陽乃さん提案です。今なら降参すれば奴隷期間を2日にすることでゲームを降りて結構ですよ。」

「はあはあ、誰が降りるの?」

「そうですか。水野の陽乃さんの手伝いをしてあげて。」

「承知しました。」

水野は鼻をつまみ無理やり口を開けさせ、液体を飲ませ始めた。2杯飲んだときに松原はボタンを押した。すると陽乃の背もたれが少し倒れ、膝の部分が持ち上がり体育座りの姿勢になった。最終的な姿勢を予測した陽乃は抗議をしようとしたが、口を開けた瞬間に水野に液体を飲まされた。

「まだ4杯ですよ、半分も飲んでいないじゃないですか。もう諦めたらどうですか?」  
「絶対に嫌よ。」

松原は最後のボタンを押した。陽乃の足首と太もものアームが動き大開脚の姿勢になった。そして水野が椅子の後ろからスカートを持ちあげるとフリルがついた水色のパンツが丸見えになった。

「あらあら可愛らしい下着ですわね。これは確か陽乃さんの自前の下着ですよ？洋服は渡しましたが、下着は渡していませんので。」

陽乃は松原の質問を無視して、必死にお漏らしを我慢していた。

「質問しているのに無視する悪い子にはこうです。」

松原は陽乃の筋を下着越しに擦り始めました。

「アア、ン、ダメ今はダメ・アアア」

「おやおや可愛らしい声じゃないですか？少し触っただけなのに。それにしても可哀想ですねこのパンツ、まさか主のお漏らしを受けることになるなんて。」

「うるさい、黙れ。」

「良くこんな状況で強気な言葉が出せますね。あと陽乃さんこれで最後です。棄権しますか？」

「地獄に落ちろ」

その言葉を聞き松原は陽乃に5杯全ての液体を飲ませた。そしてついに堤防は決壊した。

チヨロチヨロと音がすると水色の下着が濃い青に変わっていった。松原は陽乃の下着を押すと、出てくるの液体の量が増え、床に小さい水溜まりはできた。

「おや、陽乃どうしたんですか？下着がびちゃびちゃですよ。」

松原は陽乃の湿った下着を押し、陽乃の様子を観察した。

「全く降参してれば、こんな恥ずかしい所を見せずにすんだのに。おっと、もうそろそろ一時間経つわのでお花を積みに行きますわ。水野、陽乃さんを部屋に返すのと掃除もお願いね。」

松原は部屋を出ていき、トイレに向かった。

すると勝敗が決まったため陽乃を拘束していたアームが外れ、重力に従い足が水溜に着いたが陽乃はずっと顔を伏せ涙を浮かべていた。水野はもくもくと片付けをしており、陽乃に声をかける人はいなかった。



## 6. ブルマ

（日曜日）

陽乃は布団の中で目を覚ました。しかしいつも自分が寝ている部屋でない気がつき、どこに居るのか考えていた。そして昨日の敗北を思い出し、自分が松原家に居ることを思い出した。そして服装を見ると、水色のブラジャーだけを身につけ、下には何も着けてなかった。昨日の敗北の後、部屋に戻り濡れていた服とパンツを脱ぎ、すぐに寝てしまったからだ。陽乃は昨日のことに腹を立てたが一先ずお風呂に入り汚れを落とすことにした。

お風呂に入り体を拭いているとドアがノックされた。

「陽乃様、お目覚めですか？朝御飯はいかががいたしまししょうか？」

「起きてるわ。私にはどんな選択肢があるの？」

「はい、お嬢様様達が食べている大部屋で一緒に食べるか、この部屋で食べるか、庭で食べるかの3種類です。」

陽乃はまだ松原と顔を合わす気にはなれなかったので、自分の部屋でご飯を食べるよう決め、水野に告げた。

数分後、水野が食事を持ち部屋に入ってきた。

そして美味しそうなパンケーキやサラダ、スープが並べられた。しかし陽乃は昨日、料理に薬を仕込まれたことを思い出すと手が進まなかった。水野は陽乃に謝りながらパンケーキを一口食べ、サラダやスープ等にも箸を着けた。

「これで信用されるかは陽乃様次第ですが、ご飯には何も入っていません。これは水野の命に代えても保証します。」

水野の行動と言葉を聞き、陽乃はご飯を食べ始めた。

「これもあなたが作ったの？」

「はい。」

「そう、昨日の言えなかったけど晩御飯も美味しかったわ。」

「ありがとうございます。」

会話になっていくか怪しいが、陽乃が食べ終わるまでやり取りは続いた。陽乃が食べ終わると水野は食器を持って出ていった。食後の一服としてベランダを見てみると、いきなり松原が入ってきた。

「おや、起きてるではないですか？水野に起きたら連絡するように伝えて置いたのに。まあ良いですわお漏らしさんお腹の調子は大丈夫ですか？また家の中で漏らされると大変なので。」

「あなたの顔を見たら気分悪くなったわ、休ませて欲しいから出ていった。」

「なるほど、それは日頃の運動不足から来ている体調の悪さですね。では運動をしますから着いて来て下さい。」

松原は陽乃の言葉を無視し、自分の用件だけを言った。陽乃は拒否したい気持ちで一杯だったが、今日は完全服従しなければならなかったため松原の後についていった。

↳ 豊の大部屋↳

陽乃は柔道着に着替えさせられた。最初は何か小細工があると疑ったが、普通の柔道着だった。そして豊が広がる部屋に到着すると、ど真ん中に道場着を着たツバキが腕組みをして待っていた。松原は陽乃に現状の説明をした。

「陽乃さん、あなたは1日中絶対服従ですが、何もチャンスが無いわけではありません。ゲームを行う場合勝てばあなたに何もしません。まあ負けたときは覚悟してくださいとしか言えません。」

「それで1番目はあの子なの?」

「はい。彼女は柔道であなたを倒すそうです。詳しいことはわかりませんが彼女に聞いて下さい。ではこれで、あなたを調教する方法を考えないといけないので。あと優しい私から忠告です。私たちは時間を分けてあなたを管理していますが、前の人が早く終わるか・負けると次の人がその分時間をもらえます。勝負をじっくり味わうことやわざ

と負けるのも戦略ですよ。」

松原は畳の部屋から出ていきツバキと二人になった。

「雪ノ下さん、私と勝負だ！内容は先に3本勝った方が勝ち。良いな？」

「良いわよ。本当に食後の運動に最適だわ。」

「では始めるぞ。」

数分後そこには気絶し倒れたツバキの姿があつた。彼女は陽乃と戦い一本も取ることなく敗れた。そして最後の一本背負いを受け意識を手放した。陽乃はどうしたものか考えたが彼女を助ける義理がないので道場着を着替え部屋に戻つた。

部屋に戻ると今度はカエデが陽乃のカバンを焦つていた。

「ちよつと何しているの？」

「ええ何で陽乃さんがここに、ツバキさんと道場に居るんじゃない?!」

「彼女なら畳とキスして寝てるわ。それより何をしているの？」

「えつとこれはその・・そうだ、陽乃さん勝負です。私は陽乃さんのポーチをこの部屋に隠します。それを10分以内で見つけて下さい。それでは一回部屋を出して下さい。合図があるまで入つたらだめですよ。」

陽乃は部屋を出てカエデが準備できるまで待ち呼ばれたので部屋に入つていった。

「ではスタートです。」

カエデのスタート宣言と同時に陽乃はカエデを捕まえ、ボディチェックをした。そしてお腹に入ったポーチを見つけた。

「はい、終了ね。」

「そんなく、陽乃さんに一杯衣装を着せて写真を撮りたかったのに……。お願いします。もう一度だけ勝負をしてください。」

「ちよつと待った。それは先に私ともうひと勝負してからだ！」

カエデが陽乃にお願いしていたときに、気絶していたツバキが復活し陽乃を追いかけて来た。その顔には暈の後が残っていた。

「もう一回勝負しろ。今度はレスリングだ。あと人を気絶させておいて、出ていくなんて非常識だぞ。」

「ちよつと待って下さい。ツバキさんの番は負けて終わってます。今は私の番です。帰って下さい!!」

「うるさい、お前も負けただろう！」

「あなたもうるさい。あなた達の痴話喧嘩なんて興味ないの、廊下でやって！」

陽乃は二人を廊下に叩き出した。それでも二人は喧嘩を止めずにいた。すると最後の部員であるスマイレが現れた。

「どうしたの？何でいきなり喧嘩してるの？二人とも負けたんだから今度は私の番でしょう？わーい長い間、陽ちゃんと遊べる。」

「スマイレどうしてここに!？」

「陽ちゃんと遊ぶ用意ができたからだよ。どうせ二人が負けるの目に見えていたし。だから陽ちゃんと遊ぶために一杯ゲームを考えて来たの。」

「待つて（下さい。）」

カエデとツバキが扉に手をかけようとするスマイレを止めた。スマイレはため息をつきツバキたちに提案をした。

「わかったわ、カエちゃん、ツバちゃんが考えた事を教えて、それも一緒に実行してあげる。ただし、あなたたちは負けたから私の命令には従ってね。あくまで私がメインだから。これで納得出来ないならサーちゃんの所に行つて抗議してきたら？まあサーちゃんが仮にダメって言つてもやるけどね。」

二人はスマイレの提案を聞き入れ、自分達が予定していた計画をスマイレに話した。そしてスマイレは大まかな計画を考えて陽乃の部屋に入っていた。

「陽ちゃん、こうして喋るのは初めてだから挨拶するね。私は風間スマイレって言うの、

よろしくね。」

「また新しい人？さつきまで喧嘩してた二人はどうしたの？」

「二人は負けたからどっかに行かせたよ。それがこつちのルールだからね。では陽ちゃん今度は私と遊びましょう？」

「拒否権はないんでしょ？やるわ。あと陽ちゃんって気安く呼ばないで。」

「えーなら陽姉ちゃんって言えば良いの？」

「普通に雪ノ下って読んで。」

「わかったわ、陽ちゃん。私に着いてきて？」

スミレは陽乃の言うことを無視して歩き始めた。

「じゃ陽ちゃん更衣室にカエデが用意した服があるから着替えて来てね。後私が買った下着も用意してるから、そっちも着替えてね。もし汚したら、罰を与えるからね。」

陽乃はスミレの言葉通り、更衣室に入り服を着替えようとした。その服はメイド服以上に入口を追い求めた物であった。陽乃は嫌々着替え畳部屋に向かった。畳部屋ではさつき居なくなつたカエデとツバキがジャージ姿でアイマスクを着けて正座していた。そして首には敗北者とかかれたパネルをぶら下げられていた。

「陽ちゃん着替え終わったんだ。サーちゃんも言つてたけど何を着せても似合うわね。しつかり見たいから手を頭の上で組んで欲しいな。特に胸をみたいかも、かも。」

陽乃は胸の前で腕組みをしていたが、頭の後ろで手を組んだ。結果陽乃の体を妨害する物はなく、しつかり全身を余すところなく見れるようになった。それを見てスマレは満足し、カエデに服のコンセプトを言うように言った。

「コンセプト言うのは良いんですが、アイマスクは外したらダメ何ですか？陽乃さんの姿が見えないし、写真が撮れないんですが・・・」

「何を言ってるの、あなた達は書いてある通り敗北者なのよ、かわいい陽ちゃんを見れるなんて思わないですよ。」

「ちよつとスマレ誰が敗北者よ。私は調子悪くて負けただけだ。何も考えず勝負して負けたカエデとは違う！取り消しなさいよ、今の言葉！」

「ツバキさんが簡単に負けたせいで私の計画がダメになったんですよ！ツバキさんがくらくら」

「二人とも止めなさい。あんまりうるさいと、お・仕・置・き・部・屋・だ・ぞ。」

それを聞くと二人は黙り混み、カエデはスマレの命令通りに服の説明を始めた。

「服のメインは体操服です。ただし昭和時代のですけどね。現代で言うところブルマ！しかもただのブルマではありません。今回はエロのみを追及して作りました。まず靴下は踝丈の靴下を選び、ブルマと合わせて陽乃さんの色白の足を全て見せます！そしてブルマはわざとワンサイズ小さいことでヘソの下から太ももの付け根ギリギリ丈にな



るように選びました。また小さくすることで、陽乃さんのお尻も美しく見ることができ  
ます。」

スミレは陽乃のを立たせたまま、円を描くように歩きながら写真を撮り始めた。

「シャッターオンが聞こえるですが!?!後で写真は見せてもらいま」

「カエちゃん説明だけをして。それ以外は喋っちゃダメダメ。」

「はい、そして上半身ですが、こちらはちびトップスになっています。胸元までしかなく、おへそやお腹のクビレが出ないようにしています。以上です。」

「うん、ありがとう。なるほど、陽ちゃんは大きなおっぱいで服が浮くのを防ぐために腕組みしてたのね、じやないと今みたいに縞模様のブラが見えるもんね。でも安心して陽ちゃんの姿を見るのは私だけだからね。」

「何も安心できないわよ。何で安心って言えるのかしら。」

「うくん適当?ノリ?勢い?まあ私には関係ないから、ゲームを始めるよ。それでは一緒に、始・ま・る・ぞく。何で皆言わないの!?!私だけ恥ずかしいじゃん。」

「「だって何も聞いてないし。」」

スミレは他の人に抗議するが、そもそも他のメンバーは何をするのか聞いていないため、いきなり合わせると言われても無理である。スミレは恥ずかしくてなり、ゲームのための下準備をすることにした。

「では陽ちゃん問題だよ、運動する前にする事って何？そう準備体操だよ！それじゃ音楽かけるから始めてね。真面目にやらないとやり直しもあるからね。」

スマレは何処からともなくラジオを取り出し、スタートボタンを押した。

ラジオ：それでは腕を前から上にあげて大きく背伸びの運動。はい！1、2、3、4、5、6

「陽ちゃんもつと全身を使って大きく、大きく。そうそうそんな感じ。」

ラジオ：手足の運動1、2、3、4、5、6、7、8 1、2 3、4、5、6

「キャー陽ちゃん腕を上げたときに可愛らしい白とピンクの縞模様下着が見えるわよ」

（そんなの知ってるわよ。ていうか、あなたも知ってるでやらせてるんでしょう！）

ラジオ：腕を回します1、2、3、4、5、6、7、8

1、2、3、4、5、6

「陽ちゃんヤバイわよさつきよりブラが見えてるわよ。」

ラジオ：足を横に出して胸の運動横ふり斜め上に大きく5、6、7、8、1、2、3、4、5、6

陽乃の下着はフルバックタイプの下着であり、ブルマとほとんど同じ大きさなため、動かすとブルマの隙間から下着が見えてしまう。陽乃は下着を隠そうとしますが体操

の途中なので上手く直せないまま次の歌詞が流れた。

ラジオ・前後に曲げます柔らかく弾みをつけておこして 後ろ反りく1、2、3、4、

5、6、7、8く

「イヤーン、陽ちゃんハミパンしてわ。それにお尻を突き出して私を誘惑してるのく？」

その後もスミレは陽乃にわざとやらしい言葉をラジオ体操が終わるまでかけ続けた。

「どう陽ちゃん、柔軟できた？そしたら本格的な運動を始めましょ。こっちに着いてきてね。」

くトレーニング室く

スミレは陽乃を隣の部屋に連れていき、扉を閉じた。その部屋は同じトレーニングであり、色々な筋トレ器具が置いてあった。そして一面にカーテンがかかっており、それをスミレが開けると、隣の部屋が見えた。

「どうすごいでしょ？これマジクミラーで向こうの部屋を監視できるんだよ。それじゃルール説明よ。」

マイクを持ったスミレはゲームの説明を始めた。

ゲームは筋トレ3種目で勝負。陽乃が2回負けたら罰ゲーム、3回全て負けたら罰ゲームが重たくなる。

対戦相手は陽乃対カエデです。特別なルールとして全てのゲームを全力でやる。

体力を温存するためにわざと負けるのは禁止。全力でやったかは相手の回数 $2/3$ 以下だった場合ペナルティが発生する。

「以上よ。それでは1種目は腹筋対決。1分間に何回できるか数を競うよ。手は頭で組んで絶対に崩さないこと。崩して起き上がっても回数は0回だから気を付けてねー。」

## 7. 筋トレ

（日曜日）

スミレが提案した筋トレ対決の準備を各々行い、最後にツバキが横になりカエデが体で足を押さえ、同様に陽乃が横になりスミレが陽乃の足を押さえ準備が整った。そしてスタートの合図がなると両者一斉に始めた。最初は互角だったが次第に陽乃が優勢になり30秒を越えたときには、圧倒的に陽乃が有利だった。しかしスミレが動いた。陽乃が起き上がってくるとその顔にキスをした。

「ちよつ、何をするの!?!」

「ごめんね〜ついキスしたくなっちゃたの。それより早く再開しないと負けるわよ〜。」

「そういうことね。やっぱり初めから勝たすきなんてないじゃない」

そして陽乃が起き上がるとスミレは陽乃の体操着をめくった。

「あら、もう服を捲られることぐらいじゃ同様しないの…」

陽乃はブラが丸見えになっても腹筋を続けた。それを見てスミレはアヒル口になり、つまらないと呟いた。

「陽ちゃんにはもつときつい事しないとダメね。」

ラスト15秒を切った時陽乃は30回ツバキ35回だった。

「これでどう?」

スウッと陽乃の股を撫でた。

「はふううっ!!」

股を触られて体を上げてる途中だった陽乃は地面に倒れた。しかしスマレの追跡は続いた。

「皆、陽ちゃんの胸の柔らかいって言ってるけど、ブラ越しだといまいちな」

「ツ、く……あ、アアッ!」

倒れた陽乃にスマレは追撃を行った。陽乃の大きな胸を揉みながら呑気に感想を言ってる間にも1分間のゲームは終わった。

最終結果は陽乃35回、ツバキ42回だった。

「陽ちゃん残念でした。まずは一敗、でも今から全部勝てば良いんだよ?」

「でもどうせ、私が負けるように妨害するんでしょ?」

「うん。陽ちゃんはゲームに負けて罰を受けるか、降参して罰を受けるかの二択だよ。勝つって選択肢はないんだよ。」

スマレは次の種目の準備を始めた。

(松原が言ってたのは、この子のことだったのね。確かにツバキやカエデの方がゲーム

として楽だし、罰も軽そうだった。でもこの子は違う、クソよりによって、この子の罰の時間を長くするなんて。」

陽乃は松原の忠告を理解し、スミレとの対戦をどのように切り抜けるか考えていたが、まともな案が浮かばずに次の勝負が始まった。

「それじゃ2種目だよ。2種目はスクワットを1分間の数を計るよ。もちろん休みながらでもOK。ただし今回も手は頭の後ろで組んむ姿勢ね。」

陽乃とツバキは足を広げいつでもスタートできる体勢をとった。

「それではスタート！」

その掛け声と共に陽乃とツバキはスクワットを開始した。スタートを宣言した後スミレは陽乃の後ろに周り耳元で呟いた。

「やったね。今回は最初からだよ。」

スミレは陽乃のお尻を触り始めました。最初は撫でるように、時に力を入れて揉み、またアナルに指を入れ、その度に陽乃は力が抜けることになり全くスクワットが進まない。

「あつ……………ううん……………ああああん！」

「ほらほら早くしないと」

「はあはあ／＼」

陽乃はそれでもスクワットを続けようと腰を落とした先にはスマイレ指がありアナルに食い込んだ。

「はふううっ！」

とうとう陽乃は地面に倒れてしまう。

「陽ちゃん早く続けないと2敗しちゃうよ？」

「はあはあ、あなたが邪魔するからでしよが。」

「だって陽乃ちゃんが可愛すぎるのが悪いのよ。ほら立つの手伝うから。」

スマイレは陽乃に手を差し出すが、陽乃はよろめきながらも自分で立ち上がった。

陽乃はスマイレを監視しながらスクワットを始めたが、スマイレはわざとゆつくりと手を

陽乃の露出している腰に持っていた。

「陽ちゃんはくすぐりに強い？」

「やるならやりなさいよ、どうせ何を答えくう、あつはつはつは。」

「正解、何を言ってもくすぐるわよ。それく今度は脇だよ。」

陽乃はスクワットどころか立つの精一杯な状況で体を揺らし抵抗した。しかし陽乃の頑張ります虚しく、一分が経過してしまった。陽乃8回、ツバキ35回。

「いやく満足、満足。では最終決戦だよ。今まで腹筋、下半身とくれば最後は上半身。そんなわけでチエストプレスを使って大胸筋を鍛えよう！」



ツバキと陽乃は筋トレ器具に座ろうとすると、スマレが陽乃を呼び止めた。

「陽ちゃん何か忘れてない？」

「……何？」

陽乃は気がついていているがわざと言わなかった。もしかしたら相手が忘れていている事を期待したからだ。

「ペナルティだよ、ペナルティ。スクワットの数ツバちゃんよりずっと少なかったよね？ペナルティ受けないと。」

「……。」

スマレはペナルティを陽乃の耳元で呟いた。陽乃は驚いたが、自分に拒否権がないため更衣室に戻って行った。

陽乃が戻ってくると白とピンクの縞模様のブラを持って出てきた。スマレはブラを受けると陽乃を器具に座らせた。

「まだほんのり暖かくて、陽ちゃんの甘い匂いがするよ。新品を勝ったのに、短期間でこれだけ匂いを着けるとは陽ちゃんフェロモン出すすぎだよ、エチエチさんだ。これを吸うだけオナニーできちゃう。」

「そんなことは良いから早く始めて。」

「もう、連れないなくではポチツと。」

そうすると器械からアームが出て陽乃の手と足、腰をロックし立てないようにした。「それじゃ一分間始まるわよ。スタート!」

陽乃はまず一回自分の体の正面まで腕を持つてくると、力を抜き、体の側面まで腕を持つていった。

その直後にスマレが陽乃の正面に座り、陽乃の首に吸い付いた。

「チュウウウウウツパ。陽ちゃんの汗美味しいよ。」

「そのままそこに居なさい、思いつきり挟んであげる。」

陽乃は力を込め、器具で挟もうとすると、スマレは陽乃の乳首を突ついた。

「ひゃあん。」

「全く危ないじゃないの。」

「普通に考えたら、そこに居るあなたが悪いでしょ。」

「そんな悪い事を言う子にこうだ。」

スマレは陽乃の胸をもみ始めた。

「おお。柔らかい、ブラを取るとこんな感じなんだ。」

「くっ、人の胸を勝手に触るな。」

陽乃はもう一度スマレを機器で挟もうとするが、今度は乳首を摘ままれ失敗した。

「あれれ、陽ちゃん、服の上からでもわかる位突起してるよ。そんなに気持ち良かった。」

た？」

「はあ／＼：はあ／＼……はあ／＼。」

「気持ち良いのかつて聞いてるのに無視するんだ……」

スミレは陽乃の乳首の周りを円を書くようになぞり始めた。

「くううくう」

「お、感じてるのかな？」

「気持ち悪いだけよ／＼。」

「そっか、なら気持ちいいこととしてあげないかね。」

スミレは陽乃の体操服を捲ると、白い豊かな胸があり、先端には牡丹の蕾のような紅をふくんだ冷たい丸さがある乳首があった。スミレは乳首に狙いを定めるとシヤブリついた。ベロで乳首を舐めた。

「あつく。」

歯で甘噛みを行いだから、逆の乳首は手で弄り

「ひっ！ あっ、ああんんっ」

おもいつきり吸い込んでみたり

「ああああっ!!」

最後に噛むのを止め、2つの乳首に指でどうしに弾いた。

「くううううっ!!」

陽乃はうつむき、タイムリミットが訪れ勝負は決まった。陽乃は2回、ツバキ40回。陽乃の3連敗が決定し罰ゲームが確定した。

## 8. 有酸素運動

陽乃はスマイレの妨害工作によって3連敗となり、ペナルティと罰ゲームを受けることになった。陽乃にペナルティを告げるとスマイレは隣の部屋に向かった。

「カエちゃん、ツバちゃんありがとうね。これで君たち2人の出番は一旦終わりだよ。それじゃあね。」

この言葉に二人は抗議したが、スマイレは聞くきもなく陽乃が居る部屋に戻っていた。「では陽ちゃんペナルティどうぞ。」

陽乃はスマイレを睨みながら、ブルマに手をかけブルマをゆつくりと下ろした。脱ぎ終わったブルマをスマイレに渡し、手を腰に組んだ。

「良いわね、続々するわ。乳首が体操着からもわかるわ。それにおっぱいも下乳見え見えよ、運動すれば全部見えるね。そしてピンクと白の縞模様のパンツが幼い印象を受けるけど、体のエロさとのギャップが際立ってすごいわ。やっぱりカエちゃんはこういうの得意よね。」

「この、変態／＼早く罰ゲームを言いなさいよ／＼」

「なあに？ そんなに罰ゲーム受けたいの？ 安心してね、一杯考えて来たから。まずは

有酸素運動の罰ゲームよ。筋トレした後には有酸素運動するとダイエットに効果的なのよ。ではこのマシーンに乗って。」

スマレはエアロバイクに陽乃のを股がらせると、ボタンを押した。まずペダルで足を拘束し、ハンドルで手首を拘束した。これで陽乃は降りることが出来なくなった。

次にボタンを押すとサドルが上がっていき、ペダルを漕げるぎりぎりの高さに設定された。

「では陽乃ちゃん、時速10 Km以上のペースで漕いでね。女性の平均時速が12〜14 Kmだから余裕でしょ？10 Km以下になるとペナルティ。15分連続で漕ぎ続けたら成功で1時間休憩ね。それではスタート。」

陽乃はスタートと同時に自転車漕ぎ始めた。

順調にスピードが上がっていき15 km/hまできた。

（少し速いかもしいけど、ギリギリのスピードで漕いでたら妨害された瞬間に10 Km/hを切る可能が高いわ。体力的には余裕だから15 Km/hをキープするペースが最適ね。）

スマレは陽乃が考えていることをわかっているんで、わざと追い詰める言葉をかけた。

「もう陽ちゃん、女の子がそんな怖い顔したらダメだぞ。私が陽ちゃんを笑顔にしてあ

げる、いくよ。 ティー！」

「くつくつく……あ、あはあああはああつはあああー!!。」

スマイレがボタンを押すとペダルから毛が出現し、陽乃の足の裏をくすぐった。陽乃は足を拘束されているため逃げることに出来ないくすぐり責めが始まった。

「やつと陽ちゃん笑顔になった。気持ちいいでしょ?」

「ぜんぜんつあはあああは…気持ち良くううあはああは、ないわあああ!。」

「それならこれはどうだ!?!」

スマイレは頑張つてエアロバイクを漕ぐ陽乃の後ろに周り、無謀な横つ腹を触った。

「ホレホレく。スクワットの時に思ったけど、陽ちゃんはくすぐりに弱いね。それれこしよこしよ。」

「ちよつと待ちな、あくつはつはつは!や、止めなさいいいい!。」

(息ができない、このままだとゲームに失敗しちゃう…)

陽乃は頭を振つたり、腰を動かしたりどうにか逃げようと体を必死に動かしたが、手足が拘束されているため逃げることはできなかった。ただ暴れた結果服が捲り上がりおっぱいが丸出しになってしまったが今の陽乃はそれどころではなかった。とうとうくすぐりによつて力が入らず漕ぐ速度が遅くなり10Km/h付近になろうとした。

「おつと危ない危ない。」

スマイレは陽乃から手を離し、足をくすぐっていた毛も止めた。

「陽ちゃんお願いがあるの。私陽ちゃんが失禁してるところ見たいの、もし見してくれるなら罰ゲーム終わらせるよ?」

「はあはあ、誰が人の目の前でするもんですか。」

「やっぱダメか・でもこのままだとずっと罰ゲームを受けることになるわよ。どうせ陽ちゃん、このゲーム失敗するし。」

「そんなのやってみないとわからないじゃない。」

(とにかく時間を稼いで、体力を回復しないと。

制限時間はあと6分、さっきのくすぐりを耐えるのならあと1・2分は稼ぎたい。)

「そつかく。じゃもし陽ちゃんが勝手に失禁したらもつと酷いことしちゃうね。」

「良いわよ。もし失禁しなかったらあなたに罰を受けてもらうわ。良いわね?」

(もう少し、あと少し時間を稼げたらクリアできる。)

陽乃はできるだけ会話を伸ばし、体力と気力を回復させ、制限時間も消費させた。しかしスマイレこの状況でも不適に笑みを浮かべた。

「うん、全然いいよ。じゃ陽ちゃんの体力も大分戻ったし、さっきより強くくすぐってあげるよ。」

スマイレは陽乃が抵抗できるようにわざと話を長くし、陽乃の体力と気力を回復させ



た。スマレは再度くすぐりのボタンを押し、陽乃の足裏の毛を動かし始めた。さらに自分も羽を持つて陽乃の脇や横つ腹をくすぐった。陽乃は体を揺らすが逃げれず、露出しているおっぱいだけが大きく揺れていた。

「ふひひっ、だめっ、だめだめだめええ!!きやあっはっはああああ」

(ダメやつぱり耐えられない!)

「ほれほれ、ここが良いのか?それともこっちか?」

「ちよつと待ちな、あゝっはっはっはっは!や、止めなさいいいい!」

(さつきよりくすぐりたい、ダメ力が抜ける・・・)

「はい、頑張つて。あと2分で陽ちゃんのクリアよ。」

しかし陽乃はすでに足が止まつており、10Km/hを下わつてしまった。ゲームオーバーとなり、スマレはくすぐるのを止め、足の毛も止めた。

「陽ちゃんどうする?今からでも失禁を見せてくれるなら次のゲームを止めるわよ。」

「はあは何度も言わせないで。絶対に嫌よ!」

「残念だよ。では気を取り直してゲームを開始するけど、引き続きエアロバイクを使うかその体制ね。その代わり、水とか欲しいなら言つて、持つて行つてあげる。あと優しいから服を直してあげる。しかし本当に残念だなく、陽ちゃんのお漏らし見たかったの・・・」

スミレは残念と言っているが、最初からプライドの高い

陽乃が見せるわけないと知っていて交渉をしている。それはスミレの計画のために必要であるから行っている。

（うん、うん。サーちゃんが言ってた通りプライドが高いからすぐこっちの言っただけのことを言ってくれ。）

あゝ陽ちゃん欲しいな、でも取ったらサーちゃん怒るし、サーちゃんも一緒に調教するしかないかな？

スミレは少し考えたが、今は陽乃のに集中することに決めた。

「よし。陽ちゃんでは2回戦だよ。ルールはさつきと一緒だよ。15分間頑張って！」

「待って。まったくすぐられるの!？」

「そうよだ、さつき言っただよ？ずつと罰ゲームが続くって。今度はギリギリで何回も止めて、最後の最後で失敗するパターンにするわ。でもお願いされたら、考えちゃうかもなく。」

陽乃は地獄のようなくすぐりを受けたくないが、そのためにはお願いしないとイケない。陽乃は考えた。

「条件は何？」

「うん。どうしようかな。あつそうだ、何でも私の命令を一つ聞いて欲しいな。」

サーちゃんはお願ひ聞いてもらえたから不公平だよ。私のも聞いて。」

(さいやくな条件ね。これなら小便している姿を見せる方がましよ。何に悪用されるかわからないわ。)

「ならくすぐりを受けるわ。何でも1つ言うことを聞くことを約束すると何をされるかわからない。それならくすぐられるってわかってる方がましよ。」

「うーん、そっかー。なら私が聞いた事を正直に答えるのは?これなら悪用もしにくいでしょう?」

「そうね、それなら受けるわ。」

「うん良いよう。大丈夫、大丈夫!!じゃ交渉成立ね!!?このゲームでは絶対にくすぐらないわ。では始めちゃうわよ。第二回エアロバイク選手権!スタート。」

陽乃は2回目のはずだがまだまだ元気で15Km/hのペースで漕いだ。

「でも油断してないかな。くすぐりはしないけど、それ以外はするよ?」  
スマレがボタンを押すと陽乃が乗っているサドルが振動を始めた。

「何よこれ!?!んん、あふう、ああ。」

「どう振動サドルの味は?なかなか良いでしょ?」

陽乃はどうかスピードを維持はできているが、呼吸は荒れ顔を赤くなっている。

「おっ偉いね。しっかり耐えてる。」

「はあ、この位全ぜんぜんうん、平気よ／＼。」

(刺激が強すぎる。パンツ一枚しかないから振動が軽減されない。このままじゃヤバイわ…。)

「そつかくでもさつきも似たような事を言つてたような…。まあ私には関係ないから良いけど。この振動は時々止まったり、強くなったりするから気を付けてね。」

「い、いやああん……ああああん……あふうう。」

陽乃はサドルが動く度に喘ぎ声が出てしまう。

スマレはサドルの振動も強くし、上下にも揺れるようにした。そのためクリとアソコに当たる振動が強くなった。少しでもお尻を上げて振動を逃がそうとするが、サドルを漕がないといけないため、お尻が上がらない。

(気を緩めると簡単にイっちゃう／＼。しかも止まったりするのが余計にきつい／＼)

スマレは陽乃の後ろに回り、意識が向いていない状態で胸を揉もんだ。

「くううん。今度は何!？」

「いや／＼。自分で指定しておいて何だけど飽きてきたから次のゲームに行こうかなと。だから早くリタイアしてね。」

スマレは陽乃の豊満な胸を揉み、時々乳首を指で挟みクリクリと摘まんだ。

「くううううつ!! はあはあ／＼ああああダメえええつ!!」

「おつ陽ちゃん乳首も弱いんだ。そういえば筋トレの時も簡単に乳首を勃起させてたね。」

「うるさい!! ああああうん。はあはあ／＼。」

「そんな強い言葉言つても、ちよつと弄れば簡単にヨガちやつて。ほらパンツに染み出来てきてるよ。」

(嘘!?)

陽乃は急いで下着を確認し、確かに一分湿っている部分があった。陽乃は股を閉じ見えないようにするが、どんどん染みが大きくなっていく。そして最後の時を迎えた。

「あつっ…あつあつ! ああつああつ!! アアアンアアアアン!!!」

陽乃は絶頂に達してしまい、またもペダルが止まり罰ゲームが決定した。

「あーあスマレの買ったパンツに大きな染みできちやつたよ。これは罰ゲームもだけどペナルティもしくちゃ。」

陽乃はイッタため肩で息をしており、ゲームに失敗したことを悔やんでいるが、またサドルが動き始めた。

「待つて今はイッタばかりで敏感なおおお!!」

スマレも胸への責めを再開した。1度イッタ陽乃は2回目は簡単に絶頂した。しか

しそれでもサドルは振動を止めず、スミレも揉み続けた。

「ん、ぐうううううッ!!もうやめてええええええ!」

3度目の絶頂を迎えた時には、パンツから潮が垂れていた。

## 9. 筆

松原はトレーニング室に入った。

「ヴィイイイン……ヴィイイイツン

「ウウン、アアアン……クツウウン。」

「おやおや陽乃さん迎いに来てあげたら、面白い姿じゃないですか。凄く惨めな姿になってますわよ。」

松原は陽乃が着けているアイマスクとヘッドフォンを取った。

「……!! ウウウン、アウウウン。」

「全く何て言ってるかわかりませんね。」

松原は猿轡も取り、笑顔でこう言った。

「陽乃さん迎えに来ましたよ。」

「松原が部屋に来る前の時間」

陽乃はエアロバイクのゲームに敗北し、疲れはてていた。スマレは陽乃の拘束を外し、ゆつくりと丁寧に下ろし、そのまま陽乃をマツサージチェアの様な椅子に座らせた。

するとアームが出て来て陽乃の足と腕を拘束した。

「座り心地はどう？ 前回のインディアンポーカールの椅子よりも柔らかくて、リラックスできてるでしょ〜？」

「そうね。良質な革を使用してて気持ちいいわね。もっと味わいたいから拘束を解いてくれる？」

「それは無理だよ陽ちゃん。だって今からゲームに負けた罰と私が買ったパンツを汚したペナルティを受けないとダメなんだから。」

スマレがボタンを押すと肘掛けが上に上がっていき、腕を頭の上まで上がり万歳の姿勢になった。また足は前回と同じように大開脚の体制になった。これで湿った白とピンクの縞パンが丸見えになり、ノーブラとちびトップスのせいで胸を半分露出し、少しでも動く乳首が見える状態になった。その状態でスマレは陽乃に話をかけた。

「陽ちゃんに質問だけど、この下着は何で濡れてるのかな〜？」  
「……………」

陽乃は黙って顔を背けた。しかしスマレの追求は続いた。

「う〜ん。さつき手に入れた、何でも質問に答えるって権利使っても良いけど、まだ早いやね〜。なら強行しかないよね。」

スマレは陽乃の股の間に入り、シャツをめくった。露出した胸は垂れることもなく綺



麗なお椀形を保ち、色も雪のような真っ白な色。そして乳輪と乳首も、綺麗なピンク色で、胸とのバランスも完璧だった。

「さて。陽ちゃん答えない限り何回も聞くよ？早めに答えた方が賢明だと思うよ。何でパンツが濡れているの？」

「……………汗よ。」

「そっか、まだ答える気分じゃないのか…」

スミレは陽乃のおっぱいを揉み始めた。まず根元から搾るように掴みながら左右に揺らし、おっぱいの全体を揉み込むように掌を動かした。不定期に乳首にも刺激を与えていき、陽乃を追い詰めていく。

「やっぱり柔らかいね、まるでパンをこねているみたいだよ。」

「あつ……………あああん……………あつあつあああ！」

「うんうん、感じてきたね。陽ちゃんつてもしかして敏感なの？くすぐりにも弱いし、快樂にも弱すぎだよ。あと止めてほしかったら、さっきの質問答えてね。」

「あああ…何回も言わせないで汗って言うてるでしょ！」

「やっぱり強情だね、でもそれを墮としたいんだよね。なら次はこれだ！」

スミレは一度陽乃から離れ、近くのカバンから道具を出した。その中から筆を持って戻ってきた。

「それじゃいくね〜」

スミレは陽乃の胸に筆を当てた。最初は胸の付け根から円を描き、胸の谷間は集中的に撫でた。

「ひゃあああんっ!」

一通り胸の付け根を撫で終わると、今度は乳首に向かって動き始めた。しかし乳輪近くになると今度は外に向かって動き始めた。

「ひううっ、ふあああつ……!ああおっ、おおっ、うん?」

(乳首から離れていく?)

「どうしたの〜?もしかして乳首に触ると思った?」

陽乃は自分が考えた事が読まれたため恥ずかしくなり顔を赤くしてうつむいた。スミレはそれを見ると、笑顔になると筆をまた乳首の方向に向けた。

「どう陽ちゃん?どんだん乳輪に近付いているよ。ほらあと少しで、触れちゃうよ。」

「いちいち言わなくてもわかるわよ／＼」

しかし、また乳輪の直前で離れていった。陽乃は自分のアソコから蜜が始めた事がわかった。どうにか誤魔化したいが脚を広げて固定されているためアームがガチャガチャ鳴るだけだった。

(何がしたいの?もしかしてわざと焦らして、乳首を触る代わりに答えさせる気?)

陽乃が色々考えていたが対象にスマレは鼻唄を歌いながら、筆を動かしていた。そしてまた筆が根本から乳首の方に向かってきた。陽乃は焦らすために、乳輪に触れる前に向きを変えろと思っていた。しかし筆は3度目の正直で今度は乳輪に触れた。

「ひゃああああん!!」

(何これ!? 刺激が強すぎる、もしこの状態で乳首を触られたら危険だわ。)

「どうしたの? そんなに気持ち良かったの? それじゃもう少し触ってあげるわ。」

陽乃は乳輪には触られないと完全に油断していたため、突然の刺激に耐えれず、大きな声を上げてしまった。

それを聞いたスマレは乳首に触れないように乳輪をなぞり始めた。

「あん! やあつ、ひゃあ!! あ、あ、んう、あんつ!」

さつきまでは口をつぐんで声を出さないように耐えてきたが、刺激が強すぎるため今では喘ぎを奏でている。

「陽ちゃん気持ちでしょ? 絶頂の数歩手前の刺激をずっと加えられるのしんどいでしょう? 早く質問に答えたら? 私がサドルで感じて出したHな汁ですって。」

「はあはあ／＼バカじゃない、私がそんなの言うわけないでしょ!／＼」

筆は今だに乳輪をなぞるだけで乳首には触れていないが、とうとう乳首に向けて舵をきった。そして乳首の直前で止まった。

「じゃ陽ちゃん覚悟してね」

陽乃は全身に力を入れ、いつきても良いように身構えた。しかし乳首に刺激が来ない変わりに、腋に刺激がきた。

「あはあああはああつはあああ!!」

スマレは乳首には触れずに筆を使い、腋をくすぐった。陽乃が力を抜き抗議しようとした瞬間、乳首の根元から先つぽまで一気に撫でた。その一撃で陽乃は絶頂し、またもアソコから蜜が垂れ始めた。

「いきなり何すうううん!!」

「ゴメン、ゴメン。陽ちゃん力入ってたからリラックスしてからのの方が良いと思ったのでも凄く気持ち良かったでしょ?せっかく乾いてきてたパンツが湿ってるよ。」

スマレは筆を使いパンツ越しにアソコとクリをなでたり、指でパンツを押し始めた。

「キヤー!今はダメエ、ヤメテエ／＼。」

「なら今も出てる液は何か答えてよ?そしたら止めるよ。」

「……。汗よ!」

陽乃は苦しまぎれの答えをしたが、勿論スマレは納得せず、クリやアソコを弄っている。筆の毛がついてない方で押すとヌチャッと音が鳴った。陽乃は抵抗しようとするが拘束されているためやはりアームをカチャカチャいわずだけであった。

「全く陽ちゃんは強情だな！いくら温厚の私でも怒るんだからね。次はこれを使うよ。」  
スマレは液体が入ったビンを持ち出し、その液体に筆を浸した。その筆でおへそをなぞった。

「ひゃあ、何よそれ!？」

「ただのアルコールだよ。スースーするでしょ?」

スマレは筆を胸の付け根からゆっくり撫でた。

「あ、ん、はあ…ん、あ、はあ…」

「思ったより感度よくないな。さつきイツタから賢者タイムに入ったのかな?それなら最初からクライマックスだよ。」

スマレはいきなり乳輪と乳首を集中的に撫で始めた。その刺激は賢者タイムの陽乃ですら、もう一度絶頂近くまで持っていた。

「あ、あん!はあつ、んつ、やつ、あああ!ひやつ」

「さすがに乳首は感度がピカイチだね。このまま2回目も簡単にイツチャうね。陽ちゃん質問に答えなくても良いから、今からイク時はイクって宣言して欲しいな」

「私が…そんなこと…言うと思うの?」

「だよね。ならもうイツチャってね。それそれ」

「あ、ダメエ、ひゃああああつ、ああああ!!」

陽乃が簡単に2回目の絶頂を迎え、エアロバイクと合わせると合計5回も短期間で絶頂した。スマレは手を止めて別の道具を取りに離れた。

(はあはあ、絶対に許さない。よくも私をここまでコケにしたわね。必ず復讐してやる。)

陽乃が再度闘志を燃やしているといくつか道具を持ってスマレが戻ってきた。

「さーて、陽ちゃん絶頂の余韻は終わった?」

「誰が絶頂したの?」

「パンツ濡らしておいて、その言い訳は厳しいと思うよ。話を戻して、もうそろそろこのやり取りも飽きたし、これで最後にするよ?パンツは何で湿気っているの?」

「こっちもその質問には飽きたわ。そうね今、凄く暑いから汗ね。」

「確かに汗が一杯出てるけど、やっぱりその答えは無理矢理だよ。どうしてマン汁って言わないのかな?そうすれば楽になるのに、不思議で仕方ないよ。やれやれ。それじゃ、そのプライドをへし折っちゃいますか。」

スマレは陽乃の胸ではなく、大きく開いている股に手を伸ばした。まずお尻を両手で持ち上げるように触り、左右の手でお尻をしっかりと挟む左右に揺らした。

「おーお尻も柔かいねーほら左右に振ったらプルプル揺れてるよ。」

「そうかし……らー!」

陽乃はお尻に力を入れて硬くした。結果どれだけ左右に揺すっても揺れる事がなくなりスミレはがっかりした。

「もう陽ちゃんイケず！もう少し触りたかったのに」

でも今のは悪手だよ。」

そうするとスミレは突然ハサミを取り出し、陽乃が履いているパンツの左のサイドラインを切った。

「あなた何をする気!？」

「えーと。陽ちゃんのお尻堪能しようとしたけど、そんな態度だからね。次の目的である何でパンツを濡らしたか調べようかなど。そのためにも、パンツを脱がさないとわからないでしょ？でもその状態じゃ脱げないし、切るしかないじゃん。」

陽乃は必死に腰を左右に振ったて抵抗しますが、簡単に右のサイドラインにハサミを入れた。

「どうする陽ちゃん？今ならまだまだ間に合うよ?。」

「…Hな汁を流しました…」

「何て言ったの？全然聞こえなかったよ?。」

「Hな汁を流しました!。」

「うーん微妙だね。誰が何でどこから、流したのかさっぱりわからないよ。」

「雪ノ下陽乃はサドルの振動で絶頂したのでマンコからHな汁を流しました!」

「やつと言ってくれたね。ここまで長かったな。よし次のゲームの準備するね。」

「ちよつと話が違うじゃない!? 言えばゲームは終わりじゃないの!」

「陽ちゃんにHな言葉を言わせるゲームは終わり、次のゲームはまた別よ。」

スマレが次のゲームの準備をしていると携帯がなった。

「もう誰? せっかく良いところなのに。何々サーちゃんからか。うんやっぱり出しか無いよね…。」

スマレは嫌々電話に出ると数十秒会話をした後電話を切った。

「ゴメンね陽ちゃん、サーちゃんに呼び出し食らっちゃった。だからちよつと行ってくるね。寂しくない?」

「早く行けば?」

「陽ちゃん一人だと寂しいハズだから少し待ってて。」

スマレはカバンから道具を取り出し、陽乃に近づいた。

「はい寂しくないようにプレゼント持ってきたよ。」

スマレはまず猿轡を陽乃に啜えさせると顔の後ろで留め、次にアイマスクを装着した。

「うん、いい感じ。次はこいつらだ。」



陽乃の乳首にローターを着けると、ヘッドフォンを装着した。最後にローターの電源を入れ振動させた。陽乃はおっぱいを揺すって取ろうとするが、しっかりと固定されているため外れなかった。

(いきなり乳首が震えてる。まさかこの状態で放置するきなの!?)

「ウウウン、ウウウン。」

「どうかしたの? つてもう何も聞こえないか。そうだBGMも流さないと。」

ヘッドフォン: あん! やあつ、ひゃあ!! あ、あ、んう、あんっ! あ、ダメエ、ひゃああああつ、ああああ!!

ヘッドフォンから流れる音は陽乃が出した喘ぎ声だった。

(うるさい、うるさい。うううん。またローターが動き出した。)

陽乃の乳首のローターはサドルと同じ設定で時々止まり、振動も変化していくタイプだ。視覚が奪われ、余計に神経が集中してしまう。そしてヘッドフォンから流れてくる自分の喘ぎ声が余計に妄想を膨らませてしまい。たったローター2つで雪ノ下陽乃は遊ばれ続けられた。

く松原の部屋く

松原の部屋に入った時スマレは不機嫌だった。やっとプライドの高い陽乃から答えを言わせた後に突然の呼び出しだ。

「サーちゃん要件は何？」

「では前置きなしで言います。今から陽乃さんは、あなたの時間が終わるまで、共同管理します。」

「意味わんかない！それってルールと違うじゃん！」

前の人が負けたら、その後の人がその時間分使って良いって説明したじゃん。」

「はい。ただ、そのバカ2人があまりにもあつさり負けしたので、あなたの時間だけが極端に長くなっています。これでは平等に陽乃さんを遊ぶという前提が崩れます。」

「でもゲームに負けた二人が弱いのが原因でしょ！私には関係ない！」

松原とスマイレ、お互いが主張を譲らないためヒートアップしてきた時、水野が口を開いた。

「ではスマイレ様、私の時間も共同管理の時間にしてください。スマイレさんが直接関わる時間は減りますが、間接的に関わる時間は増えます。これでいかがですか？」

「スマイレさんはどうですか？私は賛成ですわ。」

「少し腑に落ちないけど賛成で」

「では陽乃さんを迎えに行つて来ますわ。」

く冒頭く

「おやおや、パンツをこんなに濡らして、そんなに気持ち良かったんですか？」

「……………」

「無視ですか。全くスミレさんから少しは素直になったと聞いたんですが。まあいいです。陽乃さん着替えて私の部屋に来て下さい。」

松原は陽乃の拘束を外すと部屋から出ていった。

## 10. チアガール

↳陽乃の客室↳

陽乃は部屋に戻ると朝に入ったばかりだが、もう一度お風呂に浸かり気持ちを納めていた。

しかし先程までずっと絶頂期することなく焦らされていたため、子宮の辺りが疼いてしまう。

ただ雪ノ下陽乃のプライドが自慰を許さず、どうにか気を紛らわしお風呂を出た。

今朝と同様にお風呂を出て着替えていると水野が入ってきた。

「陽乃様、少し早いですがお昼ご飯です。」

水野はテキパキと食器を並べた。

メニニューはご飯、アボカドサラダにカキフライ、豆腐にオクラ添え、とろろの味噌汁と和風料理だった。

「陽乃様がお疲れということ、精がつく料理を作りました。どうぞ遠慮なくお食ください。」

「少し違う気がするけど、頂くわ。」

陽乃が食べ終わると水野は食器を片付け始めた。

「それでは陽乃様はこのままお待ちを、もうすぐお嬢様が参られるはずです。」

水野が部屋を出たため1人になった陽乃はソファーに座り考え事を始めた。

(松原もそうだけどスミレもヤバイわね、この2人のゲームに負けるのは危険だわ。

逆にバカ2人(ツバキ・カエデ)は安全ではないけど、比較的ましね。)

陽乃が考えごとをしていたら、いきなりドアが開き松原が入った。

「陽乃さん気分はどうですか？」

「さんざん絶頂したみたいですが元氣そうですね。」

「あなたは四六時中、声が大きくてバカみたいにな元氣そうだね。」

あと自分の家だけど人が泊まつてる部屋をノックなしで入るのはマナー違反よ。

まあバカだから仕方ないけど。」

「そうですね、確かにノックなしで入るのはマナー違反でしたわ。」

でも人様の家でお漏らしをする人よりはマシではないでしょうか？」

2人が言い争っていると他部員も集まってきたため、大部屋に移動した。

「それでは陽乃さん朝に説明した、陽乃さんを管理する時間の分配ですが変更がありました。」

簡単に言うところから5人であなたとゲームをします。

そしてゲームの度にコスプレの撮影会をして頂きます。モデルとして来てもらっているの、服を着せないことには始まりませんよね。」

「……………。それでゲームの内容は？」

「ゲームは陽乃さんが好きなインディアンポーカーですわ。」

今回は普通にチップを使います。

お互い20枚で、最低一枚はかけます。

その後お互い2回までチップを上乗せできます。

そして勝った場合は全てもらえます。

途中で降りる場合は相手が賭けたメダルの半分を相手に渡します。

1試合で5回戦やります。」

「それで罰ゲームがコスプレなのね。」

「いいえ、違いますわ。」

コスプレは参加条件です、着替えなければ勝負の席に着けないのでこちらの不戦勝になります。

あと今回は陽乃さんしか罰ゲームを用意していません。なので陽乃さんは罰ゲームを軽くすることだけを考えてください。」

「いきなり私不利すぎないかな？」

私が勝つても何もないなんて……もはやイカサマゲームに近いじゃない。やる必要すらないわ。」

「そうですか、ではこちらを見てください。」

テレビ：「地獄に落ちろ」……チヨロチヨロ……。

テレビに映ったのは陽乃が前回のインディアンポーカーで負け漏らしている姿だ。

しかし目の部分には目伏があり黒い線であまく誰かわからないように隠していた。

「こういうプレイが好きなのはネットにたくさんいますわ。」

もしかしたら陽乃さんの大学にも居るかも、勘のいい人なら声で特定される可能性もありますね……。」

「卑怯よ！動画や画像は公開しないんじゃないの!?!」

「あなたが大人しく参加すれば絶対に公開しませんわ。別に負けると言ってます。」

ただ私は純粋に陽乃さんとのゲームを楽しみたいだけです。」

「純粋にゲームを楽しみたい人がこんなことはしないとと思うけどね。」

「それでは参加しないでよろしいですか?」

「…参加するわ。説明続けて。」

「全く、話を遮ったのはあなたなのに……。」

まあ良いでしょ説明を続けます。

ポーカーを五回やりませう、ありえないですが陽乃さんが負けた場合は一敗につきクジを引いてもらいます。

また降りる時も、自分の数字が大きいのに降りた場合はクジを引いてもらいます、そしてゲーム終了後にクジに書いてある物を脱いでもらいます。

さらにこちらもあり得ないと思いますが、もし私たちの方がコインの枚数が多い場合、10枚ごとに追加脱衣、15枚で特別なシチュエーション、20枚で過激なシチュエーションなど用意していますのでお忘れなく。

コインが無くなった場合も追加で脱衣をしていただきます。

ゲームのルールは前回と同じですわ。今までのところで何か質問は？」

「ないわ。あと提案していい？」

ゲームはそっちが決めて、ルールもそっちじゃない？」

少しは私の意見を聞いて欲しいんだけど。」

「確かにそうですね、では提案を言ってください。」

「もしそっちのプレイヤーが負けた場合、私が脱ぐ枚数分そっちが脱ぐのと、メダルの枚数に応じての罰も受ける。これでどう？」

「こちらが脱ぐことは認めませんわ、だって恥ずかしいですから。」

陽乃さんと違って人様にお見せできるスタイルではないので。」



「人にはやって自分がやられるのは嫌って子供じやない。

それなら、負けた場合はメダル一枚につき一時間退場はどう?」

「それぐらいなら構いません。それにしましょうか。」

陽乃はどうか相手にも罰ゲームを与えることができたため、まだ勝負になると考えた。

(私だけが罰ゲームがある状況はこれで阻止した。

罰ゲーム無しの賭けゲームなんて、何をしてくるか解らないけどこれで多少は牽制になるはず。)

「続いて勝敗に関わらずゲーム終了後に撮影会をします。

さらに脱衣枚数分服を脱がないと追加で罰ゲームを受けてもらいます。

あと5人と勝負して3勝以上できない場合も罰ゲームがあります。」

「やっぱり私が不利じゃない? そっちが3勝できなかった時は何かしないの?」

「そうですね、では私たちが負けた場合は全員6時間、陽乃さんに触りませんわ。

これでいかがですか?」

「そうね、特に問題ないわ。」

「では準備をしますので暫しお待ちを。」

トイレはあちらにあるのでいつでも行っても大丈夫ですよ、また漏らされると迷惑なの

で。」

「ありがとう。」

でも今は菓を盛られてないから大丈夫よ。

ただ客人に菓を盛る家主の家だから使うかもしれないけど。」

「最後まで嫌みな方ですね。」

忘れてましたが、もしルール違反していた人が居た場合は、相手の不正が発覚した時点でゲームは終了します。」

そう残すと松原達は準備を進めた。

まずテーブルと椅子を置き、次にそれらを囲むように壁を置き始めた。

テーブルと椅子がある場所を小さい小屋のように密閉し、外から見えないようにした。

「それでは準備できました。」

それでは陽乃さん1人目と対戦するので着替えて来てください。」

陽乃は隣の部屋に行くとも目の前にコスプレの服と下着があり、さらには髪型まで指定された。

それでも陽乃は愚痴を言いながらも着替え大広間に戻った。

「おや、思ったより早かったですね、そのチア姿かわいいですよ。」

それではいつも通り、カエデさん服の説明をお願いします」  
「はい、では解説です。」

今回は青と白をメインにしたチア衣装です。

まず白のルーズソックスです、膝下までの丈にして、陽乃さんの美しい脚を見せます。次にスカートですが、色は青色に標準的な長さである股下までの丈にしています。

次に上半身ですがメインは白で、丈はおへそとクビレは見せないといけないのでお腹の少し上までとなっています。

さらにノースリーブタイプで腋を見せ、首元は深いV型で胸の谷間をアピールです！陽乃さんはロングヘアーではないですが、肩まであるのでツインテールにしてみました。

後下着とアンダースコートですが」

相変わらず熱く語るカエデを無視し、陽乃はテーブルを囲っている小屋まで歩きだした。

「ねえー人目誰？ 早くしない？」

「カエデさんの説明の途中ですよ。」

負けるのにそんなに早く始めたい何て、もしかして陽乃さんドMですか？」

「あなたの部員が今朝私に一瞬で二人負けたわよ。」

「でも、その後陽乃さんは何回もゲームに失敗し、遊ばれ続けたと聞きましたか？」

「またも一触即発の雰囲気になり始めた直後スマレが仲裁に入った。」

「2人とも私たちのこと忘れてない？二人だけの世界に入ってる？」

「…スマレさん申し訳ないです。」

「それではゲームを開始します、私たちの先鋒はスマレさんです。」

「それではスマレさんよろしくお願いしますね。」

「オッケー！また陽ちゃんと遊べる何て嬉しいな！」

陽乃のスマレは部屋に入り、勝負が始まった。

　　～1戦目～

チップ枚数

陽乃20　スマレ20

「それでは始めるわよ～はい！」

陽乃の数字は11　ベットは4

スマレの数字は10　ベットは2

1戦目はスマレが降り、陽乃が賭けた半分である2枚を貰いリードした。

　　～2戦目～

チップ枚数

陽乃22 スミレ18

「今度は勝たせてもらおうよ。」

もう一回陽ちゃんの恥ずかしい姿を見せてね。」

「前はあなたの妨害で負けたけど、今回は妨害できるの？」

なければあなたに負ける要素がないわ。」

「それはどうかなく？私だつて強いよ。」

陽乃の数字は8            ベットは3

スミレの数字は10    ベットは4

お互い降りずに勝負を行い、スミレが勝った。

「では陽乃ちゃんボックスから一枚引いて、見ずに渡してね。」

うくん陽ちゃん運が良いね。じゃ3戦目行こうか。」

く3戦目く

陽乃、脱衣1回

チップ枚数

陽乃19    スミレ21

陽乃の数字は1            ベットは3

スミレの数字は12    ベットは6

お互い相手のカードが強いで、長考を始めた。

(うくん、思ったより勝ってないな。)

1人目だからあんまり使いたくないけど、使うか…。

ああ、陽ちゃんの悔しそうな顔見たいな。)

(相手は12…、こっちの勝ちは1・13・Jのみ…。

確率的に不利ね。

勝負して負けたら一枚脱ぐ、降りても私の数字が大きいと脱ぐ。

でも相手のベット6は私のカードが弱いからと考えて降りるのが良いわね…。)

悩んだ結果、陽乃は降りることを選択した。

「残念、陽ちゃん勝負しとけば良かったのにね。」

はい、クジを引いてね。」

(やくん。陽ちゃんの悔しがつてる顔良いわね。本当にそそるわ)

く4戦目く

陽乃、脱衣2回

チップ枚数

陽乃16 スミレ24

陽乃の数字は4

ベットは6

スミレの数字は4      ベットは5

先程と違いお互い弱いカードなためベットは多くなつた、特に陽乃は現状負けてるため強気に勝負をかけた。

スミレは負けた場合逆転されるので降りることを選択した。

「残念ね。勝負しとけば私がベット6であなたが5だから増えたのに。」

「う〜ん、気迫に圧されちゃつたよ〜。でもまだ一応勝つてるし〜」

〜5戦目（最終戦）〜

陽乃、脱衣2回

チップ枚数

陽乃19    スミレ21

陽乃の数字は7      ベットは4

スミレの数字は6      ベットは7

（やっぱり陽ちゃん強いな〜。）

これなら最初から使つてたら良かったよ…。

スミレは陽乃の後ろにある壁を見て、ボタンを押した。

そうすると壁が鏡となり自分が持っているカードをみれた。

（6〜!!何でよりによって弱いカードなのよ!）

強いカードなら大量にベットしようとしたのに……。

降りても勝負しても負けなら、陽ちゃんを降りさせるしかないか……。( )

「あら、最後だからって多くかけるわね。私のカードそんなに弱いのか？それともやけく

そ？」

「うーん、どっちだろ。」

でも負けるきはしないよ

どうする陽ちゃん勝負する？それとも降りる？」

「勝負するわ。」

最終結果

陽乃、脱衣2回

チップ枚数

陽乃26 スミレ14

「私の勝ちね。やっぱり妨害がないと私に勝てないわね。」

「でもでも！陽ちゃんは2枚脱がないとダメだからね！」

「そうね、でもあなたは12時間退場で私の脱衣は見れないわよ。」

「~~~~~!!!」

陽乃とスミレが出てきた。



スミレは誰の目でもわかる位落ち込み、陽乃が引いた脱衣クジを松原に渡して部屋を出て行った。

「陽乃さんお見事ですわ。」

まさかスミレさんが負けるとは思っていませんでした。

ただし、二枚脱ぐのと撮影会はしますわ、こちらに立つてください。」

陽乃は松原が指定した場所に立つと、カエデにポンポンを持たされた。

カエデはポンポンを渡し終えると、カメラを構え指示を出し始めた。

「それでは陽乃さん、まず片方の腕を腰に、もう片方を突き上げてください。」

次は両手を腰に上げて片足を交互に上げてください。」

指示されるように手を上げたり、前に突き出したり足を上げたりした。

その度にスカートから白のアンダースコートが見えた。また胸の部分も屈みこむ姿

勢の時に大きく空いた胸元から真っ白の肌と同じ白のブラが少し見えた。

カエデが一通り写真を撮ると罰ゲームが開始される。

「それでは陽乃さん罰ゲームです。」

まず脱いでもらうのはスカートです！」

陽乃はスカートを足元に落とした。

スカートが無くなったため、青色のアンダースコートが丸見えになった。松原はその

姿を見てクスクス笑った。

「陽乃さん良い格好ですよ。」

ずっとそのままでも良いんじゃないですか?」

「これが良いって正気?それでもアパレルメーカーの社長令嬢?

これが良いんならあなたの会社で売れば?

そしたらどこもしてないから大儲けよ?」

「そうですね、売るときにこの写真をポスターにして宣伝すればもつと上がると思いますわ。」

「松原さん口喧嘩してる時じゃないですよ!」

「カエデさん失礼しました。」

では陽乃さん踊りを再開してください。」

スカートがないまま先程までと同じように脚を上げたり、お尻を強調しながら前屈みを行った。

しかし松原はつまらない顔をしていた。

「うーん、エロさが足りませんね、これじゃ全く興奮しませんわ。」

もう次の服を脱いでもらいます。」

松原は陽乃に書いてあるものが見えるようにクジを広げた。

そこにはシャツと書かれていた。陽乃はシャツのしたにはブラしか着ておらず、すでにスカートを脱いでいるので下着姿のような格好になってしまう。

「陽乃さん早くシャツを脱いでください。」

そして可愛らしい白の下着をじっくり撮影させて頂きますわ。」

陽乃は覚悟を決めシャツを脱いだ。

すると服を脱いだ衝撃で白色のブラと胸が同時に揺れた。陽乃の姿はアンダースコートがブラと同じ色なため、まるで下着姿のような格好になった。

「やはり罰ゲームはこうでなくては、ではポンポンを顔の横に持つてきて笑顔で連続でジャンプしてください。」

無理やり笑顔を作り陽乃はジャンプすると、手の横にあるポンポンと胸そしてツインテールが揺れ始めた。

上の方だけ見ると子供が嬉しそうにポンポンを持って髪の毛を揺らしながら楽しんでるように見える。

しかし少し下を見ると大きな胸がブラジャーと一緒に動き、さらに下を見ると下着のようなアンダースコートがとても官能的な雰囲気を出していた。

「おお陽乃さんは最高です！」

次はさつき踊ったのをもう一度踊ってください。」

カエデの指示通りに踊りを始めたが、さつきとは違い動く度に胸が大きく動ごいた。見ている人の視線を釘つけにしながら、どうにか踊りきると罰ゲームが終了した。

「はあはあこれで終わりね。」

「ええこれで終了ですわ。」

ただし次のゲームがありますのでまた着替えて来て下さい。

それとも特別にその姿でゲームをしても良いですわよ?」

陽乃は松原の質問を無視し、着替えに部屋を出た。

## 11. バニースーツ

1戦目の罰ゲームが終わり陽乃は2戦目のために着替えていた。

(これで1勝、あと2勝すれば勝ち越せる。

松原に勝てるかは半々で水野は実力が未知数…。

やっぱりカエデとツバキには勝っておかないと厳しいわね。)

一方陽乃が着替えている間に大部屋では作戦会議が開かれていた。

「まさかスミレさんが負けるとは…。

水野どうしますの？」

「このままで私たちは本当に勝てますの？」

「安心してくださいお嬢様、今回も全て計画通りです。このままで大丈夫です。」

「前回のインディアンポーカーは事前に薬を飲ませて勝ちましたが、今回は事前に何もしてはいはずす。

陽乃さん相手だと流石にあなたの作戦でも心配ですわ。」

「お嬢様が陽乃様にルールを説明した時点で我々の勝ちは確実です。」

ここで静かに二人の会話を聞いていた、ツバキが意見を言った。

「でも本当に大丈夫か？」

正直、5戦全てイカサマしないと負ける自信あるぜ。

ただイカサマを使っても不器用な俺がバレない訳がないし、俺は負け決定だぞ。」

「ツバキ様安心してください。」

「そこも考えています、また直前に指示は出しますのでお待ち下さい。」

「では水野の作戦通りに進んでるとして、次鋒は誰が行きますの？」

「それは私が行きます。」

会議が終わると同時に陽乃が着替え終わり大部屋に戻ってきた。

そして、いつも通りカエデからの服装解説が始まった。

「今度の衣装はバニースーツです。」

まず靴は勿論ハイヒールでストッキングと一緒に足を長く細く見せます。

ここが一番のポイント何ですが、普通のバニースーツと違いハイレグ＋ミニスカのセツトとなっています。

ミニスカがあるため、普通のハイレグよりもさらに大胆な切り込みとなっています。

ミニスカは簡単に着脱可能で、取った場合はハイレグのバニースーツとなります。

しかしミニスカがあることでチラリズムが発生し、下半身が見えたときの破壊力が抜群に上がるため今回は着せました！

メインのスーツですがお尻にウサギの白い尻尾があり黒のスーツをより際立たせた  
り。

また、よく見たらわかりますが透明のブラストラップがあつて、ズリ落ちて胸が見えないように支えています。

後は首元につけ襟、腕にはカフスがあります。そして

バニースーツと言えばこれ、ウサミミを着けて完成です！」

陽乃は毎回行うカエデの説明に飽きており、勝手に小屋に入りトランプをシャッフルしていた。

カエデの説明が終わると水野が小屋に入つて来たため陽乃は驚いたが、すぐに真剣な表情に戻つた。

「あなたとは初めて戦うわね。」

罰ゲームが嫌だから悪いけど勝たせてもらうわ。」

(ここでこの子か、初めて戦うから実力は未知数…)

でもここで勝てれば後のゲームが楽になるから多少無理しても勝ちにいく。)

「確かに初めてですね。」

あと私は罰ゲームを実行しません。

私の代理でお嬢様が罰ゲームを行います。」

「そう、別に誰が罰ゲームをしようが勝つから関係ないわ。それじゃ始めるわよ。」

く1戦目く

チツプ枚数

陽乃20 水野20

陽乃の数字は7 ベットは3

水野の数字は4 ベットは6

(嘘、いきなり6枚!?)

私のカードが弱いのか、ブラフなのか1戦目じゃ判断つかない…。

表情も変えないし、プレースタイルも知らない、情報量が少なすぎるわ。)

「降りるわ。」

陽乃は悩んだ結果降りることを選択した。

しかし結果は自分のカードの方が強いためクジを1枚引くことになった。

く2戦目く

陽乃、脱衣1回

チツプ枚数



陽乃17 水野23

陽乃の数字は1 ベットは3

水野の数字は13 ベットは6

(また6枚か…)

多分相手は数字に関わらず高レートにして相手が降りるのを待つタイプね。

ただ今回は相手のカードが強すぎるからセオリー通りに降りて、弱いカードの時にこつちが追加で賭けて大勝を狙う。

「今回も降りるわ。」

陽乃はまたも降りたが自分のカードの方が数字が大きいため、またもクジを引くことになった。

(運が悪いわね。

まさか1を引いてるなんて、でも一回勝てば同点、運が良ければ逆転もできるわ。)

く3戦目く

陽乃、脱衣2回

チップ枚数

陽乃14 水野26

陽乃の数字は10 ベットは4↓8

水野の数字は5 ベットは6↓9

陽乃は最初4枚賭けていたが追加で4枚賭け合計で8枚賭けにした。

水野も対抗して6枚掛けから9枚まで増やした。

結果は陽乃の勝ちでコインの枚数も逆転した。

(これで逆転、やっぱりセオリー通り弱い時に勝負して強いときには降りるべきね。)

〜4戦目〜

陽乃、脱衣2回

チップ枚数

陽乃23 水野17

陽乃の数字は4 ベットは4↓8

水野の数字は10 ベットは6↓10

(最低だわ、ここで降りたら逆転されるけど相手の数学がなかなか強いから降りるのが得策かな…。)

次で勝てば逆転できるしね。)

ここで水野はボタンを押し、陽乃の後ろの壁を鏡にした。

自分の方が数字が強いと判ると陽乃が降りるようにベットを増やした。

陽乃は相手が強カードのため降りることを決めた、しかし可能性は低いが相手が降

りるのを期待してベットを増やした。

ただ数字の強さを知っている水野は降りないため、当初の通り陽乃だけが降りた。

〈5戦目（最終戦）〉

陽乃、脱衣2回

チップ枚数

陽乃18 水野22

陽乃の数字は8 ベットは6↓7

水野の数字は9 ベットは6↓12

水野は陽乃のカードを確認し勝利を確信した。

今までずっと高レートが続けた理由は陽乃の読み通り、相手を降ろして勝つのもあるが、もうひとつ大きな理由がある。

それは今回のように相手のカードが見れて、なおかつ自分のカードの方が強い時、ベットを多くするのを多少は疑われないようにするためだ。

それを利用し、陽乃が降りてもコインの差が15枚以上なるように水野は12枚賭けを行った。

（12枚賭けね…、これで降りたらコインが15枚差になるから降りれない。でも勝負して負けたら終わり…。

数字は9だから真ん中辺り、勝つ確率は1/2ね。

でもおかしいわ、あいつ（スミレ）も途中から賭ける枚数増やしたり、いきなり降りたりした。

もしかしてもうイカサマしてるの!?

だとしたら負ける…けど、純粹に高レート勝負の可能性もまだある……………。」

長考の末、陽乃は考えた結果降りることを決めた。

結果

チップ枚数

陽乃12 水野28

脱衣2枚

追加脱衣1枚

特別なシチュエーション

ゲームが終わると陽乃と水野は小屋から出た。

水野はクジを松原に渡すと、松原とカエデは笑顔で陽乃の元に来た。

「それでは陽乃さん楽しい写真撮影会の時間ですわ。」

「ではでは、陽乃さん早速ですがポーズ取ってください。」

まず背筋を伸ばした状態で写真を撮り、次に手を頭の上で組ませた。

さらに今度は腰に手を置いて写真を撮った。

「では、今度はお尻をこちらに向けて、前屈してください。」

ハイレグは陽乃のお尻をほとんど露出させていた。

さらにその状態で前屈をしているので、ハイレグがお尻に食い込み筋が見えてしまうが、陽乃は抵抗できず命令通りにその姿勢を保った。

「おやおや、陽乃さん。」

嫌らしい筋が見えてますよ。

ほとんどお尻を丸出しにして恥ずかしい。」

陽乃は松原の言葉を見無視して、澄ました顔をした。

松原はその姿を見て、この状態で陽乃を虐めるのは厳しいと考え、クジを広げた。

「まずはスカートですか……。」

立ったままで既にハイレグを見れるため、今さらミニスカを脱がしても意味がないと思ひ、松原が2枚目を引こうとした時にカエデはストップをかけた。

「待ってください！」

陽乃のさん台の上に乗って下さい。」

陽乃は言う通りに台の上に乗った。

そうすると台が半分に割れ、どんどん離れていく。

陽乃は落ちないように足を広げていき、先程と同じように生地がどんどん食い込んでいった。

もしミニスカがあれば股を隠す丈はあったが、今は脱いでいるためハイレグが食い込んだマン筋を見せることになってしまった。

そしてカエデと松原が近づいてきた。

「おやおや今度は前の筋を見せつけるのですか？」

「なら降りて良い？この体勢結構辛いのよ？」

「勿論ダメですわ。勝手に降りたら撮影の妨害としてペナルティを与えます。

カエデさんが写真を撮り終わるまで待つてください。」

「陽乃さん、写真撮り終わりました。サクラさん次の脱衣いきますか？」

「いえ、先に味見が先ですわ。」

松原は食い込んでいる陽乃のマン筋に指を当て、スーと撫でた。

陽乃は上から睨み付けるが松原は気にも留めずに左右の台をさらに動かし始めた。

陽乃は落ちないように足をさらに広げて、腰を落とした。

「先ほどよりもくつきりと見えますわね。」

今度は筋を撫でずに指を奥に押し込もうとした。

生地はさらに引つ張れると、マンコが見えるギリギリの幅になった。

「くううん。」

「おやおや、もう発情ですか？

全くこれだから淫乱な人は。」

下半身を触っていると松原の手が止まり、陽乃が顔をしかめた。

松原は手を止めた所をもう一度触ると、笑顔になり陽乃の顔を見た。

「まさかですね、女性にあるまじき事です。」

陽乃さん、あなたも気づいているでしょう？

はみ毛をすることに。」

そもそもハイレグはVラインを見せる物だが、今は股を大きく広げているため、さらにVラインを見せていた。

その結果、剛毛ではない普通の人でも陰毛がはみ出て見えてしまった。

陽乃はどうか隠そうと手を使い、生地の食い込むを戻そうとしたが、松原が止めさせ手を頭の後ろで組むように命令した。

「同じ女性として恥ずかしい、いつ殿方に見られるかわからないから毎日処理をすると考えてたんですが、雪ノ下家は違うんですね？」

陽乃は何も答えれずに、ただ松原を睨み付ける事しかできなかつた。

「おや答えてくれないのですか？

それとも答えられないのですか？

ああなるほど分かりました、雪ノ下家の女性は処理をあまりしない家なのですな。

それは答えられませんね、失礼しました。」

「バカにするな！」

家族をバカされたため、陽乃は感情を剥き出しにして怒り始めた。

しかし、それは松原達が待っていた状態であり、さらに陽乃を追い詰めていく。

「では、どうしてはみ毛があるのですか？」

松原は先ほどと同じ質問をした。

陽乃は松原が望む答えを知っており、雪ノ下家の威厳と自分のプライドどちらを取るか考え、口を開いた。

「毛深くて…、処理を疎かにしたからよ…。」

「おや聞こえませんでした、もう一度言っして下さい。」

あとスミレさんにも言われたと思いますですが誰の事かわかるように主語をフルネームですっかり入れて下さい。」

「雪ノ下陽乃は毛深くて、それなのに処理を疎かにしています。」

「おやおや、そうなのですか。」

それなら処理の仕方を教えましょうか？」



「結構よ、疎かにしてただけで自分で出来るわ。」

「でも、処理の仕方を変えれば頻度を下げることができますわよ?」

「何度も言わせないで!結構よ。」

「そうですか、残念です。」

松原は口では残念と言っているが、目的である陽乃を虐めることに成功したため笑顔が溢れていた。

カエデに、はみ毛の写真を撮らせた後、2枚目のクジを開いた。

「2枚目はつけ襟……。」

松原は2枚目を引いたが、これもまた微妙なカードなため、カエデの方を向き目で訴えた。

カエデも今回は何も思い付かないため、首を横に振り3枚目のカードを引くように勧めた。

「それでは陽乃さん、追加脱衣の分です。」

3枚目はブラストラップです」

「キターーーー!!!」

松原が脱衣の説明をするとカエデは大きな声を上げ喜びながら松原に近付き、何か言い始めた。

松原もカエデの話の話を聞き領くとツバキと水野も呼び集まった。

話し合いが終わると陽乃に命令を下した。

「あと、特別なシチュエーションも一緒にします。

内容はカジノで負けて私たちに買われた人です。

では陽乃さんこちらに来て下さい。」

陽乃は命令を通り松原に近づくと、後ろからツバキが陽乃に首輪を着けた。

さらに手首にも拘束用ベルトを着け、首輪と結び着けた。

「それでは陽乃さん、今からあなたは私に買われた人です。

つまりは奴隷、私の命令には従って下さい、返事は？」

「…わかりました。」

「宜しい、ではカエデさんお願いします。」

松原がカエデに指示すると、カエデは陽乃の前に行きブラストラップを外した。

すると陽乃の胸を隠していた布が重力に従い下に捲れていったため、陽乃の胸が丸出

しになった。

「キャー！」

とつさに胸を隠そうとするも、手首の拘束具が首輪と繋がっている肘でしか隠せず、

どうにか体を丸めて見えないようには出来た。

「無駄な抵抗ですわ。」

まずは写真撮影です、カエデさんお願いします。」

松原は陽乃の後ろに回り、陽乃の胸を覆うように触った。

「陽乃さん背筋を伸ばして、肘を退けて下さい。」

「この柔らかく大きな胸が堪能できませんわ。」

陽乃は命令通り背筋を伸ばし、肘を退けた。

二人羽織の状態で、松原が陽乃の胸を手ぶらで隠している状態となった。

そして陽乃は胸を揉まれた状態での撮影会が始まった。

「うーん、それにしても柔らかいですわ。そしてこのポリウム最高ですわ。」

「くううう。」

「おやおや淫乱な陽乃さんはもうギブですか？」

撮影会始まったばかりですよ。」

「はあはあ…。その汚い手を早く退けて。」

松原は陽乃の胸を隠している指を一本づつ離し始めた。

「では陽乃さん、まず小指を離しました。」

次は薬指です。あらあら下乳が丸見えですよ?。」

松原はゆっくりと指を離し、少しずつ胸を見せていった。

陽乃もどうにか抵抗しようと体を揺するが、後ろから捕まれているため逃げることができない。

その間にもどんどん指は減っていく。

「次は親指と中指の2本同時でいきますわよ。」

松原は宣言通り指を離すと、残っているのは乳首を隠している人差し指だけになった。

松原は人差し指で乳首を胸に押し込んだり、指の腹で転がしたり好きなように遊んだ。

「陽乃さん気持ちいい良いですか？」

「良いならこのまま続けますが」

「あああん。はあはあ、気持ちいい訳ないでしょ／＼」

早く手を離さない。」

「なるほど、そんなにご自慢のFカップの胸をさらけ出したいのですね。」

「良いでしょ、それではカエデさんしっかりと撮ってあげてください。」

松原は最後の指を離した。

その瞬間胸に押し込まれていた淡いピンクの乳首が出てきた。

カエデはずっとカメラを連写し、ツバキも同じ女性であるがその魅力に惚れ込んでい

た。

「ヤバいです！もう死んでも悔いが残りません！」

「カエデさん、まだまだですわよ。」

ツバキさんこれを使ってください。」

ツバキは松原から透明な薄いガラスを受けとると、意味を理解し陽乃の後ろ側に周った。

ツバキは薄いガラスを陽乃の正面に回すと胸に押し付けた。

ガラスには潰れた胸と乳首がしっかりと見えており、陽乃が顔を背ける中、カエデのカメラのシャッター音が鳴り響いた。

「おやおや可愛らしい乳首が潰れてますわよ。」

「……。」

「もう反抗する言葉も出てこないようで、でも罰ゲームは続きますわよ。」

松原は満足すると次の命令を出した。

「陽乃さん今度はこのテーブルの上に登って、四つん這いになってください。」

松原が指定したテーブルはビリヤード台であった。

陽乃は四つん這いになるために拘束具を外して欲しいと言ったが、松原達は拒否した。

「拘束された状態でどうやって四つん這いになるのよ。」

「おや、まだ反抗する力がありましたか、いつまで持つか見物です。」

あと肘を使えば体を支えられますわよ。それとも命令違反としてペナルティを受けるなら考えますが。」

陽乃は手首が拘束されるなか、無理やり肘を使い四つん這い姿勢になった。

「まずは奴隷らしい写真を撮りますわ。」

松原は陽乃の顔の前に水を入れた犬用の皿を置いた。

「では陽乃さんどうぞ。」

もしイキたくなれば水を飲んでください。」

「別に喉は乾いてないわ。」

「そうですか、残念ですね。」

松原が肩をすくめ残念のポーズをしていると陽乃に衝撃が走った。

自分の肛門に何かが入りそうな感覚であった。

急いで後ろ振り向くと、自分のお尻を狙いステッキを構えたツバキの姿があった。

「それではツバキさんもう一度お願いします。」

「ちよつとまああああん。」

ツバキのステッキは陽乃の肛門を的確に狙い命中し、陽乃を苦しめた。

「陽乃はお水はいかがですか？」

「いらぬわ／＼」

「そうですか。」

今度は松原がアイテムを取り出し、四つん這いになっているため重力に従い垂れている胸の乳首に取り付けた。

「ひゃああああん。」

「そんなに気に入りました？」

陽乃に取り付けたのは、スミレによつて取り付けられたローターだった。ただし今回は自動で動くのではなく、松原が手に持っているダイヤルで動く手動式になっている。

「寸止めは体に良くないのですが、頑張つて耐えてください。」

松原は新しく筆を持つて来て、陽乃の耳の中を触り始めた。

胸にはローターの振動が、肛門にはカエデからのステッキの衝撃がきているため、少しずつであるが絶頂に向かっていた。

そして絶頂を迎えると陽乃が覚悟を決めた瞬間、一斉に止まった。

「もう少しでイケそうでしたか？」

それなら手を止めてすみません。

淫乱な陽乃さんはイクのが好きなのに妨害してしまつて。」

「はあはあ、誰が淫乱よ。」

「こんな雑な触りかたなんて全く気持ちよくないわ。」

「そうですか、では続けますね…。」

その後も数回焦らされるが陽乃は水を口にしなかつた。

「強情ですわね、それでは体制を変えます！」

陽乃は四つん這いから体を起こされ、M字開脚の姿勢にされた。

「では陽乃さん、今度はイキたくなつたらイキたいと宣言してください。」

あと、少し本気を出しますのぞ。

松原は口を使い、陽乃の耳を攻め始めた、耳のなかに舌を入れ、耳たぶを甘噛みを行った。

ツバキは陽乃のマン筋を指で撫でたり、クリの近くをデコピンを行い刺激を与えた。

乳首のローターはマックスの強さで振動を与え続けた。

既に何回も寸止めされていた陽乃は簡単に絶頂に近づいたが、やはり寸前で刺激が止まった。

「はあはあ／＼／つく／＼」

「どうしましたか？」



「イキたくなりましたか？」

「誰が？」

「あなた達がどれだけ頑張っても無理よ。」

「ではこれはいかがですか？」

「松原は電マを取り出し、陽乃の股間に当てた。」

「この振動は凄いですよ、覚悟してください。」

「これ使ってオナってるの？」

「あなたの方が変態じゃない。」

「松原は電マの電源を入れた。」

「一番弱い力で触れるか触れないかの距離まで近づけた。」

「さあ来ますよ。覚悟してください。」

「そして肌に直接当てた。」

「ひううつ、ふあああつ……!!」

（想像してたよりもキツイ。これじゃ簡単にイッテしまう…。）

「では力を強くしますね。」

「ダメエ、ひゃあああああつ、ああああ!!」

「おっと危ないですわ、どうですか？」

なかなかの気持ち良いでしょ？

少し落ち着いたら今度は強でいきますわよ。」

陽乃は寸止めの連発で息は荒れ、大量の汗をかいていた。それでも松原の要求には屈せずプライドを保ち続けていた。

しかしそれでも無意識の内に股をすり寄せ刺激を求めている。

「では、行きますわよ。」

「ひゃああああん!!!」

(こんなの耐えれない、耐えられるわけがない。

ダメ、イク!!)

「はい、ストップ」

「あつ……。」

「どうしたんですか？

そんな物欲しそうな顔をして、何が欲しいかしつかりと言ってください。」

「別に何も欲しくないわ。」

「本当に強情ですわね。」

「……までいくと、いつそ清々しですわ。」

松原は再度電マを股に当てようとした時に水野からストップをかけられた。

「お嬢様時間です、この後も予定があります。次のゲームに移りましょう。」  
「後少しで終わります、邪魔しないでちょうだい。」

「では後10分だけ待ちます。それ以上は決して認めません。」

「わかりました。では陽乃さん時間が無いのでペースをあげますわよ。」

その後10分間陽乃は寸止めを耐え続けた。

「あん！やあつ、ひゃあ!!あ、あ、んう、あんっ！」

「まさか耐えるとは思いませんでした。」

悔しいですがここまでですね、褒美に一回だけイカせてあげますわ。」

松原は電マを使い、ツバキが筆を使い耳、乳首ローターも一番強い力で動き始めた。

すると1分もしない内に陽乃は絶頂した。

「では次のゲームです。陽乃さんは着替えて来て下さい。」

手伝って欲しいのなら手伝いますわよ?」

「結構よ、私一人で着替えれるから。」

## 12. レディーススーツ

陽乃は着替えるために部屋に戻ってきたがすぐには着替えれずにいた。

松原達によってイカされたが、1回の絶頂では体の火照りが治まらなかつたからだ。

(まだ体が熱い…)

もし次も負けて、同じことをされたら耐えられるかどうか…)

陽乃の手が無意識に胸と股の近くに伸びたが、強靱な理性とプライドでそれを抑え込み着替えを始めた。

それでもバニースーツを脱ぐ時に股間の辺りが湿っており、糸を引いていた。

下着を穿く前にタオルで股を拭き、どうにか着替え終わった。

大広間に戻ると松原達はソファアーに座り寛いでいた。

「陽乃さん早かったですね。」

てつきりオナニーしてくると思ったので寛いでました。まさかこんなに早く戻ってくるとは。」

「良いから早く始めるわよ。」

次は誰なの？」

「待つてください。恒例のカエデさんによる衣装解説がまだですわ。

それではカエデさんお願いします。」

カエデが衣装の説明を始めたが、陽乃は先程と同じようにさっさと一人で部屋に入りゲームの準備を始めた。

「今回のスーツは夏を意識しました。」

色は上下グレーで揃え下はスカートではなくパンツにし、上は袖を捲ることで7部丈で肘が見えない位になります。

中のシャツは王道の白で清楚感をアピールです！

そして伊達メガネをかけることで、出来るエリートウーマンになります。」

「そうですか、しかし今回はあまりエロ方面ではないのですね。」

「今回の設定はOLではなく女捜査官と聞いているので、プレイ重視です！」

それに服装がシンプルだからこそ、一枚脱ぐときは大変ですよ。

そのために頑張つて勝ってください！」

「任せなさい。必ずや圧倒的な勝利をもぎ取りますわ。」

松原が部屋に入ると陽乃はあからさまに不機嫌な雰囲気を出した。

一方松原は特に気にすることもなく椅子に座り、自分のコインの数を確認した。

「陽乃さん体の調子はどうですか？」

オナニーせず戻って来たので、ムラムラするんじゃないですか？」

「誰がムラムラするのよ。」

私は普通に着替えて戻ってくる、ただそれだけしか考えてなかったわ。

あなたと違って変態じゃないのよ。」

「そうですか、ではこの後の罰ゲームで確認しましょう。」

陽乃さんが変態なのか普通なのかを。」

「なに、もう勝った事を考えてるの？」

あなたはバカだから知らないと思うけど、日本にはこんな諺があるのよ。

取らぬ狸の皮算用、まさに今のあなたにピッタリな言葉ね。」

「流石、陽乃さん物知りですね。」

ゲーム終了後にその諺を詳しく説明してくださいね。

それでは始めましょう。」

く1戦目く

チップ枚数

陽乃20 松原20

陽乃の数字は10 ベットは4

松原の数字は5 ベットは1

松原は一戦目からイカサマを使用し自分のカードを確認した。

そして自分のカードが弱いを知ると、わざと一枚しか賭けなかった。

「たった一枚で良いの？」

私ジョーカーでも引いてるのかな？」

「さあどうでしょう？追加ベツトはどうしますか？」

私はしません。」

「私も追加ベツトはなしで、降りないわ。」

お互い追加ベツトは行わず、松原は降り一戦目は終わった。

(やっぱり可笑しい私の数字は10、強いカードの方だけど勝てないカードじゃない。

それに最初からベツト一枚も少な過ぎるし、最初から降りる気満々だった。

やっぱり何かイカサマをして、自分のカードを確認している可能性が高いわ。)

く2戦目く

チツプ枚数

陽乃22 松原18

陽乃の数字は3 ベツトは4

松原の数字は6 ベツトは6

今回も松原はイカサマを使用し陽乃の背後の壁を鏡にし、自分の方がカードが強いこ

とを確認すると6枚ベットした。

(相手の数字は6、だけど相手は6枚ベットしているから私のカードは相当弱いはず。早く相手がどんなイカサマしているか見つけないと危ないわね。)

最終的に陽乃は降りることを選択した。

「陽乃さんつまらないですね。」

さっきの試合も降りてばかりで勝負しないんですか?」

「勝負するかは私の勝手でしょ?」

それとも絶対に勝負しないといけないルールなの?」

〈3戦目〉

チップ枚数

陽乃19 松原21

陽乃の数字は9 ベットは4

松原の数字は7 ベットは6

松原はまたイカサマを使い自分のカードを確認した。

陽乃は相手のベット数が多いので、今までの結果を考えて降りることにした、しかし松原の方が数字が小さく陽乃はペナルティのクジを引くことになった。

「私の方がベット数多いから自分の方が数字が弱いと思いましたが?」



「……。」

く4戦目く

陽乃、脱衣1回

チップ枚数

陽乃16 松原24

陽乃の数字は8 ベットは4

松原の数字は10 ベットは12

松原は4回連続でイカサマを使用し自分のカードを確認した。

しかし陽乃もイカサマの正体に気がついた。

い。  
（あいつが引いたカードの数字を何かに表したり、誰かが無線で伝えているわけでもない。）

今までの二人も視線はずっと私に向いていた、私の後ろには壁しかない…。

この壁は鏡みたいに反射しないから見ることはできないはず…？

ちよつと待って、確かこのトレーニング室はマジックミラーだった！

つまりこの壁も何かすると鏡に変わる？

それなら視線がずっと私の方向に向いているのも納得できる、後は証拠ね。

このゲーム中に暴いてやるわ。）

ゲームは陽乃が降りを選択した、しかし陽乃はイカサマに気がつき次のゲームで指摘できるように証拠を掴もうと考えた。

一方松原は陽乃がイカサマに気付いたことを確信し、自分の役目を達成したため微笑んだ。

「陽乃が着替え中」

「水野、中堅は誰が行くのですか？」

「中堅はお嬢様です、副将にツバキ様、大将はカエデ様です。」

「水野さん、私が大将ですか!？」

「私じゃイカサマしても陽乃さんに勝てないですよ!」

「安心してください、勝負はお嬢様の番で決まります。」

「私の番にですか?」

水野は松原達に作戦の一部だけを伝えた。

松原の役目は陽乃にイカサマを気づかせて勝つこと。

イカサマを使えば勝つことは簡単だが、イカサマがバレてしまえば後の試合に勝つことは厳しい。

それでも松原は水野が大丈夫と断言したので追及しなかった。

く5戦目く

陽乃、脱衣1回

チップ枚数

陽乃10 松原30

陽乃の数字は12 ベットは4

松原の数字はJ ベットは30

松原はカードが配られると同時にボタンを押し、お互いのカードを素早く確認すると目を閉じた。

陽乃はイカサマの確実な証拠を掴もうとしたが、松原が目を閉じたため何も掴めなかった。

そしてお互いベッド枚数を決めるときに松原はオールベットした。

「正気？いきなりオールベットって何考えてるの？」

「私のカードを見れる陽乃さんならオールベッドの意味がわかるでしょう？」

「やっぱりイカサマしてるわね。」

「まさか、私は直感で全て賭けただけですわ。」

もし私がイカサマしていても証拠はありますか？」

陽乃はいカサマの方法は見抜いたが、イカサマの証拠は持っていないため何も言い返せなかった。

そして松原からの死刑宣告が出された。

「陽乃さん勝負しますか？それとも降りますか？」

陽乃は絶望的な状況になっていた、もし降りた場合でも勝負した場合でも結果は同じで6枚脱衣、特別・過激なシチュエーションを受けなければならない。

陽乃は最後の希望に賭けて勝負を選択した、もし陽乃のカードが松原と同じジョーカーなら引き分けとなり罰が軽くなる可能性がまだあった。

しかし結果はジョーカーではなく陽乃の敗けでゲームは終了した。

最後結果

チップ枚数

陽乃0 松原40

脱衣2回

追加脱衣4枚

特別なシチュエーション

過激なシチュエーション

が決定した。

「では陽乃さん外に出て撮影会始めましょう。」

松原が小屋の外に出るとカエデが走って近づき勝敗を聞いた。

「サクラさんどうなりましたか!? 勝てましたか!?」

「そうですね、結果は陽乃さんから聞いてください。」

あと少し水野とお話するので撮影会を始めておいてください。」

松原是水野の近くに行くのと2人で部屋の間を移動して話始めた。

一方陽乃はカエデに結果を聞かれ自身の負けた結果を言った。

結果を聞いたカエデとツバキは大いに喜び、二人でハイタッチを行った。

「それでは撮影会を始めましょう!」

陽乃はカエデからの要求で色々なポーズを行い、松原が戻ってくるまで続いた。

「お待たせしました。カエデさん撮影はもう大丈夫ですか?」

「はい、十分撮れました。」

「では、罰ゲームの続きを行います、陽乃さん覚悟は出来ていますか?」

「やるなら早くやりなさいよ。」

松原は陽乃を鉄パイプで作られた立方体のなかに立つように命令し、陽乃は命令通り立方体の中に立った。

すると水野が陽乃にロープ付きの手錠と足枷を取り付けると、ツバキがロープを引っ

張り手首は頭の上に足を肩幅まで開かせ拘束した。

そのため陽乃はまるでAのような姿勢になった。

「では特別なシチュエーションの撮影を始めます。」

「そういえば、陽乃さん今回のコスプレは何だと思えますか？」

「何ってキャリアウーマンじゃないの？」

「スーツ着てメイドとかありえないじゃない。」

「確かにメイドではないです、正解は女捜査官です。」

「女捜査官……？」

「やはり知りませんか、では今から体験して頂くので学んでください。」

松原達は陽乃を囲むように移動するとツバキは後ろから股を触り、松原はワイシャツのボタンを開け始めた。

第3ボタンまで開けると陽乃が身に付けている黒ブラが見え始めた。

「くうう、あああん。」

「おっ、もう感じてるのか？」

今朝の恨み忘れてないからな覚悟しろよ。」

「何？ あなたが弱いのが原因なのに私のせいにするの？」

「だから勝てないのよ／＼」

「この状況でまだ強気な発言できるんだな。

おいサクラ、もう道具を使つていいか？」

「ちよつと待つてください。」

今から服を脱がせていきます。」

松原はクジを広げるとジャケットと書かれていたが、陽乃は拘束されているため脱ぐことができない。

そこで松原はハサミを持つて陽乃の前に立った。

「陽乃さん服は脱げますか？」

「この状況で脱げると思ってるの？」

「そうですか、では私達が剥いでいくので決して動かないでください。

動くとは怪我しますよ。」

「ちよつと何する気!？」

松原は陽乃が着ているジャケットにハサミを入れると肩から手首に向けて切つていった。

切り終わるとジャケットは落ち、胸元が開いたシャツだけが残った。

「うゝん、いい眺めですわ。」

胸が大きいから黒のブラがシャツ越しでも見えますわ。」

「おー!!これはエロい、やっぱり拘束されるとエロさ倍増ですね!!」

「では次いきますわよ、あと5枚も腕がささないといけないので。」

松原がクジを引くと中にはズボンと書かれていた。

それを皆が確認すると、ツバキが陽乃のベルトに手をつけ外し始めた。

陽乃は腰を動かし抵抗しようとするのが、ツバキは股に腕を通し陽乃を持ち上げるように力を込めた。

「あん！んんん!!」

「残念だったな、抵抗すればするほど自分に返ってくるぜ。」

大人しくしといった方が身のためだぞ。」

ツバキはベルトを外すと、ズボンのホックも外しチャックを下げ始めた。

少しずつズボンが下がっていくと、代わりに黒の下着が見え始めた。

しかし、まだ陽乃は抵抗しようと足を広げてズボンを下ろさせないようにした。

「ふーん、まだ抵抗するんだ。」

「じゃ、これでも喰らえ!」

「ふあああつ!」

ツバキは陽乃のクリをパンツ越しに刺激を与えた、陽乃はとつさに刺激から逃げるために股を閉じた。



しかしその結果ズボンが膝下まで下げられ、下着が丸見えになった。

「あらあらセクシーな下着ですわね。」

カエデさんしつかりと撮影してくださいね。」

「はいー」

カエデの撮影が一段落すると松原はまたクジを引いた。

次の衣服はワイシャツだった、まず松原はワイシャツのボタンを全て外した。次にシャツを左右から紐で引っ張り固定した、これでブラも丸見えとなった。

「これはブラジャーもセクシーですね。」

そうですね、久々に陽乃さんの口から下着の説明をしてください。

いつもカエデさんが説明してくれますが、今回は休ませてあげましょう。」

「嫌よ、服を脱ぐのは罰ゲームだけど、説明するのは罰ゲームに入っていない。」

「そうですか…では陽乃さんの気が変わるのを待ちましょう。」

ではツバキさんどうぞ。」

「やっとかーじやいくぜー！」

ツバキはピンクローターと電マを持つと陽乃前に移動した、その時にわざと持っている物を見えるようにして準備を行った。

そして準備が終わり、まだ電源が入っていない電マを陽乃の股間に当てた。

「これの威力知ってるだろ？さっきまで受けてたんだから。」

まあ、今回は寸止めは無しで連続イキさせてやるよ。

早く松原の言う通りにした方が良いと思うぜ。」

「誰が言う通りにするもんですか。」

「そうか、でもそつちの方が俺は楽しいから良いけどな！」

「んあああつ！」

ツバキは電マのスイッチを入れると、陽乃は我慢できずに喘ぎ声を出した。

それを確認するとツバキは弱から中に強さを変えた、すると強さが変わると同時に喘ぎ声も大きくなっていく。

「ああああああつ!!」

「なかなか良い声出すな！」

でもこんな調子じゃ簡単に絶頂するぜ。」

ツバキはただ電マを押し付けるのではなく、クリを正確に刺激するように動かしながら刺激を与え続けた。

まだ体の火照りが残っている陽乃はツバキ言うとおりの簡単に絶頂を迎えてしまう。

「あつ、あつ、あつ、ああつ………はあはあ……」

「あらもうイキましたの？」

流石変態さんですね、どうですか早めに言うことを聞けば楽ですよ？」  
「誰が聞くのよ…。」

陽乃は肩で息をしながらも松原達を睨み付けて返答した、一方松原達もこの程度で陽乃が言うことを聞くとは思っていないため、さらに陽乃を追い詰めようとする。

ツバキはピンクローターをパンツの中に入れて、その上から電マを当てた。

「ああつ、ああつ！あくううつ！」

「おっ！もう2回目か、なかなか早いな！」

「流石ですね、こんな短時間に連続で絶頂できるのも才能ですよ。」

陽乃は2回目の絶頂に達した。

松原達は絶頂を確認すると電マとローターの強さを最大にした。

絶頂して敏感になった陽乃は刺激の強さに驚き、口からヨダレを垂らしながら3度目の絶頂を迎えた。

「おやヨダレを垂らすなんて汚いですね。」

全く上の口も下の口も緩くて液体をすぐに垂らして、少しは恥じらいを持つて欲しいですね。」

松原は愛液によって濡れているパンツを触った。

ただ触っているだけだが、敏感になっている陽乃にとっては快楽を感じてしまう。

そのあと、パンツを押し下したため、松原の指も濡れ始めた。

「陽乃さんも本当に強情ですね。」

もう諦めました、特別に私が説明しましょう。

まずはブラからです、こちらはフロントホックとなっており、前から外す事ができません。

色は黒をメインとしており、胸の所に赤い花の刺繍があります。

次にパンティーですが、こちら黒を貴重とし、中央には赤いリボンが着いています。

そしてサイドが紐になっており、簡単にほどく事ができます。形はTバックで臀部を丸出しにしています。

「こんな感じですかね。」

「なんかカエデと違って淡々としてる気がするな。」

「やっぱりカエデの説明が一番良い。」

「私も実際にやってみて難しいと思いました。」

「ちよつと恥ずかしいので過激なシチュエーションに移りましょう。」

「この強情さんに敗けを認めさせましょう。」

「はあはあ…、あなた達が私に勝てるわけないでしょ／＼」

「そうですか。」

「うっ！」

松原は陽乃の言葉を聞くと愛液で濡れた指を陽乃の口に入れた。

そして満面の笑みで陽乃に質問した。

「これで少しは私の指も綺麗になりました。」

お味はいかがでしたか？」

「あなたの汚い指のせいで不味かったわ。」

「…やはり面白いですわ。」

## 13. 開発

松原は次の責めに必要な物を水野に伝え準備させ始めた。

しかし準備に時間がかかるので、その間松原は陽乃で遊ぶ事を決定した。

「陽乃さん、次の準備に少々時間がかかるので調教を始めます。」

調教と言つても簡単です、私達の質問に素直に答えるのと陽乃さんがイク時にイクつて言えば終わりです。

「とっても簡単でしょ?」

「それを簡単と思つているなんて、頭の中お花畑?」

「そういえば全員、名前が植物名ね。」

「とても似合つていると思うわ。」

「また挑発ですか、ツバキさんが言つた通り抵抗や反発をすれば、その分陽乃さんに返つてきますよ?」

「そう言いながら松原はクジを開いた。」

今度はブラジャーと書かれており、とうとう陽乃は下着まで脱ぐ事になった。

「陽乃さんも着ける時や下着の説明をしたので知つてると思いますが、このブラジャー」

はフロントホックなのでいちいち切らなくても簡単に外せるのですよ。」

松原は陽乃が着ているワイシャツをハサミで切り、下着だけの姿にすると、胸の周りを触りながら少しずつ中央にあるホックに指を近づけていった。

そしてホックを外し、ブラを左右に開くと綺麗に整った真っ白の双丘が姿を見せ、その頂点には何度も絶頂したためピンク色の乳首が勃起し存在感を醸し出していた。

「おやおや、すでに乳首が勃っているじゃないですか。」

陽乃さん何で勃っているのですか？」

「さあ知らないわね。気のせいじゃない？」

「素直に質問を答えたら調教も軽くなるのに……。」

ツバキさん徹底的に責めますわよ。」

「了解。左は俺が行くぜ、右は頼んだ。」

ツバキは陽乃乳首を赤ちやんのように舐め始めた。

一方の松原は乳首を指で挟み、コリコリと指の間で転がした。

「うう、くううっ！ふあっ、ううん……っ。」

「しかし本当に柔らかいな、何回触っても飽きないぜ。」

「確かに素晴らしいですわね。」

後日、胸だけでイけるように開発しましょうか」

「面白そうだな。」

松原とツバキは陽乃の体の開発予定を勝手に決めていると、今度は同時に耳を甘噛みし、指で乳首を弄り始めた。

「あ、んん、ああつ……!」

「おっ効いてる効いてる。どっちが気持ちいいんだ？」

耳か？それとも乳首か？」

「気持ち良くなんてない!／＼」

陽乃が大声で否定していると、準備が終わった水野が自動で動く4輪の三角木馬を連れて戻ってきた。

「早かったのね。もう少し遅くても面白かったのに。」

では陽乃さん移動をしましょうか」

松原達はまず三角木馬を陽乃の股の下まで動かすと、一旦足の拘束を外した後、再度三角木馬に陽乃を固定し降りられなくした。

次に腕の拘束を外すと肩にぶら下がっている意味のないブラを取り、腕と首を首枷で拘束した。

「三角木馬のお味はいかがですか？」

普通の三角木馬と違い頂点がゴム素材で丸くなっていますので、股間に食いこまない



ため痛みもないと思いますが。」

「そんなに気になるなら乗ってみたら？」

あと、ことあるごとに感想聞く位興味があるなら自分で経験すれば早いっていい加減気づいたら？」

「全く、責められてる時は素直になるのに…。」

まあ良いです、出発です！」

「ちよつと待てサクラ、1つ忘れてるぜ。」

ツバキはそう言うのと陽乃の目の前に立ち、陽乃の胸目掛けて腕を伸ばした。

陽乃は抵抗しようと体を揺らすがあっさり捕まり、乳首にまたもローターを取り付けられた。

「そうでしたね、私としたことが忘れてました。」

これで本当に出発です。」

松原達は歩き始めると三角木馬が後を追うように自動で進み始めた。

三角木馬が進み始めると陽乃に刺激が訪れた。

乳首のローターが動き始め陽乃に刺激を与えた、しかし陽乃もこの刺激は想定内だったが、問題は股からの刺激だった。

陽乃が股がついている部分が振動し始めた、さらに三角木馬が動く度にガタガタと揺

れ、ローターの刺激を強めた。

「あ、ん、はあ…ん、あ、はあ…」

「言うのを忘れてましたが、この三角木馬のタイヤですが設計ミスで少し楕円形になっています。」

なので動くとき縦に揺れると思います。許してください。」

松原達は次の部屋に行くために道を曲がり、エレベーターに乗って移動した。

陽乃はローターによって常に刺激を与えられているが、その刺激は絶頂するまでには遠く陽乃を焦らしていた。

（連続でイカせるではなく、今度は焦らし責めなのね…。

くっ木馬の振動が厄介、早く着いて。）

陽乃が早く着くように願っているが現実の違いひたすら進み続けた。

木馬が動くとき陽乃のふくよかな胸は大きく揺れ互いに擦れあい、三角木馬はパンツから滴る愛液で濡れ始めていた。

それでも松原達は進み続けたが、左右に別れている角に着くとどちらに行くかわざと悩んだ。

「(っ)を右だな。」

「ツバキさん違います、左ですわ。」

「そうだったか？右だと思っけどな。」

「ではじゃん拳で決めましょう。」

ツバキさんが勝てば右、私が勝てば左です。」

二人はじゃん拳でどちらに曲がるか決め始めた。

陽乃はこの瞬間、目的地に遠回りしている事に気付き、移動の目的は自分を焦らすことだと解った。

その後も行き止まりのためUターンしたり、通った道をわざと通ったりした。

すると突然ローターの振動が強くなり始めた。

「くつくあああ！あああん！」

「すみません、また言うの忘れていました。」

そのローター達は時間が経つと振動が強くなっていきます、あとイク時はイクと宣言してくださいね。」

「またド忘れ？はあはあ…自分の家の部屋を忘れるし……一度病院に行ったら？／／」

「忠告どうも。」

でも安心してください、もう着きますわ。」

やっと目的の部屋に着き、全員扉の前に立った。

そこは出発した部屋の目の前の部屋であり、陽乃は怒りが込み上げたが相手の挑発に乗らないように平気な顔をした。

そしてドアが開くと独特な部屋が広がっていた。

まず白を貴重としたデザインでガラス越しに大小の2つ部屋があった。

大きい方にはパソコンやディスプレイがたくさん置いてあった。

もう一方の小さい部屋は一面が大部屋から見れるガラス面、後の三面は白いタイルなっていた。

さらに床も白いタイルになっており、お風呂のような作りになっていた。

「陽乃さん覚悟してください、この部屋での調教はハードですから。」

松原は陽乃を小さい部屋まで連れていくと三角木馬から下ろし、部屋に備え付けられていた台と陽乃の首枷を合体させ、ギロチンにかけられるような姿勢を取らせた。

さらに腰を曲げさせ、お尻を高く突き出すようにし足を広げて拘束した。

陽乃も必死に首枷をはずそうと体に力を込めるが、どんなに抵抗しても、首枷は外れることはなかった。

「さあ準備が整いました、撮影会を再開しましょう。」

ここで今までずっと静かだったカエデが動きだし写真を取り始めた。

まずは拘束されている顔を撮るため前から、次に丸出しの胸が撮れる横側、最後に存

在を出張するように高く突き出しているお尻を撮るために後ろの順で撮っていった。

お尻の写真を撮っているとツバキが陽乃お尻を突然掴み左右に引つ張った。

陽乃は力を入れて抵抗するが、人の手には勝てずに左右に広げられた、そこに松原がTバックを引つ張ると生地が食い込み肛門をギリギリ隠すだけになった。

「陽乃さん、目の前のディスプレイを見てください。」

なかなか面白い映像が見えますよ。」

陽乃は指示された通りディスプレイを見るとそこには、

今の自分を横、上、後、下から撮影された映像が写しだされていた。

「どうですか？」

首枷のせいで前しか見えませんがディスプレイを観ることで、色々な角度からご自分がどのような状況か確認できますわよ。」

松原はディスプレイを指差しながら説明を行い、今度はカメラの性能を説明をした。

松原が指示を出すと大部屋に居る水野がカメラを操作行くと、後ろのカメラがどんどんズームしていきお尻を鮮明に写した。

「このように鮮明に陽乃さんの肉付きの良いお尻も撮れますわ。」

これで説明を終わります、では脱衣をしましうか次は何が出るかワクワクしますわ。」

すでに陽乃はパンツ一枚しか着ていないため、次に何を脱ぐかは全員知っていた。

陽乃は今から行われる事に耐えるように心を落ち着かせた。

そして松原がクジを引くと、そこにはやはりパンツと書かれていた、松原とツバキは陽乃のそれぞれ左右に行き、パンツのサイドの紐を持った。

「さあ陽乃さん今の気持ちはどうですか？」

文字通り手も足も出さず、大学生になって産まれた姿を他人に見えるのは？」

「……。」

やるなら早くやりなさいよ。」

「ではいきましょ。」

松原達は紐を引っ張り結び目をほどくとパンツがヒラヒラと落ちたため、陽乃は裸となり後ろのカメラに肛門を見せ、下のカメラに陰部をさらけ出した。

どうにか股を閉じようと力を込めるが足枷が邪魔をして閉じることができない、そんな姿を見て松原は笑いながら声をかけた。

「やはり恥ずかしいですか？」

そりやそうですよ、自分より年下の子どもに良いように扱われて無様な姿を晒しているんですから。

ただ今からが本番なのでもっと覚悟してくださいね。」

ツバキと松原は道具を取りに行った。

少し時間が経つと松原は筆とローションを持ってくると陽乃のお尻の目の前にしゃがみ、何も浸けない状態の筆を肛門周りに当て撫で始めた。

「あう……う、ん……んんっ」

「やはりもう感じますか？」

「違うわ、くすぐったいだけよ。」

「それは申し訳ないです、では止めて次のステップにいきましょうか。」

松原は筆にローションを着けるとまた陽乃の肛門の周りを丁寧に撫でた。

「流石にもう自分が何をされるか解りますよね？」

「うう、うっ。あなた最低な人間だわ。」

「あなたが素直に私達の言う通りにしていれば良かったのです。」

では、また次のステップにいけますか。」

松原が言い終わると丁度ツバキが大きい道具をワゴン車に載せて戻ってきた。

ツバキはその中から大きな注射器を取り出し液体を入れると準備が終わり、陽乃の肛門に先を入れようとした。

逆に陽乃は絶対に入れさせないように腰を動かし抵抗しようとしたが、松原が腰を固定したため抵抗できなくなると注射器が肛門に入った。

注射器がしつかり入ったのを確認するとツバキは液体を陽乃に注入した。

「ぐあゝあゝあゝ あああ!!」

陽乃は声を上げ入ってくる液体に抵抗しているが虚しく、液体はどんどん入っていった。

全て入れ終わる頃には陽乃はぐったりとしていた。

「おやおや、もうダウンですか?」

「く、トイレに……、行かせて……。」

「すみません、何と言いましたか?」

全く聞こえませんでした。」

「トイレに行かせて!」

「ダメです。」

陽乃は腹痛に耐えながら松原にお願いしたが、松原は笑顔で拒否した。

それだけでなくツバキに指示し追加で注入し始め、陽乃はうつ向きながら、必死に力を入れ抵抗をした。

「もう……無理い……。」

「これ以上はダメエ……。」

「やつと反抗しなくなりましたね。」



松原は陽乃の顔を見れるように前に移動して、うつ向いている顔を無理やり上げディスプレイを観させた。

「見てください。」

お腹が少し膨れていますね、一体どれくらいの量が出るのか楽しみです。

おや肛門がピクピク動いていますよ、もう出そうなんですか？」

「だから…トイレに…トイレに行かせて!!」

「仕方ないですね、では少々お待ちを準備しますのです。」

松原が水野にアイコンタクトを行うと水野は機械を操作した。

すると陽乃の股の間から和式便器のような物が現れた、さらにどんどん上がっていき肛門近くまで上がった。

「さあ、トイレの準備はできました。」

いつでも漏らして大丈夫ですよ、この状況ならどれだけ激しく出しても部屋は汚れませんわ。」

「違う！こんなものじゃなくて、普通のトイレに行かせて!!」

「全く、我が儘な人です、少しお仕置きしないとダメですね。」

ツバキさんお願いします。」

ツバキは陽乃のお腹をゆつくと上から下に撫で始めた、それは僅かな力だが陽乃に

とつては致命的だった。

お腹の液体が上から下に向かうようになり、肛門から、少しずつ漏れ始め決壊が目前となった。

そして松原が再度合図するとツバキはお腹を押す力を強くしたため、ずっと我慢していたがとうとう決壊した。

「あゝあああああツツツツ!!!」

肛門から勢いよく液体が出てきた、どうにか排泄を止めようと肛門に力を入れるが我慢していた液体の力には勝てず延々と流し続けた。

全て出し終わると陽乃はまた下を向き、その目には涙が溢れていた。

排泄物は全て和式便器に入り流されたが、排泄物の臭いは部屋に蔓延した。

「クセー、ヤバイヤバイ。サクラ早く消臭してくれ!」

「消臭しますが時間かかるので一回部屋を出てください」。

ツバキは松原に言われた通り部屋をすぐに出たが、松原は部屋から出ずに消臭も行わなかった。

「陽乃さん大丈夫ですか? 凄く臭くて呼吸も難しいですわね。」

松原は陽乃に質問するが陽乃は既に体力を使い果たし、何も答えられなかった。

「私は優しいのでもう一度聞きます、陽乃さん臭くないですか？」

「……。」

陽乃は何も言い返す力も言葉も出てこないため黙りこんだ。

松原は一度部屋を出るとマスクを着けて戻り、いきなり注射器を陽乃の肛門に突き刺し再度液体を注入を始めた。

「んあああああつ!!」

「まだ声を出せる元気があるじゃないですか。」

松原は2本目を注入を終えると、陽乃のお腹に腹筋マシンベルトを装着し陽乃の顔を覗き込んだ。

「今の状況わかりますか？私がスイッチを押せばマシンが起動しますわ。」

「……だから？」

「あなたら何を言えば良いのか解ると思いますが、まだダメですか……。」

松原は腹筋マシンを起動させると陽乃は顔を歪めた。

「ふひゅっ、ふううううう!!」

（今でも限界なのにマシンのせいで耐えられない。）

簡単に2回目の決壊が訪れた、1回目よりも透明な液体が肛門より便器目掛けて溢れ出てきた。

全てが出し終わると松原は3回目の注入を始めた。

「もう、やめてええ!!!」

「なら質問に答えてくださいね。」

松原は前回よりも多い3本注入すると、肛門にアナルプラグをさし抜けないようにパ  
ンツを履かせた。

これで陽乃は自分の意思で排泄できなくなり、ただ痛みに耐えるだけになった。

「ぐうぐうぐう。何を…言えば良いの?」

「簡単です、この部屋の臭いは何で臭いのか説明してください。」

「勿論私たちが満足いくようお願いします。」

「…排泄したから臭くなりました。」

「失格ですね。」

「!!!雪ノ下陽乃が臭い排泄を何回も行い、部屋に悪臭をまきました。」

「妥協点ですわね。では何をして欲しいか、何をしたいのか言ってもらって良いですか  
?」

「陽乃の汚い肛門に刺さっているプラグを抜いてください、陽乃はカメラの前で排泄し  
たいです。」

「やっとな素直になりましたね。」

松原は陽乃のアナルプラグを抜いた瞬間、透明な液体が溢れ出てきた。

前回よりも量を多くしたため、排泄が長く全てが終わった時は、陽乃は事切れるギリギリだった。

松原は消臭を行い天井からバラの匂いがすると、陽乃は目を閉じ気を失った。

## 14. 開発—2

陽乃は突然起こされた。

意識が覚醒してくると顔や体が濡れている事に気がつき、水をかけられ起こされた事を知った。

自分の状況を確認すると気絶する前と同じでギロチンのように拘束されており、変化といえば股に設置されていた和式便器が無くなっているだけだ。

(やっぱり拘束は外れないか…)

陽乃が脱出できるか確認していると陽乃の目の前に水をかけた張本人である松原が立っていた。

「目が覚めましか？ 涎を垂らしたり、汗をかいていたのでサツパリするように水で流してあげましたわ。」

「そう、ありがとう。」

でもこのままじゃ風邪を引くから外しれくれない？

お風呂に入りたいの。」

「何を言いますの？ あなたはまだまだ責められ続けますのよ？」

「……。」

まだ無意味なこと続けるの？ 私は絶対に屈しないわよ。」

「気絶する前は正直に恥ずかしい事を大きな声で答えていたと思いますが、まあ良いでしょう。」

陽乃は気絶する前の記憶がすっかり残っているため、先程の浣腸プレイを思い出すと冷や汗がでた。

あれを何回もされると理性が危ないと本能から感じていた。

「次のプレイは陽乃さんが選んでください。」

アナルか陰部どちらを責めて欲しいですか？

もしどつちも嫌だとか2択以外の答えを言った場合は両方責めます。」

「…アナル。」

「何て言いましたか？

全く聞こえませんでしたよ処女ノ下さん。」

「あなたやっぱり知っていて…だからわざと2択で聞いてきたのね。」

松原達は陽乃が気絶している時に陽乃が処女なのか何気ない会話から論争にまで発展していた。

松原は経験派、カエデ・ツバキは処女派で議論は白熱したが、水野の直接確認すれば

良いのでは決着した。

そして陰部を広げてみるとそこには、しっかりと膜が残っていたため処女が確定した。

松原は自分が議論に負け、さらにその事をツバキ達に煽られた怒りの矛先を陽乃に決め責めようとした。

「では陽乃さんの希望通りアナルを責めましょう。

アナルで絶頂できるようにしてあげます。」

松原は手袋を着けるとローションに浸け陽乃のアナルを触り始めた。

陽乃対抗してアナルに力を入れた松原の指を入れさせないようにした。

「うううん、くつつん。」

「どうですか？」

「どんどん気持ちよくなってきてるでしょ？」

「アナルに力を入れてますがどんどん広がっていますよ。」

アナルの周りを徹底的に責め終わると松原はどうとう人差し指をアナルに侵入させた。

既に陽乃のアナルに抵抗する力はなくすんなりと第一関節まで入った。

「あ、ああん！」



「とても簡単に入りましたね、既に感じ始めてませんか？」

「誰がお尻で感じるのよ！」

（お尻に力を入れても簡単に入ってくる。

このままじゃ本当にお尻でイクかもしれない。）

松原は指を第一関節までゆっくり出し入れし、数回に一回ローションを付け足しながら続けた。

陽乃は感じてないと言っているが陰部からは蜜が出始めていた。

「おやおや、陽乃さん蜜が溢れ始めましたよ。」

何で溢れてきたんですよ？

まさかアナルで感じたわけじゃないですよね？」

「くううう、ローションが股を伝ってきただけよ／＼」

「やっぱり面白いですね、このまま私を楽しませてください。」

松原は第一関節までしか入れていなかったが、とうとう人差し指の根本まで入れた。

「やあああん！」

「可愛らしい声を出すじゃないですか、私を誘惑しているんですか？」

「誰が…誘惑してる…のよ／＼。」

「バカじゃない。」

「下の口は私を受け入れてるのに、上の口はまだまだみたいですわね。」

松原は根本まで入れている人差し指を出し入れし始めた、先程と全く違い強烈な快樂が陽乃に襲いかかった。

さらに指を曲げたり出し入れするスピードを速めたりと

快樂を与えていった。

「ああ、あふうあ、くふうん」

（何で指一本でこんな感じてしまうの!?

このままじゃダメになる。）

何回も指を出し入れの抵抗がなくなってくると人差し指だけでなく中指も同時に入れた。

「あぐううん!!」

「2本目も簡単に入りましたね。」

「どんどんアナルが開発されていってますよ、しっかり抵抗しないとダメじゃないですか。」

2本同時でも簡単に入る頃には、陽乃は抵抗する力はなくなただ指を受け入れることしか出来なかった。

松原は指を引き抜くと陽乃の前に移動した。

「陽乃さんこの道具を知っていますか？」

「アナルビーズと言うもので今の陽乃さんにぴったりの道具です。」

松原はボールが連結した一本の棒を陽乃に見えるように見せつけた。

陽乃は道具を始めて見たが何に使われる道具か理解でき、予想通り松原はアナルビーズを陽乃のアナルに当てた。

「それでは入れていきますね。」

最初は小さくて物足りないと思いますが、どんどん大きくなっていますので満足して頂けると思います。」

アナルビーズの玉を一つ入れると陽乃の体は大きく跳び跳ねた。

「ひゃううんっ!!」

「気にいってもらえて嬉しいです。」

「まだまだ続くので楽しんでください。」

「はあはあ……くうううん!!!」

「はい、2個目が入りました。」

慣れてきたと思うのでここからはペースをあげていきます。」

「止めなさいいい！止めええええええええ!!!」

陽乃のアナルは玉を次々と飲み込んでいき、全てが入ると絶頂を迎えてしまった。

「はあはあ／＼・・。」

「アナルでは感じないと豪語してたのに感じるだけでなく、まさかイクとは思いませんでした。」

陽乃はお腹の中に入ったアナルビーズが腸にまで達し苦痛を感じ始めていた。

どうにかお腹に力を入れて外に出そうと努力するが、絶頂したため力が入らなかった。

「ううううん。」

(出したいのび、力が入らない。)

「安心してください、今から抜きます。」

ただ入れる時よりも抜くときの方が気持ち良いので無意味なことですが覚悟はしてください。」

「あ、あん！はあつ、んつ、やつ、あああ！」

松原がアナルビーズを引っ張ると玉がテンポよく排出され、そのテンポに合わせて陽乃の体が跳ねた。

そして半分ほど抜くと松原は残りを一気に抜いた。

陽乃は突然の事に理解が追い付かないまま再度絶頂を迎えた。

「はあはあ……はあはあ……」

「まだまだ始まったばかりなのに随分お疲れのようですね。」

「え……!!? んむうううう!! ひゃあああん!!!」

「止めてええええ!!!」

松原は高速でアナルビーズの出し入れを繰り返した。

陽乃も最初は声を出さないように努力はしたがすぐにあえぎ声か叫び声かわかない声漏れた。

松原は陽乃が絶頂する度に体を揺すのを楽しみながら、アナルビーズを動かした。

そして陽乃の体が動かなくなるとやっとアナルビーズを止めた。

「陽乃さんどうですか?」

「アナルで連続絶頂する気分は?」

「もう……止めて……」

「では、どこで何を感じたか言ってください。」

「……………」

「ひゃあう……んんっ……んあっ!!」

松原は陽乃が答えなかったため、アナルビーズを入れた。

「このアナルビーズは特注何ですよ、この握り手を握ると玉の部分に空気が入って大き

さを自在に変化できます。」

「ちよつと、待つてええええ!!くうつうう!!」

松原が握るたびに玉が大きくなり、陽乃のお腹をさらに圧迫した。

先程よりも大きくなった玉を一つだしてみると、大きくなったため刺激も強くなり陽乃の体が大きく揺れた。

それを見た松原は残りの玉を一気に引き抜いた。

その刺激は何度ども絶頂した陽乃でも簡単に絶頂へと導いた。

「ヴええ…うええ…」

全て抜き終わる頃には、半分口を開け涎を垂らし焦点が合わない目で床を見ていた。

その状況を見た水野が松原を止めに入った。

「お嬢様これ以上は危険です。」

「そうですね、これ以上は陽乃さんが壊れます。」

「はあ、また調教に失敗ですわね、でも次こそは成功させますわ。」

「では陽乃さん、次の調教の準備とお昼の準備をしますので、少し休んでください。」

## 15. ランチ

絶陽乃はアナルでの連続絶頂で意識を失いかけたが、休憩をもらい呼吸を整えた。

ふと前を向くと水野が何か準備をしていた。

「陽乃様大丈夫でしょうか？まだ意識が朦朧としますか？」

「大丈夫だからこの拘束外してくれる？」

「もとよりそのつもりです、少々お待ち下さい。」

水野は陽乃の目の前にあるディスプレイを片付けていると松原が戻ってきた。

「水野、後は私たちがやります、あなたはお昼の準備をしてください。」

松原が命令すると水野は部屋を出ていき、変わりに大きなイスを持ってツバキが入ってきた。

松原とツバキは陽乃の足の拘束と首枷を外すと椅子に座らせ拘束した。

「その椅子を覚えていますか？あなたがお漏らしを漏らした椅子です。」

そのせいで誰も使えなくなったのですから賠償して欲しいものです。」

「……あなたのせいでしょ。」

それで今度は何するつもりなの？

もう罰ゲームは受けたからこれ以上はルール違反じゃないの？」

「確かに過激なシチュエーションの撮影も終わりました。でも何か忘れていませんか？」

松原の質問に陽乃は全く思い当たる答えが出てこなかった。

これ以上待つても答えが出てこないと判断した松原はヒントを与えた。

「特別に大ヒントです。」

陽乃さんは今回の罰で何枚脱ぎましたか？」

陽乃は松原からの言葉を聞き記憶を探った。

(まずジャケット、ズボン、ブラウス、上下の下着これだけ…?)

合計で5枚……!?! 5枚!!!)

「気がついたみたいですね。」

陽乃さんは5枚しか脱いでいない、でも罰は6枚脱衣です。

残念ながら脱衣できない場合は追加で別の罰ゲームを受けることになりますね。」

松原が笑顔で説明を始めると、陽乃の顔はこわばっていった。

「では新しい罰ゲームを始めましょう。」

ただ安心してください、ランチが近いので短時間で終わりますわ。」

松原がスイッチを押すと、前回と同様に手は頭の上で拘束され足は大きく開かれ大開



脚の姿勢となった。

しかし前回と違い今回は下着や服など一切着ていないため陰部が丸見えの状態となった。

さらにディスプレイは撤去されているがカメラは生きており陽乃の姿をしっかりと撮影していた。

「クソ、離しなさい!」

「暴れても無駄なことは知ってるでしょ。」

無駄な抵抗は体力を無駄に使うだけですよ。」

陽乃はどうか脱出できないか体を揺らしたが、しっかりと拘束されているため大きな胸を揺らし、体力だけを無駄に使った。

その間にも松原とツバキは罰ゲームの準備を行っている。

「サクラ順番はどうする?」

俺が先か?」

「そうですね、私は安全な2番目が良いです。」

「了解なら始めるか。」

ツバキと松原は拘束されている陽乃に近付き、太ももの付け根と腰に拘束ベルトを追加で取り付けた。

これで腰や股が完全に動かすことができなくなり、それを確認するとツバキがハサミを持って陽乃の陰部の前にしゃがんだ。

「はみ毛してみたいだが意外に整えられているじゃん。」

「…まさか!？」

あなたたち正気なの!!」

「おつもう気がついたか、察しが良いな。」

多分、陽乃が考えていることで合つてると思うぞ。」

ツバキは右手でハサミを持ち左手で陰毛を持ち上げ、ハサミを陰毛の根本に入れるとカットした。

手に持った陰毛を小さい透明の袋に入れると再び陰毛のカットを始めた。

「ちよ!!辞めなさい!」

「動けないように拘束してるが暴れると手元が狂つて危ないぜ。」

ほら、今回もいっぱい取れた。」

ツバキはカットごとに新しい袋に入れていき、満足するとハサミを置いた。

「これで終了だな、これ以上はハサミでは無理だ。」

サクラ頼んだぞ。」

「はい、任せてください。あと料理を作り終わっていると思うので水野を呼んで来てく

ださい。」

ツバキと入れ替わりで松原が股間の前にしゃがみ、手にもっているシェーバーを使い残った毛を剃っていた。

その間にツバキは水野を呼びに部屋を出て行った。

「柔らかそうで可愛らしい陰部じゃないですか。」

これを隠す何てもつたいない、私たちがもつと綺麗にしてあげますわ。」

松原は丹念にシェーバーを動かした。

そして剃り残しがないか確認するために陰部を触り始めた。

「くううう、何触ってるの!?!」

「剃り残しが無いか確認ですわ、やはり少しだけ短い毛がありますねチクチクします。」

拘束をされているためですかね、陰部のお肉がふつくらしています。」

松原が陽乃の陰部で遊んでいると、ツバキとランチの準備が終わった水野が戻ってきた。

水野は大量の泡が入ったボウルとカミソリを持って陽乃の目の前に行くと、その泡を陰部に塗り始めた。

「水野、慎重にお願いしますわ。絶対に傷を着けたらダメですわよ。」

「承知しております。」

では陽乃様少し熱いと思えますがしよしよし我慢してください。」

水野はカミソリを巧みに使い肌を傷つけないように剃り残しの毛を剃っていた。

泡を全て拭き取る頃にはツルツルとした肌が残っていた。

「これでやつと完成ですわ陽乃さん。」

「これで気がすんだかしら？」

なら早く拘束を外して！」

「そう怒らないでください、まずは写真撮影をしないと。」

せつかくパイパンになったのに写真を撮らないのは勿体ないですわ。」

カメラを陽乃の陰部残っていた前に設置した。

カメラは自動でフラッシュ付きで撮影を行うように設定されていた。

フラッシュを付けることで陽乃は撮影されていると余計に感じ、どうにか股を隠そう

とした。

「無駄だと解らないのですか？」

それだけ拘束されていれば隠すことは不可能です。

大人しく写真を撮られてください。」

(ありえない、私がこんな写真を捕られるなんて…。)

「それではメインディスプレイを頂きますか。」

松原は陽乃の後ろに回った。

背中から伸びた腕は陰部に達すると左右を少しずつ広げていった。

陰部が左右まで限界に広げられると、その中には男を知らない証拠である膜があった。

カメラは膜を何度も撮影し続け、陽乃はフラッシュの光を見ないように頭を下げる事しか出来なかった。

「お嬢様、お昼の準備が出来ています。

隣の大部屋に準備をしますので移動をお願いします。」

「残念ですが皆さん移動しましょう。」

おっと忘れていました、陽乃さんもランチは一緒に食べてもらいますのでドレスコードに着替えてもらいます。」

松原は陽乃のアナルにデイルドを差し込む、クリトリスにローターをテープで固定すると貞操帯を履かせた。

次に胸に手を伸ばし左右の乳首にそれぞれリングを付けるとブラを付けた。

「人を辱める物を取り付けて何がドレスコードよ。」

「辱める意図はありませんわ、それは陽乃さんが抵抗すれば起動しますが抵抗しなければ無害です。少し違和感を感じると思いますが。」

「辱める以外に何かがあるのおお!!」

陽乃が抗議していると乳首のリングとクリトリスのローターが振動を始め、デイルドが伸縮を繰り返し陽乃に刺激を与え始めた。

「くうううううう。」

松原がスイッチを押すと一斉に止まった。

「言いましたよね? 抵抗すると起動し מאוד。」

「これで体でも覚えてくれたら良いですが。」

松原は陽乃が抵抗しなくなると貞操帯の上からオムツを履かせると首輪をつけ、それを隠すようによだれ掛けと頭に頭巾を被せた。

全てを着せ終わると陽乃の拘束を解いた。

「では大部屋に移動しますので陽乃さんはハイハイで私たちに付いてきてください。」

もし抵抗する場合は先ほどと同じように機械が一斉に動きますよ。」

松原達が歩き出すと陽乃も後を追うように歩いた。

松原がすぐにボタンを押すとローターやデイルドが動き始めたが陽乃は快楽を感じながらも松原達の後を歩いて付いて行った。

「ああああん、くううん。」

「その反抗心が一体どこから出てくるか不思議ですわ。」

陽乃は途中で絶頂したがどうか大部屋まで歩いた、大部屋に入ると機械が一斉に停止した。

大部屋には洋風の料理が並べられており、松原達は椅子に座っていった。

「私の席がないんだけど？」

「安心してください、今水野が取りに行ってます。」

水野は大人でも座れるベビーカーを持って戻ってきた。

「これに座れって言うの？」

「はい、赤ちゃんも赤ちゃん用の椅子に座るのは普通ですよ。」

陽乃は説明するために立った松原の椅子に座るために向かい始めた。

「ここまで歩いて来れたから良い気になってないですか？」

機械はただ震える以外の性能もあるんですよ。」

陽乃が歩いていると突然電流が流れた。

「んっぐうううううっ!!」

突然のことに陽乃は倒れるように地面に膝をついた。

（今、何が起きたの!?!）

「どうですか？」

電圧は強くないですが急所に直接流れるのは効くはずですよ。」

その言葉で陽乃は理解した、松原に取り付けられた機械と首輪から電気が流れたことを。

陽乃が膝を地面についていると松原とツバキが脇に手を通し無理やり立たせせ、ベビーチエアーまで連れて行った。

陽乃も抵抗しようとしたが、電流の影響で上手く力が入らず椅子に座らされた。

赤ちゃんの落下防止ようのベルトを股から腰に付けると足も椅子に拘束し腕も腰の後ろで纏め、胸元に小さいテーブルを設置した。

最後におしやぶりの形をした猿轡を啜えさせると松原達は席に座った。

「それではランチを始めましょう。」

松原の合図で各自一斉にご飯を食べ始めランチが始まった。

ヴィイイイイン……………ヴィイイイイツン

「ウウン、アアアン……………クツウウン。」

陽乃は食べるどころか機械の振動によって責められ続けていた。

ランチが終盤となると松原が近づいて来た。

「申し訳ありません、陽乃さんのことすっかり忘れていました。

陽乃さんもお腹減ったと思うのでランチにしましょう。」

松原はローターを停止させると猿轡を外した。



猿轡を外した口に持つていた哺乳瓶を啜えさせた。

「さあ飲んでください、水野が作ったので味は保証しますわ。

もし飲まなければ無理やり飲むことになります、出来ればその様な事をしたくありません。」

陽乃は松原のことを睨みながらも哺乳瓶を吸い始めが、哺乳瓶の中は液体というよりもゼリー状で強く吸わないと出てこないため頬を膨らませて吸い続けた。

松原は陽乃が飲み始めると動画を撮影し始めた、されに陽乃を挑発するようにしゃべり始めた。

「はるちゃん、おいちいですか？」

陽乃は返答せず、哺乳瓶を吸い続けた。

陽乃が無視をしても松原は声をかけ続けた。

「はるちゃん、お腹いっぱいになりまちゆか？」

「そんな焦って飲まなくても誰もとりまちえんよ」

松原の質問に答えず必死で飲み続けた結果哺乳瓶を飲み切った。

哺乳瓶が空になると松原は哺乳瓶を口から離すと新しい哺乳瓶を陽乃の口に入れた。陽乃は抵抗しようと顔を振るが、松原が上手く動かし哺乳瓶は口から離れなかった。

「質問に答えずにつつと飲んでいたからお腹が減っていると思いまちた。」

人の質問に答えないと自分の意図は通じまちえんよ。

・もし抵抗するなら先ほども言ったと思います。が実力行使でいきますよ。」

陽乃は少し考えた後、2本目を飲み始めた。

しかし一口飲むと陽乃はむせてしまい、口から零してしまいよだれ掛けを汚してしまつた。

「何よこれ、アルコール入ってるじゃない。」

「そうでちゅよ。」

ただ少ししか入れてないので我慢してごつくんしてくださいね。」

陽乃は二本目の哺乳瓶を飲んでると体が火照り始めていた。

(アソコが疼いて体が熱くなっていく……)

「はるちゃん顔が赤いですよ。」

「どうかしましたか？」

「なんでもないわ／＼。」

陽乃は簡単に答えると2本目を飲み続け、あと少しで飲みきる量まで減らした。

「はるちゃんお腹いっぱいでちゅか？」

「ええ、もうう・十分よ／＼。」

「そんな口調じゃダメでちゅよ。」

はるちゃんは赤ちゃんなので赤ちゃん口調じゃないとだめでちゅよ。

早く答えないと3本目飲むことになりまちゅよ。」

赤ちゃん口調で話すなんてプライドが許さないが、言うまでは延々と飲まされると過去の経験で知ってるため、赤ちゃん口調で答えた。

(ここは大人しく従ったフリの方が得策ね・・・)

逆らっても無理やり飲まされる可能性が高い。

「・・・お腹いっぱいでちゅ。」

「よく言えまちちね。」

陽乃が2本目を飲み切ると拘束を解いた。

「それではランチタイムは終了です。」

ゲームを再開しましょう、4回戦のために着替えて着てください。

あと、首輪やローターは外さないでくださいね。」

# 16. スク水

〔第4試合〕

ランチを挟みポーカーの第4試合の準備を各自行っていた。

陽乃は着替えに行き、松原達は作戦を練っていた。

「水野、次はツバキさんでよろしいですよね?」

「もうお嬢様の勝利は決まっていますのでカエデ様でも構いませんが、ここはツバキ様で行きましょう。」

「そうですか、ではツバキさんお願いします。」

「何回も言うが負けても文句言うなよ!」

作戦会議が終わると丁度陽乃が着替えて戻ってきた。

「やっと戻って来ましたか。」

「おや顔が赤くて息が荒いですがどうかしましたか?」

「くう／＼あなた私に何を飲ませたの!?!／＼」

「最初のジュースはバナナとリンゴ、イチジク、アボカド、豆乳、ハチミツを混ぜたジュース。」

2杯目は赤ワインにハチミツ、シナモン、ラズベリージャムを入れただけです。特に変な物は入れてませんわ。

「そうですね水野？」

「はい、その通りです。」

陽乃様、私が作りましたがお嬢様が言った通りの物しか入れていません。」

「ただ、この食材達は国や時代によつては媚薬や滋養強壮に使われていたみたいですがね。」

クレームはほどほどにして衣装の説明をしてください。」

松原が言い終わるとカエデによる衣装説明が始まった。

「今回の衣装ですが実は特に弄ってないんですよ・・・」

コスプレ店で買えるスク水を着てもらいました。

ただし一般的なスク水とは違い背中は大きく空いて、陽乃さんの美しい背中とうなじを見ることができません。

そして今回の一番の見所は普段絶対に見ないスク水とニーソの絶対に領域です。

ネット調べるとスク水ニーソというジャンルがあつたので今回は、それにしました。」

カエデの説明が終わるとツバキは対戦用の小屋に入り勝負が始まった。

（1戦目）

チップ枚数

陽乃20 ツバキ20

陽乃の数字は7 ベットは3

ツバキの数字8 ベットは2

(体が暑い・・・)

陽乃はクーラーが効いている部屋でスク水という涼しい環境だが汗をかき、息が荒れていた。

それでも試合が始まると集中しようと頭を必死に切り替えた。

(相手はイカサマを絶対にしてくる、いつ行うかわからないけど見逃さない必ず見抜いてやる。)

ツバキは水野の指示通りに1戦目からイカサマを使い後ろの壁を鏡にし、視線を鏡の方にずらした。

すると陽乃はツバキが壁を見たのに気づき自分も振り向いた。

「やっぱり・・・イカサマしてたのね／＼」

「何で今の一瞬で解るんだ!？」

「化け物か!？」

ツバキが驚いているとすぐさま松原が小屋の中に入った。

「まさかイカサマを見抜くとは……流石に天晴れですね。

それではルール通り第4戦はこれで終了します。

今回は特別に着替えるのは結構です、そのままの格好で5回戦も戦ってください。

あと、この小屋少し寒いですね空調を入れますわ。」

ツバキと松原が部屋から出るとオドオドしてカエデが入ってきた。

まるで借りてきた猫のように背中を丸め、誰が見ても緊張していた。

「早く座って、始めるわ。」

陽乃の言葉を聞くと急いで椅子に座り、勝負が始まった。

く5試合1戦目く

チップ枚数

陽乃20 カエデ20

陽乃の数字は12 ベットは4

ツバキの数字9 ベットは1

陽乃はボヤける頭を必死に動かし勝負を選び、反対にビビるカエデは降りを選択した。

く2戦目く

陽乃22 カエデ18

陽乃の数字は7 ベットは8

ツバキの数字13 ベットは4

陽乃は相手がゲーム初心者とわかると強気のベットを行い相手を降りさせた。

〈3戦目〉

陽乃26 カエデ14

陽乃の数字は13 ベットは2↓6

ツバキの数字8 ベットは1

陽乃は相手が8であるため様子見で2枚かけたが、相手が1枚しかかけなかったので自分のカードが強いことを確信しベット数を増やした。

(この子は素直で気が弱いタイプね、こっちが多くかけたら基本的に降りる。)

早く終わらせて休憩しないと体が暑い・・・)

カエデはここでも降り3試合連続で降りた。

〈4戦目〉

陽乃29 カエデ11

陽乃の数字は11 ベットは2



ツバキの数字1                    ベットは4

ここでツバキは数字で一番強いカードを引いたが陽乃も平均より強いカードを引いていたため、ツバキはたった3枚しかかけなかった。

そのため陽乃はこのゲーム初の降りを選択した。

(次でラスト・・・体が疼くけど、どうにかギリギリになりそうね……)

あと部屋全体も暑い・・・?)

5戦目)

陽乃27 カエデ13

陽乃の数字は6                    ベットは1

ツバキの数字9                    ベットは3

陽乃はベットが終わると降りを選択した。

最終結果)

陽乃25 カエデ11

陽乃はツバキ戦を脱衣0で乗りきり、小屋を出た。

「陽乃さん素晴らしいですわ、まさか脱衣0で終わるとは。」

「全く心がこもっていない称賛ありがとう、じゃ自分の部屋に戻るから。」

あと空調効きすぎ小屋の中暑かったわ。」

陽乃が歩きだし扉のドアノブを持った瞬間、乳首のリングが震え始めた。  
「ああああん!」

短時間の弱い振動でも今の陽乃にとっては危険な刺激だった。

「陽乃さんなぜ部屋に戻ろうとしているのですか？」

まだ罰ゲームを受けてないはずですよ。」

「何で私が罰ゲームを受けるの!？」

きや、なにをするの!!」

水野が陽乃の手を組ませ、拘束ベルトをかけるとカエデと共に脇を持ち小屋まで無理やり連行し椅子に座わらした。

「何で自分が罰ゲーム受けるかわかってないんですか？」

「だから何で私が罰ゲーム受けるの。」

私は1・4・5戦目に勝って3勝したわ!」

陽乃は椅子から立ち上がろうとした瞬間アナルに刺さっているデイルドが動き、立つことが出来なかった。

「くううう!!」

「勝手に小屋から出るなんて困りますわ。」

「しつかり私の説明を聞いてください。」

陽乃は体を休めたいため早く部屋に戻りたいが、松原が帰す気がないとわかると大人数く椅子に座り直した。

「話を聞いてあげるから、部屋の温度を下げて暑すぎるわ。」

「それは陽乃さんが発情しているから暑いと感じてるのでは？」

しかし、その汗では脱水状態になる可能性があるので水でも飲んでください。」

「また何か入れてるでしょ？」

「はあ、仕方ないでね。」

松原はコップに入った水を飲むと続いて水野も飲んだ。

それを確認すると陽乃は考えコップに手を伸ばした。

陽乃はずっと汗ばみ続けており、喉の乾きは自覚していたため、陽乃は怪しいと思いつながらも一口飲むと何も味がなく透明なため本当に何も入れてないと信じ松原の説明を聞きながら飲み干した。

「陽乃さん、そもそも4戦目に本当に勝ちましたか？」

「何言ってるの？」

あなたの仲間がイカサマしていたのが発覚したじゃない。」

「確かにイカサマが発覚しましたが私は説明の時に「相手の不正が発覚した時点でゲームは終了します」と言いました。」

1 回戦目の途中で終わったのでお互いコインの枚数は20枚で引き分けです。

誰も不正が発覚したら不戦勝とは言ってませんよ。」

「そんなの屁理屈じゃない！」

仮にそれが通ったとしても結果は2勝2負1引で罰を受ける必要はないわ。」

「また誤解してきますよ。」

確かに5戦した結果引き分けですが、陽乃さんは3勝して私たちに勝ち越さないで罰ゲームを受けて頂くと説明したはずですよ。」

松原はボイスレコーダーを取り出し説明時の会話を陽乃に聞かせた。

「理解出来ましたか？」

「……。」

完璧な証拠を出され反論の余地がなくなつたため何も発することが出来なかつた。「ただ私たちとしても後味が悪いのは真実です。」

なのでどうでしょう？」

もう一度ゲームを行い勝敗を決めるのはいかがでしょうか？」

それとも今から罰ゲームを大人しく受けますか？」

陽乃にすれば罰ゲームをわざわざ回避できるチャンスであるが、逆に松原側にとってメリットはないのになにわざわざ提案したか疑問を抱いた。

（一体何が狙いなの？

向こうにメリット何てないはずなのに・・・）

「どうしますか？」

「何が狙いなの？」

「また貴方に完璧に勝利し、今度こそ屈服させることですかね。」

陽乃の問いに松原は簡単に答えた。

その返答は陽乃のプライドを攻撃した。

「勝負内容と罰ゲームはどうなるの？」

そこを聞かないと何も答えられないわ。」

「そうですね。」

勝負は何にしましょうか？」

松原は手を顎に持っていき考えているように振る舞った。

「では今回は陽乃さんに有利なゲームしましょうか

まずゲームを3つしてもらいます、その中の1つでもクリアできたら陽乃さんの勝ちです。」

ただしスマレさんやカエデさんの退場の罰ゲームは無効にしますがよろしいですか

？」

「別にあの子達の罰ゲームは正直興味無いから良いわ。

それで本命のゲームの内容は？」

「まずカラオケですね

陽乃さんが一曲歌い85点以上でクリアです。

曲は自由に決めてください。

次にリズムゲームです、こちらは床が光るのでそれをリズム良く踏んでいく簡単なゲームです、例を出すとゲームセンターにあるのを思い浮かべてください。

こちらも85点以上でクリアです。

最後にツイスターゲームです。

こちら一人で行ってもらい15回指示をクリアできたらクリアです。」

(今のところは普通のゲームね。

ただ何か絶対に妨害がある、それこそ今中に機械を着けてるから動かしてくるはず・・・)

「次に罰ゲームと言って良いのか怪しいですが、陽乃さんが壊した物の損害賠償を払ってもらいます。」

「は？」

「私が何を壊したの？」

「例えばあなたが漏らしたため椅子は汚くて破棄しないといけませんし、私が作った服や下着をHな汁で濡らしたじゃないですか？」

「それは貴方達が無理やりやったせいじゃない！」

「それでも誰がしたんですか？」

陽乃は何も言い換えせず、罰ゲームが賠償金を支払うことで決定した。

ゲームと罰ゲームが決まったので松原は勝負をするのか陽乃に聞いた。

「……とりあえず、体に着いている機械を外してから考えるわ。」

「それはダメです。」

「このゲームが終わるまでは絶対に着用です。」

(やっぱり、機械を使うきね・・・)

「それはズルすぎない？」

「そうですか？」

ではカメラを回すので、その中で何故機械を取って欲しいのか説明を頂ければ取りましよう。

ただしその場合は3つのゲーム全てクリアしてください。

「これでどうでしょう？」

陽乃はこの2択でどちらを取るか考えた。

(仮に機械が無くなっても妨害は必ずある。

ただ機械があれば悔しいけど今の体じゃ1勝出来るか怪しい…。)

陽乃は決断し松原に返答した。

「…ビデオを回して。」

それは短く小さい声での答えだったが松原は笑顔で返答し水野に指示を出した。  
「では陽乃さん話してください。」

ただし私たちが満足するようにお願いします。」

「私はこの機械での妨害が予想されるのでフェアな戦いの為に取って欲しいです。」

「…全然ダメですね。」

ビデオを選択したので期待してましたが残念です。

このままでは機械を着けたまま勝負を始めますよ。」

「…：雪ノ下陽乃は機械によって感じるため勝負に集中できません。」

なので機械を外して欲しいです…。」

陽乃は怒りを押し殺し、どうにか言葉を言い切った。

これで松原は満足し勝負が始まると思っていたが松原は満足しなかった。

「まだまだダメですね…。」

これ以上、何回もチャンスを与えても無理なので勝負を始めましょう。」



まずは何からしますか？」

陽乃は松原が満足すると思っていたので予想外の回答に驚いた。

このまま勝負が始まることは避けたい陽乃は再度プライドを押し殺し松原にお願いした。

「何をすれば満足するのか教えて。」

「人に物を頼んでいる立場なのに言葉使いを間違っていないませんか？」

（クソガキが…。）

「お願いします、何を言えば良いのか教えてください。」

「仕方ないですね、ではスマイレさんをお願いします。」

スマイレさんの言うとおりにしていれば合格です。」

松原は電話を使いスマイレを呼び出した。

数分もしない内にスマイレが部屋に入ってきた。

「ヤッホー、陽ちゃんお久しぶり！」

地獄から戻ってきたよ〜」

陽乃はスマイレの挨拶を無視した。

松原はため息を尽き、スマイレ達に現状を説明した。

「なるほど理解したわ〜、それで私を呼んだのね〜。」

スミレは陽乃に近づき、陽乃の周りを一周した。

「うん、なかなか面白い物が着いているね！」

それじゃ始めようか！」

スミレは陽乃に見えるようにスケッチブックを掲げると、そこに書かれている内容を読ませた。

「雪ノ下陽乃は乳首にリングを取り付けていますが、

このリングが…っは！」

陽乃が説明している最中にスミレはリングを振動させた。

「陽ちゃん感じてないで読まないで最初からやり直すことになるよ。」

「くっ…このリングは…ああ、振動するので、かっ感じてしまいます。」

陽乃がどうにか言い終わるとスミレはページをめくり、リングの振動を止め、クリトリスのローターを振動させた。

「次にクリトリスに着いているっつ…ローターに着いて説明しますう…ああん。」

ローターはずれないように…はあはあ…貞操帯で固定されています。

そのため、常に気持ちいい箇所…振動を与え続けますううう！」

「はーい陽ちゃんに質問です！」

陽ちゃんは感じていますか？」

「くっ、とても感じていますうん……油断すると簡単に絶頂します……」

「それじゃ次で最後だね。私達が見やすいように後ろを向いて、お尻を突き出してね。」  
「最後にアナルに入っているデイルドについて説明します。」

このデイルドは振動するだけじゃなく、弱い電気も流すことができます。

アナルが大好きな陽乃にとっては毎日のオナニーに使いたいのですが、ゲームをするときに着けていると、そのままオナニーをしてしまうので外してください。」  
「本当にそんなに感じるの？」

実際に見てみたいな〜」

「では実際に見てくださあぁあぁん!!!」

スマイレの猿芝居に付き合うために話しているとデイルドが振動を始めた。

陽乃もいつ刺激がきても良いように身構えていたが、想像を越える刺激に大きい喘ぎ声を出してしまった。

さらに足に力がいらずに地面に座りこんでしまった。

「本当に振動しただけで感じてるね！」

次は電流の確認したいからその体制でお尻を突き出して。」

陽乃は正座の状態からお尻を上突き出した。

「どっどキドキする？」

今から電流が流れるよ、さつきよりも強い刺激が来るよ」

「やるなら…さつきと…やりなさいよ」

「それじゃ行くね」

3! 2!! 1!!!  
「ゴ—!!!」

「くううううん!!!」

「はい、終了」

まさか数秒しか流していないのに絶頂するなんてね」

でも良かったね、これで機械を外せるよ！」

「はあはあ…余計なお世話よ」

松原も満足したのを確認すると陽乃は立ち上がり部屋に戻ろうとしたが、その前にツバキやスマイレが立った。

「おつとどこに行くんだ？」

機械はここで俺たちが外すんだぜ。

それが嫌なら無理やり通ってみろよ、ただ朝のようにはいかないぜ」  
「まだ朝のここと根に持っているのね、執念深いというか醜いというか。」

陽乃が言い終わる前にツバキは陽乃の方向に走り出した。

そして陽乃の腕をと片紐を捕まえると同時に陽乃も袖と胸ぐらを掴んだ。

「どうした！」

今朝と違って全く力が入ってないぜ！」

ツバキは陽乃を前後左右に揺らし、バランスを崩した所で大外刈を決め陽乃を倒すと、そのまま寝技に以降しスク水をずらした。

「相変わらず、大きな胸だな。」

陽乃はスク水を腰まで下ろされたため胸を露出した格好となり、さらにツバキが寝技からキヤメルクラッチに変えたため胸を突き出す体制になった。

「くううー！離しなさい！」

「どうだ、これは朝の仕返しだ！」

キヤメルクラッチが完全に決まるとスミレは乳首に着いてあるリングを外し始めた。

「わーお！」

乳首凄く大きくなってるね、リングのせいで窮屈じゃなかった？

今外してあげるから待っててね〜」

「ぐううん！ ああ！」

スミレはリングを外すと、それぞれの乳首にキスを行った。

ツバキはリングを外し終えるのを確認すると、今度は仰向きの姿勢にすると、腰まで下ろしていたスク水を真上に引っ張った。

スク水につられて陽乃の足も真上に向かつて伸びていった。

「これで最後だぜ、スマイレパス！」

「了解。」

スマイレは自身が着ているスカートを広げると陽乃の顔を挟むように膝たちになり、下着を顔に押し付けた。

さらにカエデから陽乃の足を受けとると足を顔の方に引っ張り、まんぐり返しの姿勢にした。

「ぐおおん!!…つつ!、あつう!!」

「陽ちゃん、良いよ！」

陽ちゃんが喋るたびに心地よい刺激が来るよ！」

陽乃は抵抗しようと暴れようとしたが、しっかりと固定されているため逃げれなかった。

ツバキは松原からもらった鍵を使い貞操帯のロックを外し、貞操帯を取った。

取った瞬間に貞操帯から湿った空気がツバキを襲った。

「なんだこれ、貞操帯のなか凄く湿っているぜ。」

「くううん!、ううるあい!!」

「何て言ってるか全然わかんね。」

まあ関係ないか、そんじやさつそくローターを取りますか。」

ツバキはクリトリスに着いてあるローターを手に取り、テープを外した。

「なんだこれ、凄くベトベトしてるぜ。」

「どっだけ感じてるんだよ！」

「ツバちゃん良いなー」

「それ嘗めたら絶対に甘いやつじゃん。」

「誰が嘗めるんだよ！汚い！」

「これだから変人は……早いとこ作業全部終わらそうぜ。」

ツバキは外したローターを適当に投げると、アナルに刺さっているデイルドを抜こうとすると、その刺激だけで陽乃は感じてしまい、体が跳び跳ねた。

「こんな刺激で感じるのかよ。」

「俺はそんな変態に負けたのか……。」

ツバキはシヨックを受けながらもデイルドを抜き終わり、放り投げた。

全ての機械が外れるのを確認するとスマレも拘束をといた。

すると松原が近付いて来て笑顔を浮かべながら声をかけた。

「陽乃さん、賢者タイム中失礼しますが機械を全て外し終わったので着替えてください。」

「楽しいゲームの再開ですよ。」

## 17. 三番勝負

陽乃は乳首やアナルなどに付けられていた機械を外され次のゲームのために着替えを行っていた。

しかし絶頂したため濡れている股や体中の汗を拭くバスタオルで感じてしまう位体が発情していた。

(クソ、体の火照りが全く取れない、それどころかどんどん悪化していつてる。)

どうにか拭き終わると、用意されていた服に着替え松原達がいる部屋に戻った。

(何よこれ、スク水は同じだけどサイズが小さくて生地が薄いじゃない。)

「戻ってきましたか、では三本勝負を始めますか。」

その前に一応服の説明をお願いします。」

「はい！」

今回は前回のスク水と違って、ハイレグになっています。

さらにサイズを小さくしているので、陽乃さんの大きな胸が全て隠れずに上乳が丸見えです。

そしてこちらは一緒ですが真っ白いニーソを履いています。」



「ハイレグで下半身を見せて、上半身は大きな胸が良く見えますね。

そして生地が薄いのでうつつすら乳首や陰部の筋も見える気がしますね。

まあ感想を言い始めてはキリがないので、勝負を始めましょう。

最初は何を選択しますか？」

「そうね、カラオケにするわ。」

陽乃がカラオケを選択すると、水野はマイクとカラオケ用のタブレットを渡した。

陽乃は慣れた手つきで曲を選び入力していった。

「そんなすぐに決めて良いんですか？」

「一発勝負ですよ？」

「私なら1回聞いた曲なら初めて歌っても80点以上は取れるわ。だから正直何でも良  
いけど念のため十八番で勝負するけど。」

イントロが流れ始め陽乃が歌い始めた。

「陽の満ちるこの部屋〜♪」

そつとトキを待つよ〜♪」

陽乃の歌声にその場にいる全員が釘つけとなった。

「陽ちゃん上手！上手!!」

「プロになれるよ！」

「しかし本当に凄いな、プロって言われても信じるぜ。」

そして曲はサビに入ると陽乃もギアを上げた。

「アザレアを咲かせて、暖かい庭まで。」

連れ出して、連れ出して。」

「これは簡単に80以上はいきますね、ではお嬢様、次のゲームの準備を致します。」

80以上を確信した水野は松原に告げると次のゲームの準備に取りかかった。

そして陽乃が歌いきると採点が始まった。

「何度でも 何度でも」

陽の満ちるこの部屋の中で……。」

「陽乃さん素晴らしいですね。採点の必要があるのか疑問ですが一応見ときましょう。」

「はい結果出たよー!」

点数は98・759!!

尋常じゃなく上手いじゃん!」

「お疲れ様です、これで一種目クリアですね。」

次は何を選択しますか?」

「次はリズムゲームにするわ。」

「わかりました、では第二ゲーム始めましょう。」

では着いて来てください。」

松原は陽乃をゲーム台まで案内した。

案内されたゲーム台の床は5×5の四角形のパネルがあり、正面にはテレビが設置されていた。

「では、簡単ですがルールの説明をします。

床のパネルがリズムに合わせて光るのでタイミング良く踏んでください。

またテレビの画面には次に光るパネルや指示が出ますので良く見てください。」

松原の簡単な説明が終わると第2ゲームが始まった。

ゲーム台からリズムミカルな音が流れ始めた。

同時に一部の床が光始めたため、陽乃はタイミング良く光る床を踏みゲームがスタートした。

「おーなかなか順調に点数稼いでいるな」

「陽ちゃんが動く度に大きいお尻や胸が揺れるね」

「いや〜眼福、眼福。」

外野のガヤを聞きながらもゲームに集中し1つのミスも出さずに終了した。

しばらくすると機械の点数が表示され、陽乃は驚いた。

「20点!？」

何で全て完璧なタイミングで踏んだわよ！」

「陽乃様、こちらの説明不足で申し訳ないのですが、このゲームは5ステージあり全てのステージをクリアしないと100点にはなりません。」

なので後4ステージ頑張ってください。」

陽乃は水野の説明を聞くと仕方なくゲーム台に戻り、スタートボタンを押した。

2ステージ目は前のステージよりも前後左右に大きく動くようにパネルが光った。

(結構疲れるわね。

でもこの調子でいけばレベル4の段階で80点越えられる、)

最悪無理だった場合でもレベル5で数点取ればクリアになるはず、)

陽乃はこの先の事も考えながらもいとも簡単にパーフェクトでクリアした。

「素晴らしいですわ。」

この調子で後3ステージもクリアしてください。」

「余計なお世話よ、言われなくてたってクリアするわ。」

そして3ステージは踏むパネルの距離は近いが踏む数が多いアップテンポなリズムが流れた。

(なかなか数が多いわね。)

どうにかリズムに乗ろうとするが、ミスをしてしまった。

それでもその1回のミスでゲームが終わったが、陽乃は肩で息をしており疲れ始めていた。

それと同時にお尻に違和感を覚え始めた。

(生地が食い込んでお尻が痒い……)

陽乃は松原達にバレないように食い込みを直そうとしようとするが、回りのカメラは陽乃を余すことがないように設置されているため直すことができなかった。

その間にも点数が集計され表示された。

「レベル3でも19点ですか、このペースでいけば80点は余裕ですね。

このペースでいければですが」

松原が不気味な笑顔で陽乃には聞こえないような声で呟いた。

案の定陽乃は聞こえずにレベル4に挑戦しようとして深呼吸を行い息を整えていた。

そしてレベル4が始まった。

レベル4は3と同じアツプテンポなりズムだが、光る床が離れているため反復横飛びの用に何度もジャンプを繰り返さなければならなかった。

(はあはあ、光るペースが早くて距離が遠い、しかもニーソが滑る、地味に厄介だわ。

それでも私は負けない！)

結果は16点であり他所のミスは出したが、初心者とは言えない点数を出した。

しかし陽乃は全身に違和感を感じていた。

（一体どうゆうこと？）

スク水がお尻に食い込んで痒いと思ってたけど違う。

全身が痒い／＼

つまり・・・

「あなた達何か服に仕込んでたわね！」

「やっと効き始めましたか、そのスク水ですが水シユウ酸カルシウムの粉を刷り込んでいます。」

「シユウ酸カルシウム？」

「おや知りませんか？」

大学生なのに高校生の私たちより無知何ですな。

仕方ないので説明してあげましょう、シユウ酸カルシウムとはとろろ芋などの皮に含まれる成分で水分と触れるとかゆみを覚えます。

これで一つ賢くなりましたね。」

「全く使わない知識ありがとうね。」

なるほど今度は痒み責めってわけ？

その程度で集中力がなくなつてミスすると思うの？」

「さあどうでしょう？」

集中力を妨害しているかどうかは本人じゃないから何も言えませんが、先ほどからお尻を気にしてませんか？」

陽乃は凶星を突かれたが平然な顔をして最後のステージのレベル5のスタートボタンを押した。

レベル5はレベル4よりも早いリズムで光るパネルも離れており、陽乃も体全体をいい食い下がりが疲れているためか序盤からミスが少しずつ出始めていた。

ゲームが終わる頃には汗が顔から滴っていた。

(汗とシウ酸カルシウムが触れて体中が痒い・・)

なかなかキツイわね)

「お見事です、ではさっそく点数を見てみましょうか。」

ディスプレイに採点された結果が表示された。

表示された点数は100点で合計で85点となり第2ゲームもクリアした。

「まさかこのゲームもクリアするとは驚きです。」

ただ体の方は限界が近そうですね、そんなに汗をかいたら全身痒くて堪らないじゃないですか？」

「・・・大丈夫に決まってるじゃない、時間稼ぎは良いから最後のゲーム始めて。」

「ずいぶんと急かしますね、まあ体中が痒くて堪らないでしょね。」

仕方なく陽乃さんに乗ってあげましょう。」

第3ゲームのツイスターゲームのために陽乃は広げられたシートの上にとった。

「それでは私たちが指示する色に指定された部位を15回触ればクリアです。」

ただしシートに触れて良いのは腕と足だけです、体がシートに触れれば失敗です。

「このルールでよろいいですね？」

「ええ、大丈夫よ」

「それでは始めましょう。」

まずは左手・左足を緑、右手・右足を青で始めます。」

金茶紫茶銀

赤緑黒青白

紫緑紫青紫

赤緑黒青白

銀茶紫茶金

陽乃はうつ伏せの状態になり

左手を(2, 2)の緑

左手を(2, 4)の緑



右手を（4. 2）の青

右足を（4. 4）の青に置きゲームが始まった。

「まるでお尻を強調するようなポーズですね。

ずっと見ていたいですわ。」

「そんなご託は良いから始めて。」

「では栄えある一回目は右手を白に」

陽乃は指示通りに左手を白（5. 2）に簡単に持つていった。

「2回目は右手を赤に」

右手を赤（1. 2）に置いたため腕がククロスする体制になったがこちらも難なくク

リアした

「3回目は右足を茶色に」

陽乃は腕を交差している状態のため（2. 5）に足を置き仰向けになるか移動距離が

少ない（4. 5）で迷ったが、まだまだゲームは続いたため少しでも楽な姿勢の（2. 5）

を選んだ。

「やはり一人でツインスターをやるのは簡単ですよ、少し難易度を上げましょうか。」

松原は水の入ったペットボトルを持ちツインスターのシートに水を流し始めた。

「何のつもり？」

「余りにも簡単そうなので少し難易度アップと失敗したときの罰ゲームですよ。」

もし倒れたらスク水に水がたくさん着くようにです。」

「罰ゲームは理解できたわ、ただ難易度アップの意味がわからないんだけど」

「それはお楽しみです。」

では文字通り勝負に水を指しましたが、再開しましょうか。」

その後も陽乃は順調に進めていき6回目を迎えようとしていた。

現状、右手は赤(1. 2)・左手は青(4. 2)・右足を黒(3. 4)・左手足を 青(4.

4)に置き6回目の指示である左足

を銀(1. 5)に移動させ、足を置いたときに足が滑りそうになり慌てて体制を整え

た。

(今の何?!足が滑った?)

まさかアイツ(松原)が言ってたハンデってこれなの)

松原はニーソにはローションの粉を入れており、水を含むことによつて滑りを発生さ

せた。

「一瞬怪しかったですがクリアですね。」

ではまた水を追加しましょうか。」

松原は水を追加でシートにかけると7回目の指示を出した。

「では7回目は右足を金にお願いします。」

陽乃は右足を金に移動させるが、足を限界まで開く姿勢になつてしまい股を大きく開けた状態になつた。

「何回見ても、素晴らしいですわね。」

ただそんなに股を開いたら水着が食い込んで、とても痒いんじゃないですか？」  
「うるさい。」

早く次の指示を出しなさい。」

「では8回目は左手を黒にお願ひします。」

陽乃は左手を黒(3・2)に移動させたが、足が滑るため腰を落としてより股を強調する姿勢になつてしまった。

そこに追加の水を撒くためにペットボトルを持った松原が近づいてきた。

「何かよう？」

「何回も言うけど早く指示を出しなさい。」

「水を撒こうと思いましたが、今回は志向を変えてみようかと。」

そう言うのと松原はペットボトルの先を陽乃の膝に狙いを定めて水を滴始めた。

水は太ももを伝つて股間近くに流れてきたため、陽乃は無理に腰を上げた。

「おお凄いですね。」

その姿勢で腰を上げるとは。」

「もういいでしょ、早く再開しなさい。」

松原は水を全て巻き終えると指示を出した。

そして9回目・10回目の指示が終わり残り5回となったが、陽乃は限界に来ていた。体中が痒く、また足が滑らないように普段使わない筋肉を酷使したため足がプルプルしていた。

そしてついに足の力が弱まり、お尻からシートに着いてしまった。

その結果陽乃のスク水はシートに撒かれた水を大量に吸い込み、急激な痒みに襲われた。

「残念です、失敗ですね。」

「はあはあ／＼体が！／＼」

陽乃とうとう我慢出来ずには体を掻くがスク水の上からでは満足行くように掻けなかった。

それを見ていた松原達は陽乃の近づいた。

「では陽乃さん罰ゲームの罰金を払ってください。」

松原は請求書を陽乃に見せたが請求額が高額過ぎた。

社長令嬢と言えど陽乃は学生の身で払うことは出来る金額ではなかった。

「そんな大金払えるわけじゃないじゃない！」

それに私が壊した物や汚した物でそんな金額にならないはずよ。」

「確かに、定価はそんなにいきませんが私は陽乃さんが壊した物に愛着を持ってました、その分の金額も足りています。」

もし払えないなら、この家で働いてもらうしかないですね。」

「そんな無茶苦茶な話が通ると思ってるの？」

私は絶対に払わないし、働く気もないわ。」

「そうですか、では払うと言うまで待つだけです。」

松原達は陽乃を大の字で拘束すると、霧吹きを手を持った。

「ゲームに失敗したのに罰ゲームを受けない陽乃さん、一応早めに罰金を払うと宣言するのをオススメしますがどうでしょう？」

「絶対に言わないわ、こんなの詐欺よ。」

罰ゲームで相手が払えない金額を見せて奴隷にでもしようとしてるの簡単にわかるわ。」

「そうですか、では始めましょうか。」

松原は霧吹きを陽乃の胸に向けて発射した。

「ハアアツ……!! ンアアア……!!!」

「クツクツ、そんな声を出して喜ばなくても」

「はあはあ／＼」

「これで終わりではありませんよ。」

松原は大きい目な刷毛を持ち、粘りけのある液体に浸けると陽乃の腕や脇など、露出してゐる箇所塗りに塗り始めた。

「ああん!?!?!」

「どうですか？」

「こちらは媚薬になっています、あと先程の霧吹きの中身も薄めています。媚薬なので、もう少し経てば効果が出てくるはずですよ。」

「くそ／＼」

刷毛で塗り終わると松原達は離れ各々スマホやお喋りを始め時間を潰し始めた。

その間陽乃は媚薬の効果と痒みの影響もありスク水の上からでもわかる程度に乳首がたつていた。

さらに媚薬の影響で呼吸も荒くなり、体中が火照り汗を書き始め全身中痒みが周ってしまった。

「うとうう、はあはあ、くううくう。」

(一向に治まらない・・・)

それどころかどんどん悪化していく)

それから、さらに時間が経つと松原は陽乃の前に立った。

「おや、もうお寝んねですか？」

「どうです、もう降参しますか？」

「い・・・やよ」

「何て言いましたか？」

声小さ過ぎてわかりませんわ。」

「嫌って・・・言った・・・のよ／＼」

「全く強情ですね。」

でも、それでこそ陽乃さんです。

その心意気にこちらにも誠意をみせましょうか。

スマレさん胸を搔いてあげてください。」

スマレは陽乃の背後から胸を揉み始めた。

媚薬と痒みで敏感になっていたため、今までよりも感じてしまい、股間のスク水に染みを作ってしまった。

それにより、股間の痒みが強くなったが足を開いてい拘束されているため何も出来ず

に我慢するしかなかった。

「んああああああ!!!」

「陽ちやん凄い感じてるね！」

スク水の上からでも乳首の場所が解つちやうよ！」

「もう止めて……止めてえ……!!」

「止めて欲しいのね、うんわかった！」

スミレは本当に胸を揉むのを止めた。

やっと快楽から脱出したと思つた瞬間、今度は胸に痒みが蘇つて陽乃を蝕んだ。

「くうう、ああああ。痒い！痒い!!」

「搔いてあげたのに、止めろと言ひ。

止めたら痒い、痒いと言うとは・・

全く我が儘ですね。」

今度は松原が陽乃の股間を搔こうした時、水野が止めた。

「お嬢様、申し訳ありません。

大広間でお嬢様に会いたいと仰っている方がお待ちです。」

「今良いところですのでに一体誰ですの!?!」

「お嬢様の御姉様です。」



「お姉ちゃんですか？」

何か嫌な予感はしますが行きますわ。

ではツバキさん、引き続きお願いいたします。」

「それが私達全員をお呼びのようです。」

「全員ですか…」

確実に何か考えていますね、しかし行くしかないですね。

では陽乃さん出来るだけ早く戻ってきませんが、その間は頑張って耐えてくださいね。」  
そう残すと松原達は部屋を出ていった。

## 18. お風呂

松原達が部屋を出ていった後も陽乃は痒みと媚薬に侵され続けていたが、手足が拘束されている状態なため何も出来ずにただ耐えることしか出来なかった。

すると突然ドアが開き、一人の女性が部屋に入り陽乃の前に立った。

「始めてまして」

知らないと思うから自己紹介するわね、松原百合の姉の松原百花です。百の花って書いて「ひやつか」って呼ぶの珍しいでしょ？」

「それでいきなり私に何かようなの？」

ニコニコと笑顔で話しかける百花とそれを睨みつける陽乃、全く対象的な状況での会話が始まった。

「おお」

その状態でもまだまだ反抗的なの凄いね」

お姉ちゃん尊敬しちゃうよ。」

「……。」

陽乃は突然表れた百花の目的がわからなかった。

先程の松原達の会話では、目の前の人が松原達を呼び出したのに本人は何故か陽乃の目の前に居るのだ。

「ふうん、何で私がここに居るかって考えてるわね。

良いわ教えてあげる。

それはね、百合ちゃんの奴隷になって欲しいの。」

「ふざけてるの？」

そんなことするわけないじゃない。

一体に何を考えているの？」

「ふざけてなんていないよ。」

本当は介入するつもりはなくて見守るつもりだったけど、陽乃さんが簡単に落ちないからお姉ちゃんが手助けすることにしたの。

あの子は今後もずっと陽乃さんを落とそうするけど、完璧に落とすことはできない。

今も目的が曖昧だし過程もボロボロ。

ゲームで負かしたいのか、無理やり言うことを聞かせたいのか、洗脳みたいに素直に言うことを聞かせたいのか全くわからない。

だから私がゴールとそのゴールまでの道を作るの。」

「道もゴールを作って、その上をただ歩かさせて何が意味があるの？」

「そう? 道を引いて上げるのは良いと思うんだけどな。」

陽乃さんならシスコン同士で理解してくれると思つたのに残念…。」

「勝手に人の考えを決めつけないで、私には私の考えがあるのよ。」

「だからあなたのお願ひも聞けないわ。」

「そう。」

百花は陽乃の返答を聞くとニコニコしていた顔を一瞬で曇らせ、短い返答を返した。

「なら時間がないから、前振いなしで話すわ。」

百花はパソコンを起動させ、陽乃にディスプレイに写る動画を見せた。

そこには陽乃が最も大切な人である妹の雪ノ下雪乃とその友人であり部活仲間である由比ヶ浜結衣、二人の後輩である一色いろはが写っていた。

しかし3人の様子は可笑しく、全員が浮かない顔をしていた。

そして雪ノ下がブラウスを脱ぎ始めるとそれに続くように2人も脱ぎ始め、雪ノ下は水色・由比ヶ浜は白・一色は黄色の下着姿となった。

「ふざけるな!!」

雪乃ちゃん達に何をした!!」

「少し遊んだだけよ?」

「まあこの先はわからないけどね。」

「お前は絶対に許さない!!」

陽乃は般若のように怒り、拘束具の音を鳴らし今にも百花に襲いかかろうとしていた。

「おぉー、流石に今の迫力は凄いわ、でも自分の状況を理解して欲しいわね。」

百花は陽乃の右の乳首にデコピンを行った。

「うぐうう!!」

「おや可笑しいわね、一気に迫力が無くなったわ。

それ〜それ〜」

「ああああうん……………ぐううううツ!!」

百花は今度は左の乳首にデコピン行くと、さらにもう一度右の乳首にと交互にデコピンを行った。

「クソ／＼……………ハアハア／＼……………」

「もう終わりですか?」

では最後に1回だけ」

百花は膝を折り陽乃の前に屈み股間に向けて手を伸ばした。

「そこはダメ!」

やめえええええ!!」

クリトリスに向けて放たれた一撃は陽乃を簡単に絶頂させ、絶頂した陽乃は体の力が抜け拘束具に体を預ける状態になった。

「やつと静かになったね。」

「それでどうする？」

「あなたの妹の弱みを世間に知られたくなかったら私の頼みごとを聞きなさい。」

「…わかったわ。」

「そのかわりこれ以上雪乃ちゃん達に関わらないで。」

「それは無理ね、あの子達面白いんだもん。」

「でもそれだと陽乃さんにメリットが無いから、あの子達のデータは公に出さないわ。」

「後から約束を反故されない根拠がないじゃない。」

「今すぐにも関わらないで、動画や写真のデータを消して。」

「うくん、交渉決裂か、じゃネットにあげるね。」

「美人jkの脱衣なんてすぐに拡散されるわね。」

「百花がパソコンを弄っていると陽乃が待ったをかけた。」

「待って、わかったわ奴隷でも何でもやるから雪乃ちゃんのデータをあげないで。」

「うん、その答えを聞きたかったの。」

「それじゃ百合ちゃんが待ってるから戻るね。」

あと私に会ったことや、言われたことは内緒ね、もし破ったら……ね？」  
そう言い残すと百花は部屋を出ていき、自分が呼び寄せた松原達が居る部屋に入  
た。

「ごめん、ちよつとお花を摘みに行つてたの。」

「人を呼び寄せといて待たせるとは……」

それで何か用ですか？」

「うん。新しい女の子を捕まえたつて聞いて、どのくらい調教進んだのかなーつて。」

「それはお姉ちゃんに關係ありますか？」

「うわー酷いなー」

關係ないけど姉妹何だしもつと楽しく会話しようよ！」

「最近はずつと外で泊まつて、晩御飯にも出ないのに勝手ですね。」

「イヤー私も新しい女の子の入手に入つたから忙しくて…。」

もしかして寂しかった？」

「もういいです。」

それこそ私達は今調教中なのでもう失礼します。」

松原は会話を無理やり切り上げると、陽乃が居る部屋に向かった。

「全く…」

水野ちゃん、疲れると思うけど今後も百合ちゃんをよろしくね！」

「承知しました。」

「うんうん、あと陽乃さんには言うことを聞くように言ったし、妹の雪乃ちゃんも居る。

後は私が指示を出した通りに百合ちゃんを誘導してくれば終わりだね。」

百花の言葉を聞き終えると水野も松原達の後を追うように部屋を出ていった。

残ったのは百花だけになった。

「う〜ん。疲れた〜。」

さっ私もあるの子達のところに戻りますか。」

そして残った百花も部屋を出てどこかに向かった。

松原達は陽乃が拘束されている部屋に戻り、再度陽乃を囲むように立っていた。

「お待たせしました、気分はどうですか？」

「……。」

「無視ですか、全く強情ですね。」

ただ下の口は素直ですね、先程私達が部屋を出る前よりも濡れているじゃないですか

？

どうです、この家で働くのであれば解放してあげますわ。」

「わかったわ、正直もう限界なの…。」



だからお願い、何でもするから助けて。」

陽乃は百花に言われた通りに松原に従順な姿勢をしめし、その言葉を聞いた松原は笑顔になった。

「そうですか、やっと抗う事の無意味に気がつきましたか！

では約束通り痒みから救いましょう、水野お風呂の用意を。

カエデさんはディスプレイを陽乃さんが見れる位地に設置してください。

ツバキさん、スミレさんは今度の陽乃さんの仕事を決めるのを手伝ってください。」

水野は色々な指示を出し、次の準備を行った。

そして陽乃はディスプレイに写った動画を観たが、内容は最悪だった。

風俗嬢が体を使ってお客さんの体を洗う方法の説明動画であり、今からお風呂に入るということは自分にさせる気満々と一瞬で理解した。

「気づいていると思いますが、あなたは私のメイドでもありませんので、しつかり覚えてくださいね。」

陽乃は言われた通りに水野が風呂の準備が終わるまで動画を見続けた。

そしてお風呂に入るため脱衣所に到着すると松原は陽乃に服を脱ぐように命令した。

「では風呂に入るため服を脱いでください。」

後服を脱ぐときはゆっくりとお願ひします。」

陽乃はカメラを向けられた状態だが、逆らうことが出来ないためゆっくりと脱ぎ始めた。

まずは両足に履いてあるニーソを脱ぐと次は肩紐をずらしてスク水を上からゆつくりと下ろしていく。

スク水を胸の下まで下ろすと、窮屈な状態から解放された胸が大きく揺れていた。

そしてスク水が膝したまで下ろすと剃毛によつて遮る物が無くなった陰部が蜜を垂らしていた。

全てを脱ぎ終えると陽乃は両手で隠そうとした。

「そんな素晴らしいスタイルなのに隠す何て勿体ない。

まあ良いです、それでは風呂に入りましょうか。」

全員服を脱ぎ風呂場に入ると、再度陽乃をX字で拘束した。

「さあ楽しい洗いっこを始めましょう。」

その言葉を皮切りに松原やスミレ、カエデ、ツバキの4人は陽乃の体を洗い始めた。

「ダメエ、ううううん、くういう！」

「あああああん!!」

松原は大きな胸を正面から下から持ち上げるように揉み、さらに入念に乳首を洗った。

スマレは陽乃のお尻に狙いを定めると、左右に引つ張り肛門の中にまで指を入れ洗い始めた。

ツバキはスマレとは反対に陰部に狙いを定め、クリトリスを露出させ丁寧にかつしつこく洗った。

カエデは背中や腰などをくすぐるように洗っていき3人とは異なる攻めを行った。

「面白いな、いくら陰部を流してもどんどん奥から密が出てきやがる。」

「あつああああん！」

「それなら肛門も凄いわよ」

指を最初入れる時はキツイけど、何回も抜き差しすると指を受け入れてくれて2本、3本入っていくの。」

「あふうん……!!??」

「それでもやっぱり陽乃さんと言えば胸ですわ。」

まるでマシユマロのようにフカフカな胸、そしてその中にあるピンクの乳首と完璧なスタイルです。」

「んっんん!!、はあ…、はあ……。」

全員が満足するまで陽乃は弄られ続けた、ようやく4人が離れ泡が全て流れきるようにお湯をかけられた。

このときもシャワーの先をわざと乳首やクリトリスなどに刺激を与えながら流していった。

「それでは最後はやはりここですね。」

松原はシャワーを持ち陰部に近付けた、それと同時にスマレが陰部を左右に引っぱり、入り口を開けた。

そしてシャワーの勢いを強く陰部に当てた。

「くっ、ふうっ、んんっ…ああああ!!!」

「これで終了です、全身キレイになりましたね。」

シャワーがやつと終わると陽乃は拘束を外されたが、しかし陽乃への屈辱はまだ終わらなかった。

「それでは陽乃さん今度は私を洗ってください。」

先程の動画で観た方法でお願いしますね、もし上手ければ借金を減らしてあげますわ。」

陽乃は 椅子に座っている松原の背後に周った。

そして桶にお湯とボディーソープを入れ泡立て、その泡を自分の胸に着けた。

そしてその胸を松原の背中に当て上下に動かし、背中を洗い始めた。

「おおお！

凄く柔らかくて時々当たる立って硬くなっている乳首もいいアクセントになって気持ち良いです。」

「……………」

陽乃の内心は凄く荒れているが表面に出さず、一心不乱に動かし続けた。

「背中では十分です今度は腕をお願いします。」

今度は立ち上がり松原の隣に行くと腕を持ち上げ、自らの股の下を通し太ももで優しく挟むと腰を前後に動かし続けた。

「うーん、こちらもスベスベで気持ちいいですね。」

その後も陽乃は全身を使い体を洗い続けた。

足の裏に胸を当てパイズリのように挟み込んだり、

太ももの上に腰を下ろし腕と同様に陰部を擦り付け洗った。

「はい、ありがとうございます。」

なかなか気持ち良かったので借金の方は減額しておきましょう。

それではお風呂に浸かりますか。」

陽乃も湯船に浸かったが問題は体勢だった、陽乃はスマレが股を開けた場所に背中向けて体を入れ腕はスマレのお腹の横に置いてある。

そして案の定スマレは陽乃の胸を揉み始めた。

「すごい、陽ちゃんの胸本当に浮くんだね〜。」

「くっ!!」

陽乃はそのまま抵抗しないままずっとお風呂に浸かり続けた。

「それでは上がりますか。」

松原の一言で全員が湯船を上がり、軽いシャワーを浴びて脱衣場に向かった。

ここでは各自自分の体を拭き、着替え始めた。

しかし陽乃が持っている服は例のスク水とニーソだけであり着替えることは出来なかった。

「陽乃様、こちらを着てください。」

水野に声をかけられ、バスローブを受け取った。

これも何か仕込んでいる可能性はあるが、裸よりはマシだと思い陽乃はバスローブを着ることにした。

「そう言えば陽乃さん、あなたはこの屋敷のメイドなのでわかるように目印を着けないといけません。」

なのでこれを着てください。」

松原からは黒首輪を渡され、首に着けた。

そこにチェーンが付けられまるで鎖で引っ張られる家畜のようになった。

「今度は何をしましょうか、まだまだ時間はいっぱいありますからね  
陽乃さん楽しんでみてくださいくださいね。」

## 19. 電マ

松原は陽乃のに何をしようか考えていると水野が声をかけた。

「お嬢様それではこのような事は如何でしょうか？」

水野が耳打ちで松原に意見を伝え、終わる頃には松原は満面の笑みを浮かべていた。

「それは良いですわね、色々びったりですわ。」

では水野の案で決定しましょ。」

「ちよつと待ったー!!!」

松原は水野が提案した案を採用しようとした時、スマレが待ったをかけた。

スマレも陽乃を調教する方法を提案した、松原はどちらを採用するか考えたが水野が

両方すれば良いと陽乃にとっては地獄の選択をした。

そして話し合っていると全員が服を着替え終わったので、部屋を移動しようとした。

「陽乃さん、あなたは四つん這いで移動しなさい。」

「この家はメイドをそんな扱いするんだ。」

でも水野ちゃんは普通に歩いていると思うけどな。」

「……、あまり反抗しないほうが良いと思いますが。」



「言い返せないみたいね。」

「しょうがないから四つん這いになってあげる。」

陽乃は四つん這いになり、首輪に繋がれた鎖は松原が持ちながら陽乃を先頭に歩き出した。

「先程は強気な言葉を話していましたが、今の姿はとても不様ですね。」

「その角を右に曲がってください。」

大人しく右に曲がり目的地の部屋に着き、水野がドアを開け全員が入っていた。

部屋の中心に大きな機械のみがあり、それ以外は特に変わった所はなかった。

「では陽乃さん中央に機械がありますよね。」

「その中央にバスローブを脱いでから立つてください。」

陽乃は命令通りにバスローブを脱ぎ、首輪以外何も着けていない状態で両腕を使い胸と陰部を隠しながら立った。

「陽乃さん無駄な抵抗は止めてください。」

「どうせ私が腕を頭の後ろで組めと命じたらそれに従うしかないのですよ？」

「無駄な労力をかけさせないでください。」

陽乃は胸や陰部を隠していた腕を下ろし直立の姿勢をとった。

すると機械が動きだし下から輪っかが上がってきた、その輪っかは中に居る陽乃に向

かってコピー機のような光をだした。

輪っかが陽乃より上に行くのと今度は下がりながら光を発射し、元の位地に戻った。すると陽乃の前にあったディスプレイに文字と数字が表示された。

「陽乃さん、ディスプレイに表示されている内容を教えてください。」

「：身長165cm

：体重54キロ。」

「陽ちゃん凄い。」

そんなに胸大きいのに体重は標準なんだね！」

「そうですね、相当スタイルの維持するのに努力しているんでしょう。」

陽乃さん他の情報もあるはずです、早く言ってください。」

陽乃は次に出てきた情報を見て顔をしかめた。

予想はしていたが実際に声に出すのには躊躇いがあるが、恥ずかしがっているとと思われるのを避けるために声に出した。

「ヒップが88

ウエスト62

アンダーバストが70

トップバストが94

バストサイズがFカップ」

「スタイルが良いのは知っていたが改めて数字で聞くと凄いな、同じ女性として羨ましいぜ。」

「ツバキさんは胸が小さい」

ツバキはカエデが言い終わる前に頭を叩いた。

「でもツバちゃんは身長高いからモデル体型だから良いじゃん。」

「まあ女性も魅力はスタイルだけじゃないので、気にしなくても良いと思います。」

陽乃さんお疲れ様です、良い情報が手に入りました、それではこちらに来て下さい、着替えてもらい次のステップに移ります。」

陽乃は松原の方に歩いていき、松原の足の元にある服を手を取った。

「今度は制服ね…。」

「いい加減コスプレに飽きないの？」

「全然飽きませんわ。」

「やっぱり着る人が素晴らしいので、色々着せてみたくなるのです。」

「ただし今回は少し特別ですけどね。」

陽乃は服や下着を見ると一見何も変わらないと思ったが、ブラジャーだけがどこにもないことに気がついた。

「今回はノーブラでのコスプレってわけね。」

「これに何の意味があるのかしら。」

「すぐ文句を言うのは如何と思いますが、確かにそれだけだと制服の上から乳首がわかるので、今回はこれを着けて下さい。」

陽乃は松原からシリコン製で透明の乳房カップを渡された。

その乳房カップの中央にはプラスチック製のイボイボがあり、着けると乳首に当たるようになっていたが陽乃は命令通りに着けた。

すると胸を根本から覆い被し完璧にフィットした。

「先程の機械で胸の大きさと形をしつかり取りましたので、フィットしますでしょ？」

「ただこれだけででは終わりません。」

松原は乳房カップの先端にホースを着けると中にある空気を抜き始めた、どんどん中は真空状態になり胸が引っ張られた。

「あ、ん……。」

最後に背中では乳房カップが落ちないように紐で結んでカップの装着は終わった。

その後はパンツを履き、制服に着替えた。

「それでは陽乃さん再度移動しますので四つん這いになってください。」

陽乃は命令通りに四つん這いになるが、スカートが短いため水色のパンツが丸見えと

なっていた。

どうにか隠そうとスカートを引っ張るが生地が全く伸びないため、パンツが見えた状態で動き始めた。

「良い光景ですね、可愛らしい水色のパンツが揺れていますわ。」

「……。」

(いつか倍返ししてやるわ、覚悟してなさい。)

陽乃はいつか復讐することを考えながら動き続け、次の部屋に到着した。

今度の部屋も前の部屋と同じで中央に機械があるが、前の部屋とは違い強大なカメラが中央の機械を撮影するように設置場所されていた。

「それではこちらに来てください。」

陽乃は先程と同じように機械の中に立つと機械が動き始め陽乃を拘束しようとした、陽乃もここで抵抗しても無意味だと知っているため抵抗せずに大人しく拘束された。

機械は手足を包み込み、足を少し開いた状態でT字拘束した。

「これで満足？」

「本当にそう思いますか？」

松原は笑顔を浮かべながら機械を動かした。

陽乃の足元から電マが出現しクリトリスに当たるように上昇を行い振動を始めた。

「んうん、くうん」

電マは陽乃の弱点に上手く当たるように固定され刺激を加え続けた。

その刺激は少しずつだが絶頂に導き下着を濡らした。

「気持ち良さそうですね。」

いつでも絶頂しても良いですわよ、その瞬間を逃さないようにカメラの準備もバツチリです。」

「うううつつん！」

誰が絶頂するって？こんな気持ち悪いだけ。」

「嘘は泥棒の始まりですよ。」

下着をこんなに濡らして置いて誰も騙されませんよ。」

松原は陽乃のスカートを持ち上げ下着の状態を確認し、スカートを持ち上げた状態で固定した。

「これでよし。」

さあ陽乃さん、どんどん濡れていつている下着が丸見えですよ。」

どうにか電マの刺激から逃れるように体を動かすが、拘束具が邪魔で逃げる事ができずに絶頂を迎えてしまった。

「~~~~っ！」

陽乃は絶頂と同時に潮を吹き、パンツに大きな染みを作った。

絶頂を確認すると電マが停止し、膝下まで下がっていった。

「簡単に絶頂しましたね。」

ただこれで終わりではありませんよ。」

スカートを一度下ろしパンツを隠すと、横にある紐をほどき染みの着いたパンツを脱がし、その脱がしたパンツは真空パックに入れ新しい赤い紐のパンツを陽乃に無理やり装着した。

新しいパンツを履かせると再度電マが上昇とスカートを捲くる。

「ん、くっ、ううっ!」

一度絶頂したため敏感になっていくクリトリスに刺激がくる。

先程のよりも強い刺激は簡単に2回目の絶頂に導き、またも下着を濡らすことになった。

陰部から漏れた蜜で出来た大きな染み付きのパンツは先程と同じように脱がされ、今度は白の紐。パンツを履かされた。

そして電マが動き始めた。

「んううっ!! んく、ふうううっ!!」

「苦しそうですよね?」

「そうだ、絶頂するときにイクと宣言してくれれば終わらせませんが如何でしょうか？」

「誰が…あなたの…言う通りに…するもんですか…。」

陽乃は連続絶頂の疲労が訪れていた、それでも松原に屈することはなかった。

「そうですね、まだまだお仕置きが足りないようですね。」

松原は陽乃からの返答を聞くと陽乃に近付き、パンツの中に手を入れ器用にクリトリスの皮を剥いた。

そして以前陽乃の乳首に取り付けたリングより小さいサイズを取り出し、露出しているクリトリスに着けた。

クリトリスの皮はリングが邪魔して戻れず、常にクリトリスが露出している状態なまま、パンツを元の状態に戻した。

しかし露出しているクリトリスはパンツ越しでも主張を行い、どこにあるのか一目瞭然だった。

「それでは陽乃さん頑張ってくださいね。」

電マの刺激はパンツ一枚しか隔てていないため先程とは比べられない刺激が陽乃に襲いかかった。

もはや快楽か痛みか判断つかない刺激を受け絶頂した。

最初よりも蜜は少ないがしつかりとパンツには染みができていた。



「ふっ、ふっ、ふっ……」

陽乃の休憩時間は染みが出来たパンツと新しいパンツを入れ替える僅かな時間しかなく、敏感になったクリトリスを静める時間はなかった。

それでもどうにか静めようとするが、電マが再度上昇しクリトリスに刺激を与え始めようとした。

「ほら、陽乃さん。」

電マがクリトリスにどんどん近づいて、またさっきの強烈な快感が決ますよ。」

松原の言葉通りに電マは又しても強烈な刺激を与え始めた。

この地獄から抜け出すには松原の言う通りにするしか方法はないが、そうすれば心から屈することになるため雪ノ下陽乃のプライドが許さなかった。

しかし体は心と違いましたも絶頂し、これで4度目の絶頂を迎えた。

絶頂した陽乃は今回も濡れた下着を交換する時間を使いだけ心を落ち着かせようとしていたが突如胸のカップが動き始めた。

「んううっ!!? んく、ふうううっ!!」

「どうしました?」

もしかして下着を変えている時は休ませてもらえろと思ってきましたか?」

胸に取り付けられたカップは胸を揉まれている様に、乳首にはまるで舌で舐められて

いると錯覚するほど巧みに動き始めた。

そして胸の刺激を受けていると下着の交換が終わり、悪魔の電マが上昇を始めクリトリスまで到着した。

陽乃はいつでも刺激が来て良いように身構えたが刺激はアナルから襲ってきた。

アナルにデイルドが入れると振動を始めた。

「ひやあつ!!やああつ!!やっ!!」

「良い声で鳴きますね。」

久々に喘ぎ声を聞きましたが、やはり美人の喘ぎ声は良いですね。」

今まで喘ぎ声を出さないように口を閉じていたが、胸とアナルからの予想外の刺激にとうとう声が漏れだした。

そして刺激を受け続け絶頂に達しようとした時に、今まで沈黙していた電マも動き始めた。

「や、めええええツ!!ひやあつ!!つくううツ!!」

「ああつ!!やああつ!!いやあああつ!!」

陽乃はとうとう5回目の絶頂を迎えると同時にガクガクと体を震わせ、糸が切れた様に倒れこんだ。口からは涎とも分らない泡を吹き、目は完全に白目をむいている。

その状態でも陰部からは蜜をびゅびゅと途切れなく吹き出していた。

「強情ですわね、イクと宣言すれば最楽だったのに。

では陽乃さんが目覚め次第次のステップに進みましょう」

「はい、承知しました。」

「私も準備出来そうだから、百合ちゃんが終わった私の番だからね！」

## 20. ブルセラ

陽乃は目を覚ますと床に寝ていることに気がつき、体を起こそうとしたが上手くいかなかった。

良く見ると手に手錠をかけられており、また足には鎖が付けられており歩くギリギリの歩幅しか開かなかった。

服装は先程まで着ていた制服をそのまま着ており陽乃を苦しめた胸のカップも健在で陽乃を悩めますが、何より問題なのがパンツを履いていないことだ。

下半身が心許ないので部屋を見渡しパンツがあるのか探したが、そんな下着などが都合よく有るわけなく一向に見つからない。

部屋の中を搜索していると水野と松原が、いくつか大きな箱を持って現れた。

「やつと起きましたか。」

「どうですゆつくりできましたか？」

「……それで今度は何をさせる気？」

松原の質問を無視し、逆に松原に質問をした。

松原はその陽乃の態度に対して不満を持ち、陽乃に取り付けている機械の電源を入れ

た。

すると陽乃の胸に付いている機械を動き始め、陽乃は突然の快樂に背中を丸め床に座りこんだ。

「陽乃さんまだどんな状況かわかってないみたいですね。」

今度同じ態度を取ると先程の部屋で半日過ごしてもらいますよ？

「さあどうします？」

いくら陽乃でも先程の部屋で半日など体が持つはずがないため、プライドを押し殺す陽乃は謝罪を行った。

しかし、松原は陽乃の謝罪を聞いたが満足しなかった。

「陽乃さん謝罪の言葉は大切ですが、それと同時に姿勢も大事じゃないですか？」

陽乃は椅子に座った松原の近くまで行くと、再度プライドを殺し土下座を行いながら謝罪を行った。

「松原様に対して度重なる失礼、本当に申し訳ございませんでした。」

二度とこのようなことのないよう、肝に銘じます。」

「それで良いのです。」

貴方は私に逆らえる立場を再認識してください。」

そう言うと松原は土下座をしている陽乃の頭に足を乗せた。

陽乃は見えていないが自分が何をされたか理解でき、抵抗できない自分に苛立ちを覚えた。

そこに松原は追加で指示を出した。

「本当に反省しているのなら、今すぐ私の足を舐めてください。」

陽乃は頭を上げると松原の足に顔を近づけ足の甲を舐め始め、次に指を一本ずつ舐めていき最後に小指から順番に指をしゃぶる様に口に入れた。

「思ったよりもくすぐったいですが、いい気分ですね。」

ここで松原は陽乃に足を舐めながらお尻を上げるように指示を出すと、陽乃は命令通りお尻を天井に突き出した。

お尻を突き出す様なうつつ伏せの格好となりながらも足を舐め続ける陽乃を松原は手に持ったカメラで撮影し続けた。

「そういえば陽乃さんは現在パンツを履いていなかったですね。」

パンツはすぐに用意出来ませんが、似たような物があるので代用しましょう。」

すると水野が陽乃の後ろから近づき、アナルにディルドを差し込み貞操帯を履かせた。

これでディルドはアナルに埋まったまま固定されてしまった。

「うう………！ うう………！」

「誰が途中で足を舐めるのを止めて良いと言いましたか？」

「はああん……あああん……：ううううん！」

陽乃は快樂を与え続けられながらも足を一心不乱に舐め続けたが、やっと終わりを迎えた。

「陽乃さんお疲れ様です、もう舐めるのは結構です。」

それでは罰はこれで終わりにして本題に戻りましょうか。」

松原は陽乃をテーブル近くに立たせると小さい段ボールにペンと手紙を渡し、水野が持ってきた段ボールをテーブルの上に置いた。

陽乃は段ボールを開けるとそこには真空パックに入った下着があった。

その下着には陽乃も記憶があり、先ほど電マによってイカされ愛液によって染みを着けた物だった。

別の段ボールには目元や口元を隠しているが陽乃が絶頂した時の写真、メイド、バニーガールなどコスプレした写真など入っていた。

「では陽乃さん、その真空パックと写真を各々紙の通りに振り分けてください。」

そして手紙に、自分が絶頂した時の状況とその時の気持ちを読む人が満足するように書いて一緒に入れて下さいね。

全ての振り分けが終わると出荷しますので。」

「ちよつと待つて、出荷つて何!?

いったいこれは誰に送るの!?

陽乃は全く状況がわからなかったため、松原は陽乃のスマホを使い検索を始めた。

画面を開いたまま陽乃にスマホを渡すと画面内にはサイトが標準されていた。

そのサイトはブルセラショップのサイトで「ハル」というアカウントが登録されていた。

販売内容は愛液着き下着とパンチラ、ブラチラのコスプレ写真のセットが登録され、商品数が少ないためか全て完売だった。

ここにきて陽乃はあのパンツは全て商品であり、今から自分に準備させると理解した。

「では陽乃さん、準備をお願いしますね。

30分後に来ますので終わつてなければ罰を与えますので。」

陽乃が唾然としている中、松原と水野は部屋を出ていった。

残された陽乃は罰を受けたくないが、こんな物を赤の他人に渡したくもなく板挟みになつていた。

そこに百花が入ってきた。

「やつはろー!! 陽ちゃん元氣〜?」



「今度は姉の方なのね．．．」

陽乃は百花が来たことよって余計に憂鬱になった。

そんな陽乃を無視するように百花はハイテンションだった。

「おやおや、陽ちゃんはブルセラの準備中か。」

陽ちゃんのために言うけど、もし作らなくても他の人が作ってお客さんのところには絶対に発送されるよ。

そして陽ちゃんは無駄な罰を受けるだけ、あと陽ちゃんが罰を受ける度に雪ちゃんや結衣ちゃん・いろはちゃんも連帯責任で罰を受けるからね。」

「ちよつと、どう言うこと！」

何で私の罰を雪乃ちゃんも受けるの!？」

「だって、そうすることで陽ちゃんが言うこと聞くじゃん。」

今だって陽ちゃん焦ってるよね、だって陽ちゃんは雪ちゃん大好きだから。

それじゃ頑張ってるね、また後で来るから。」

陽乃は突然乱入した百花によつて簡単に追い詰められ、ブルセラの準備を急いで始めた。

30分と時間が決まっております、少しでも遅れ雪ノ下にも罰が下るのだけは避けたかったです。

そして無心で準備を行い手紙を書き終わると、松原が戻ってきた。

「準備は・・・終わってますね。」

しかし、ここまで簡単に命令通りに動くか気味が悪いですね。

もともと抵抗すると思ってたので、拍子抜けです。」

百花が来たことを知らない松原は勝ち誇ったように笑い声を上げ、水野は追加で持ってきた段ボールをテーブルに置いた。

そして水野が商品がミスなく入っているか確認し発送の準備を始めた。

すると言葉通り、百花が部屋に戻ってきた

「サクラちゃんお久しぶり〜。」

おや、この人が陽乃さんなの？

サクラちゃんの新しい人捕まえたって聞いたけど、凄く美人でスタイルも良いね！」

「姉さんには関係ないです！」

早く出て行ってください！」

「そんな事言わないでよ〜。」

どれだけ調教が進んでるかの抜き打ちチャックみたいなものだよ。

何かあればアドバイスできるしね！」

「残念ですがほとんど調教は終わっています。」

現に私の言うことを忠実に聞いています。」

松原は百花に対して大きな声で早く部屋を出ていくように言った。

百花もこれ以上は大切な妹を怒らしたくないため大人しく部屋を出た。

「お見苦しい所をお見せしました。」

それでは陽乃さん書いた手紙を呼んでください。

内容が良ければオマケを入れて発送します。」

「……私は電マを使いオナニーしました。」

一番弱い振動でマンコの周りに当て、口が開き始めると感度の高いクリトリスに一番強い振動を当てることで簡単に絶頂でき、愛液もたくさん出ます。

その愛液の染み込んだパンツで今度はお客様がオナニーしてください。」

「まあ、良いでしょう、それでは水野出荷をお願いしますね。」

「承知しました。」

では陽乃様最後にこちらを入れて下さい。」

水野から受け取った箱の中には真空パックに入った陽乃の陰毛があった。

松原の手によって剃られた時の写真も入っており、無意識に陽乃は松原を睨んでしまった。

松原は陽乃に睨まれるとすぐさま、機械のスイッチを押した。

すると胸に取り付けられたカップと、アナルに刺さっているデイルドが動きだした。

「無意識でしょうが、まだ反抗する態度を取るのには頂けませんね。」

「んんんっ。んんんっ!!」

ガシャガシャと手と足に着けられた鎖を鳴らしながら、陽乃は暴れた。

しかし体勢を変えても刺激は続いており、陽乃は本日何回目かわからない絶頂を迎えた。

「んんんんんんっ!!」

「姉さんに言われた通り、まだまだ調教しなくてはなりませんね。」

陽乃さん覚悟してくださいね、無意識でも反抗できないように完璧に落としていきますので。」

松原は陽乃に宣言するが、陽乃は絶頂してもまだ動き続ける機械によって与えられる快樂によって、それどころではなかった。

## 21. 晩御飯

「ウウウン！」

「これぐらいにしましうか。」

陽乃は体に取り付けられた機械によつて絶頂を迎えると、松原は機械を止めた。

機械が止まった瞬間、陽乃は連日の調教と絶頂により体に力が入らず床に座ってしまった。

「ああああん!!」

しかし重力に従つてお尻から地面に着いたため、アナルに刺さっているデイルドがさらに奥に入り陽乃は予期せぬ絶頂を迎えてしまった。

「陽乃さん今のは何ですか？」

「もしや機械が止まったから自分でアナル絶頂するとは。」

「本当に面白いな、もう一回やってくれよ」

「陽ちゃんはやっぱり淫乱な人なんだね」

このような状況を無視せずに松原達は大笑いして陽乃をバカにしたが、陽乃は疲労により反論する言葉も出ずにただ座っていた。

松原達は何も言い返せない陽乃に挑発を続けたが、水野特製の夕食ができたため挑発をやめ、食事部屋に移動することにした。

「陽乃さん、私もそこまで意地悪な人ではないので着替えてからご飯にしましょう。」

そう言うのと松原は陽乃に着けた機械を外し、普通の服を渡した。

服を受け取った陽乃は怪しみながらも着替えようとすると案の定スマレが待ったを出した。

「陽ちゃん待つて！」

着替える順番は私が指示を出すから、その通りに着替えて。」

「……。」

「そんなに睨まないでよく、興奮してパンツが濡れちゃうじゃない。」

陽乃はスマレに対して何も言い返さずにただ睨みつけ、

スマレは体をモジモジさせながら答えつつ、カメラを構え指示を出した。

「それじゃまずはノーパンだからパンツを履こうか。」

スマレの指示通りパンツを取り履こうとしたが、またもスマレは待ったをかけた。

「陽ちゃんダメだよ」

まずはどんなパンツを履くかしっかり説明して。」

陽乃は履こうと片足を通していたが、パンツを下ろし足を抜いた。

そしてあや取りをするかのようにパンツを広げ説明を行った。

「私が履くパンツは紫のパンツで、左右のレースやバックは紐になっています．．」

陽乃も最初は疲れていたが自分よりも年下に与えられる屈辱、そしてそれを受け入れるしかないし自分に怒り、さつきよりもキツく殺気を交えながらカメラに向かい説明を行った。

しかし、それでも陽乃に対する屈辱は続いた。

「それじゃ今度はＹシャツを脱いでね！

それが終わったらスカートだよ、勿論おっぱいを隠したら．．

わかってるよね？ 陽ちゃん！」

陽乃は指示された通りにＹシャツのボタンを上から一つづつ外していった。

ボタンを一つ外す度に抑えつけられていた胸が解放され、服の隙間から素肌が見え隠れしている。

そして全てのボタンを外すと袖を抜きＹシャツを床に落とした。

そこには全体的に細いが、それでも臍周りにはしっかりとクビが存在した。

さらに上を見ると白くて大きなマシユマロが垂れることなくツンと張っており、その頂点には存在を強調するようにピンクの乳首が立っていた。

「おお——！！

良いね！良いね！！

かわいけれど圧倒的迫力なおっぱいに見た目が合わさって最強だよ！

それじゃ今度はスカートを下ろして！！」

(恥ずかしがったらダメ、ここは耐えてこれ以上アイツらを喜ばせないように・・・)

陽乃は命令通りにスカートのホックを外し、スカートから手を離れた。

するとスカートは重力に従い簡単に足元まで落ちていき

スカートの代わりに先程履いた紫のパンツが姿を見せた。

そしてスマイレから追加でポーズの要求をされると陽乃は従ってポーズを決めた。

「いいよー！いいよー！！」

恥ずかしがらないで笑顔を作って」

腕を頭の後ろで組んだり、手ぶら、Y字バランス、四股踏み等色々なポーズの写真を

撮るとスマイレはブラを着けるように指示をだした。

「今度はブラを着けます、色はパンツと一緒に紫で少し透けています。」

陽乃はブラの説明をすると着けた、そして先程と同じようにポーズを取らされた。

撮影が終わるとドレスを渡され着ると意外にも撮影はなく、簡単に食事会場に向かう

ことになった。

「スマイレさん流石に時間かかり過ぎです！



早く行かないと水野の料理が冷めてしまいます、そしたら水野が怒りますよ?」  
「それはヤバイね、残念だけどこれで終わろつか。」

(これで終わり・・・?)

陽乃は安堵すると松原達と共に部屋を出た。

廊下を歩いている間に服などに細工がないか確認したが特になかった。

(ブラにもパンツにもローターは着いてない、服も透けてるわけないし特に問題がない・・・)

少しパンツのサイズが大きけれど、これも全く問題なし。

服の確認をしていると部屋に着き、入ると豪華な食事が準備されていた。

そこには陽乃の席も準備され他の人と同じ料理が並んでいた。

(私の席もしっかり準備されてる・・・)

陽乃はまたも怪しさを感じながらも抵抗せずに椅子にゆっくり座った。

そして何もなく食事が始まり全員が手を合わせ食べ始めた。

(やっぱり美味しい。)

陽乃も最初は警戒していたが水野が作った料理に満足し、どんどん食べていった。

同様に他の人も話をせずに黙々と食べていったが、途中で陽乃は違和感を感じ始めた。

(食べても減らない・・・)

他の人よりも量が多い。)

陽乃の取り分だけ他の人よりも明らかに多く盛られていた。

「私の方だけ取り分多くないかしら？」

大食いじゃないからこんなには食べれないんだけど。」

「それで残すのですか？」

水野がせっかくなかなか作ったのに勿体ない・・・。」

「そんなのどうでも良いよ、何が目的なの？」

「簡単です、貴方を完璧に調教するためです。」

精神的調教はずっと続いています、身体的な調教も始めます。」

陽乃は下らないと言うとまだ料理が残っているが箸を置きナフキンで口を拭くと、これ以上は食べないと暗にアピールした。

「意味がわからない、私をデブにするつもり？」

とにかくお腹一杯なのは、はい御馳走様。」

「でも、そんな態度を取っても貴方は私に逆らえない。」

水野は料理が残っている料理の皿を回収した時に陽乃にだけ聞こえる声で話しかけた。

「陽乃様気をつけて下さい、お嬢様の命令に背いて料理を残すと百花様から雪乃様達に罰があります。」

量が多いですが味には自信があるので頑張つて食べてください。」

陽乃は耳打ちされると水野の顔を見るが何食わぬ顔で立っていた。

雪乃を人質として取られているため、水野が回収しようとした皿に手を取り再度食べ始めた。

「水野に何と言われたか知りませんが、わかりましたか？」

貴方は私に逆らえないんですよ陽乃さん。」

松原が満面の笑みを浮かべながら陽乃に問いかけるが、陽乃は無視し水野のご飯を一心不乱に食べ続けた。

そしてデザートのスイカを食べ終わる頃には松原達は既に食べ終わっており部屋には陽乃と水野しかいなかった。

「お粗末様です、お嬢様から伝言を預かっています。」

食事が終わりましたら向かいの部屋に入り、椅子に座つて待機せよとのことです。」

そう言うとき水野は食器などを片付け始めたため、陽乃は向かいの部屋に入った。

部屋には誰も居らず、部屋の中央に椅子があつたが、その椅子は陽乃が漏らした時に座っていた物だつた。

それでも誰も居ないので椅子に座ると、案の定椅子から拘束器具現れ陽乃を拘束した。

(今度は何をしてくるの)

陽乃が警戒していると頭の上からゴーグルを装着され視覚を奪われた。

突然のことに驚き、頭を振ってゴーグルを振り落とそうするが、落ちることはなかった。

すると今度はゴーグルにいきなり映像が流れ始めた、同じタイミングで今度はヘッドフォンを取り付けられ聴覚も奪われた。

「陽乃さん見えて聴こえていますか?」

ゴーグルから見える映像に松原達が写っており、ヘッドフォンを通して陽乃に話しかけた。

「陽乃さんには開発中の機械の実験台になってもらいます。」

それでは楽しんでください。」

松原が一方的に話終えると映像が変わり、人間型のマスコットが現れ説明を始めた。

「初めまして、クリちゃんです。」

今日は男性を喜ばせるテクニクパーターを学んでいくよ。

まずは映像を観てね。」

画面が変わると仁王立ちしている男性と膝たちの女性が映った。

（一体に何をやるき・・・？）

えっ、ちよつと何やっているの!?)

女性は男性のズボンとパンツを下ろすと、ペニスに顔を近付け舐め始めた。

ペニスの周りを舐め終わると、今度は玉を舐め始め完全に勃起するとペニスを口に含みバキュームを開始した。

男女の経験がない陽乃は初めて観る大人のペニスを前に驚き、目を逸らすことも出来ないため目を瞑って情報をシャットアウトしようとした。

しかし視覚がなくなっても耳から入ってくる喘ぎ声などが永遠に入ってきた。

（何よ、何なのよこれ！）

女性が激しいフェラからスローフェラにチェンジすると男性は絶頂してしまい、女性の口に大量に精子をだした。

女性は出された精子を男性に見せつけるように口を開けた後飲み込んだ。

そしてここで映像が終わり最初の画面に戻った。

「どうでしたか？」

男性は女性に舐めてもらうことで射精までいきます。

ただし、初めての人がなかなか射精させるのは難しいです。

なので学んでいきましよう、まずはペニスを啜えるところから。」

すると陽乃の口にペニス型のディルドが入れられた。

必死に出そうとするがペニスはどんどん奥に入り込んだ。

「啜えることが出来たら、今度は舐めてみましよう！」

まずはゆっくり全体を舐めて、そのあとにカリの部分を味わいましょう。」

(誰が素直に言うこと何て聞きますか！)

クリちゃんが説明を行うが陽乃はペニスを口から出そうとしていた。

しかし、どれだけやっても一向に出せる気配はなく、その間もクリちゃんが説明を何

度もリピートしていた。

陽乃はペニスを出すことを諦めても、これ以上相手の言うとおりに行動するのはプラ

イドが許さないため、口に啜えたまま何もしなかった。

(今の間にこの状況の打開策を考えてないと。)

陽乃はペニスを啜えたまま打開策を考えていると、何者かが陽乃に近づいてきた。

そして陽乃のヘッドフォンを外すと耳元で囁いた。

「ダメだよ、陽乃ちゃん。」

しつかり勉強しないと、百合ちゃんが不機嫌になるよ。」

「ううんうっ！、むううんん!!」

(雪乃ちゃん達は無事なんでしょうね!?)

陽乃に近づいてきたのは百花だった。

百花は陽乃がペニスを啜えながら怒っているがいつも通りのペースで淡々と話し始めた。

「う〜ん何て言ってるか全くわからないよー

まあだいたい何を言いたいのか予想はつくけどね。

仕方ないから雪乃ちゃんの様子を少しだけ見せてあげるよ。

お姉さんは優しいからね〜。」

百花はパソコンを少し弄ると、陽乃の جوجل に映る映像が変わった。

そこには由比ヶ浜と一色に勉強を教えている雪乃の姿があった。

3人とも演技しているとは考えられな位いつも通りだった。

「ほらね、陽乃ちゃんが言うことをしっかり聞けば3人には何もしないよ。

だから今やるべきことは解るよね？

それに、これは私が作った中でも最高傑作だから今後の生活で本当に役に立つと思うよ。

あと私が居ない所でもサクラちゃんに逆らったらダメだからね？

「サクラちゃんには知らないけど、私の部下っていうか親友が監視してるから・・・。」  
そう言うと百花はヘッドフォンを陽乃に装着し部屋を出ていった。  
残された陽乃はおそろおそろペニスに舌を当て舐め始めた。



## 22. マツサージ

「フオゴウ、ファゴツ」

（クソいつまで続けさせるのよ。）

百花が部屋を出ていってからも、陽乃は啞えているペニスを指示されるがままに舐め続けていたが、ようやく終わりがやって来た。

「はい、それでは本日の練習は終了」

次回の時までに復習して、早く男性を満足できるように目指しましょう！」

ペニスが口から外れると同時に陽乃を拘束していたベルトも外れた。

陽乃はVRのゴーグルを外し地面に叩きつけた。

「おいおい、物に当たるなよ。」

それ結構高いんだぜ。」

声をする方向を向くと、そこにはツバキが1人だけで立っていた。

「ストレス溜まってるのはわかるけど、そんなに睨むなよ。」

今度は運動の時間だからストレス解消になるから。」

ツバキは今までよりも気が立っている陽乃に戸惑いつつ

陽乃をスポーツウェアに着替えさせトレニング室まで案内した。

上下灰色で飾りもないシンプルなデザインだが、陽乃の体に密着するため抜群のプロポーションが簡単に見えるようになっていた。

ナイトブラのように胸郭しか生地がなく、腹部は丸見えになっておりヘソやお腹のクビレが露出していた。

下半身もショートパンツを履いてはいるが、臀部の輪郭がわかり、着ているだけで視線を集める服装だった。

「それで今度は何をさせるの？」

「見たらわかるだろ？」

運動だよ、サクラはお前をさらに美しくさせたいんだとさ。

なんで美容には運動が不可欠だから今からするわけ。

それじゃまずはヒップストラストを15回を3セットやろうか。」

陽乃は言われるがままに筋トレを始め色々な部位を鍛えていった。

ふくらはぎや背筋、腹筋など休憩を交えながら真面目にこなしていった。

(本当にこっちの限界ギリギリを設定するわね・・・)

これは明日全身筋肉痛確定ね。

そしてランニングが終わり、休憩しているとサクラやスマレがトレニング室に入っ

てきた。

「ナイスタイミングだな。」

休憩を終わりして、丁度再開しようとしたとろだ。」

「それは良かったですわ。」

この後も予定がありますし早速始めましょう。」

何も知らない陽乃は言われるがままにレッグストレッチャーに乗った。

そして陽乃がしっかりと座ると同時に股を大きく開脚させた。

陽乃もこの器具や使い方も知っているので何も抵抗はしなかったが、始めようとする  
と自分の股間をカメラで撮影されていることに気がき自分の姿勢を想像した。

下半身にフィットしているシュートパンツは自分の陰部の輪郭がわかり、さらに自分  
は股間を強調するように開脚している。

わかった瞬間、陽乃は力を入れ急いで股を閉じ、開かないように力を入れ続けた。

「陽乃さん閉じ続けないで、しっかりと筋トレしてください。」

「これが狙いだっただのね、何が美しいスタイルよ。」

本音はHな動画を撮影するのが目的の癖に。」

「いえいえ、本来の目的は美しいスタイルですよ。」

その次のいでに動画を撮って、コアなファンや特殊な性癖の方に販売して陽乃さんの

ファンを増やしているんです。

今後のためにね・・・。」

陽乃は必死で抵抗を続けた。

サクラは限界が来るまで待つ姿勢を続け、少しずつ重りを増やしていき、陽乃を攻め続けた。

その時スマレが陽乃にこっそり近付き耳元で囁いた。

「陽ちゃん、サクちゃんに逆らったら雪ちゃんが酷い目に合うよ?」

小さい声だが、陽乃は一字一句聞き漏らさなかった。

そして妹を人質に取られている以上、先程と同様に命令に従うしかなかった。

そして命令通り筋トレを再開した。

カメラの前で何回も開脚を繰り返し、規定の数まで到達するとすぐに機械から降ろした。

しかしこれで終わりではなかった。

今度はスクワットを行うように命令されお尻のアップを撮影され、さらに腕立て伏せの時は胸を上部から撮影された。

「お疲れ様です。」

これで筋トレは終了です、後はお風呂に入って自室で休んでください。

また明日から忙しいので疲れを明日に残さないようにしてくださいね。」  
「それじゃ大浴場まで案内するね。」

満足そうにツバキとサクらはスマイレが大浴場まで陽乃を案内すると聞いた後に出ていき、スマイレと陽乃だけが残った。

そしてスマイレは陽乃と共に大浴場へ向かった。

しかし大浴場に入ったものの陽乃はシャワー室に通され、汗だけを流すように指示された。

「お風呂でゆっくり休むように貴方の主人が言ったのにシャワーだけなのね。」

「そこは安心して！」

簡単に疲れを取れるように準備はしてあるから。

あと私の主人が本当はサクラじゃないってわかってるでしょ？」

バスタオル一枚の状態で陽乃をマッサージ室まで案内するとそこには女性2人と百花の姿があった。

「陽乃ちゃんさつきぶり〜。」

筋トレどうだった？全身疲れてるよね？

そんな陽乃ちゃんのために特別に百花特性マッサージをしてあげるから、台の上に乗ってうつ伏せになってね。」

陽乃はバスタオルを取り、裸の状態で言われるがままに台に上がりうつ伏せになった。

「それじゃ、ツクシ、イブキ、スマレ始めて頂戴。」

「了解です」

あつ陽ちゃん一応自己紹介ね私の双子の姉のツクシちゃんとイブキちゃんね。

マッサージの腕は凄いから覚悟してね。」

まずイブキも台の上ののり陽乃の背中に乗った。

そして背骨を内から外に押ししていき、肩など揉みほぐし始めた。

ツクシは足の方に回り、太ももから足先に順番に押ししていき、足つぼマッサージも行った。

スマレは腕を担当し、二の腕や手首など重点的にほぐしていった。

そして一通り終わるとイブキはオイルを手にすると陽乃の背中にかけて始めた。

「ヒャー！冷たい！」

「大丈夫、大丈夫少しずつ熱くなっていくから。」

イブキは普通のマッサージを行っているが、徐々に陽乃の顔は熱を持ち始め、股が濡れ始めていた。

そして肩から腰に降りていき、とうとうお尻までたどり着いた。

お尻の割れ目に沿うようにオイルをかけられると、左右からお尻を揉まれ、オイルをお尻を全体に馴染ませようと動かした。

「あつ、ふあつん」

お尻全体にオイルが行き届くと左右からツボを押し始めた。

すでにオイルによって発情している陽乃は普通のマツサージでも感じ始めていた。

「んあつ、あんつ、ふあつ」

「気持ちいいですか？」

外側だけでこんなに感じるなら内側を触ったらどうなるでしょうね？」

イブキは肛門が見えるくらいにまでお尻を開いた。

するとスマレがオイルに浸した筆を持って、肛門を撫で始めた。

「あああああん！」

いきなりの刺激に陽乃は大きな喘ぎ声を発した。

それでもスマレは止めようとせず、背中から肛門までゆっくり行ったり来たりを繰り返した。

オイルによって見かけ上はわからないが、陽乃の陰部からタラタラと汁が流れていた。

「はい、終了〜。」

イブキは台から降りつつ皆に聞こえる声で喋った。

その

声で陽乃はやつと解放されると思ったが現実は厳しかった

「それじゃ今度は仰向けね。」

次の瞬間スマイレ達3人によつて体を回され、仰向けになり、手足をベルトで拘束され大字のように固定された。

イブキはオイルを胸の間に垂らしながらヘソまでかけていった。

そしてかけ終わると、イブキはお尻と同じように胸を揉みオイルを馴染めていった。

「くうっ！ あっあっ!!」

その間にもツクシは太ももの内側に手をいれ、付け根近くを優しく揉み続けた。

仰向けになったことで陰部から出る愛液が確認でき、また乳首やクリトリスも固くなっていた。

「ハアハア・・・。」

「もうお疲れ？」

今から激しくなるのに体持つのかなあ？」

スマイレは笑みを浮かべながら筆を使い陰部を撫で始めた。

ギリギリ当たるか当たらないかの瀬戸際を攻めながら何度も何度も撫でた。



その度に陽乃は喘ぎ声がでないように必死で口を閉じ下半身に神経を集中した。そこを見計らったようにイブキが胸元からゆっくり胸を持ち上げた。

いきなりの刺激に陽乃は絶頂近くまで行くことになったが絶頂はしなかった。

「スミレ少し待て。」

まだ胸のマッサージが終わってない、このままマッサージすると絶頂してしまう。」

「えー、わかったよ。」

それじゃ早くマッサージ終わらせてね。」

そう言うときスミレは手を止め、撫でるのを止めた。

イブキはスミレが止めたのを確認すると再度胸元から上に、脇の下から胸元そして乳首に脂肪を誘導していくバストマッサージを行った。

しかし先程から寸止めのような陽乃は1回1回の動作で感じてしまっていた。

(感じ過ぎて頭が可笑しくなる。)

そして今度はツクシが筆を持ち乳輪の回りを撫で始めた。

スミレがやったように乳首に当たらないように、乳輪を何周もした。

時々胸の間も撫で緩急をつけ陽乃を追い詰めた。

「陽乃さん、知っていますか？」

胸の谷間が性感体になっている人って多いんですよ。

特に巨乳の人は普段刺激がないので、触れられると簡単に感じるみたいです。

この反応を見ると陽乃さんも同じようですね。」

陽乃は朝とは比べ物にならない寸止め地獄を受けた結果、太ももや、お腹などでも感じてしまい、まるで全身性感体のようになってしまった。

それを確認すると3人は1度攻めるのを完全に止め、そしてある程度陽乃の息が整うと一斉に攻め始めた。

イブキとスミレは左右の乳首を口に含み甘噛みや舌で舐め回した。

ツクシはクリトリスに狙いを定めて乳首同様に甘噛みなどで攻め立てた。

そして陽乃はいきなり衝撃に意識が失いそうになるが、快樂によつて現実に引き戻された。

その間にもツクシの顔がビチャビチャになる位潮を吹き続けていた。

## マツサージ2

「ハアハア・・・」

スミレ達3姉妹にイカされた陽乃は息を整えながら3人を見るとツクシは潮吹き浴びたため顔などを吹いており、他の2人は笑顔を浮かべながら余裕な態度で陽乃が落ちてくのを見下ろしながら待っていた。

陽乃が息を整うのを確認すると、先程と同じように陽乃を攻め始めた。

「あつっ！、くつつん!!」

絶頂のギリギリ手前まで持ち上げるが、絶対に絶対までたどり着けないように快楽を与え続け。

最初は睨み付いたり、抵抗的な姿勢を見せていた陽乃も今は口から涎を垂らしながら無意識に体を動かし刺激を求めていた。

「それじゃまた絶頂しましょうか」

イブキは他の2人に攻めを止めさせると、陽乃の陰部に手を持っていき、陽乃に話かけた。

「先程よりも凄い快楽を与えますが、暴れないで下さいね。」

処女膜が破れちゃうかもしれないですよ。」

イブキは陽乃の陰部に人指し指を処女膜まで入れ、軽く膜にタッチした。

「うんうん、膜を少しタッチしただけで膣が凄い絞まってる。

やっぱり陽乃さんは感じ易い体質だね。

それじゃ2本目も入れるよ。」

一度指を抜くと今度は中指も一緒に入れた。

今度はある程度の所まで入れると、陽乃の様子を見ながら指を回したり、曲げたりし感じる箇所を探した。

陽乃は拳を握り、声が漏れないように我慢しようとするが、高ぶった体は言うこと聞かなかった。

「あああああん!!」

「ここも感じるのか」

ならここはどうかな」

それともこっちなかな」

たった2本の指に陽乃は翻弄され続けると共に快楽を与え続けられた。

そして陽乃でも知らなかった一番感じる所を見つけてしまった。

「うううん!!」

「やつと見つけた。」

「ここが一番反応が良いね!」

陽乃は目を閉じこれから来る刺激に備えたが、刺激が来ないどころか指が腔の外に出された。

状況が理解できない陽乃は目を開けイブキを見た。

「どうしたの?」

もしかして絶頂させると思った?」

イブキが笑いながら答えてた。

「陽乃さんをお願いしたらイカせてあげるけど、どうする?」

「・・決まってるじゃない、不必要よ。」

(絶対に貴方の言うとおりににはならない。)

2人の会話が終わるとスマレヤツクシは陽乃の拘束を解き始め、全て終わると陽乃に飲料を渡した。

マッサージのせいで大量に汗をかいて喉が乾いていたため陽乃は怪しみながらも飲み始めた。

「汗が凄いから、脱水状態が出る前に飲んでね!」

これからサウナに入るから、もっと体の水分がなくなるよ。

あとわかってると思うけど、勿論媚薬入りだよ。」

改めてイブキから媚薬入りと言われたが、水分を欲している体は途中で飲むことを止めずに全て飲みきった。

そして先程宣言通りにサウナに連れていかれた。

「どう陽ちゃん暑いよね」

すでに凄い汗だよ」

悠長な声でスマレが陽乃に声をかけた。

しかし陽乃に話しかけたはずが、返答は隣の姉であるツクシから返ってきた。

「それは媚薬の効果だよ。」

陽乃さんは最後に絶対できなくてムラムラの状態で媚薬飲んだから発情して体温が上がってるの。」

「やっぱり〜！」

流星に汗かくの早すぎだよね」

2人が陽乃をからかっているとイブキが陽乃に問いかけた。

「でも陽乃さん実際はどうなんですか？」

サウナで汗をかいたのか、発情して汗をかいたのか。」

「・・・サウナのせいに決まってるでしょ。」

「そうですね・・・。」

陽乃は返答はしたが、実際今すぐにもオナニーをして発散しなかった、しかしプライドを保つために理性で本能を押さえ込んでいた。

「これ以上は危険だから出ましよう。」

イブキの声で4人ともサウナから出て、3姉妹は準備していたスポーツドリンクを、陽乃は先ほど渡されたのと同じ媚薬入りの飲料を飲んだ。

「それじゃ体を洗ってお風呂に早く浸かろうよ。」

今度はスミレが声をあげると陽乃はシャワー室に向かい体を洗うとした。

そして体を洗っていると、無意識に手が膣の近くまできた。

(さっきの刺激を再現できるかな・・・)

手を止めて考えていると視線を感じ後ろを振り向いた、視線を感じた通り3人がこちらを見ていた。

「何?。」

「イヤー、陽乃さんが1人になったらオナニーするかな〜と思って見てたの。」

あれだけ啖呵きつたからしなないと思ってるけど一応ね。」

「バカじゃないの・・・」

陽乃は急いで体を洗うために手を動かし始めた。

3人は洗い終わるまでしつかり見ていた。

そして湯船に浸かり、脱衣場で体を拭いていると、サクラが目の前に現れた。

「陽乃さん、すみません。」

寝間着を渡すのを忘れていました。」

サクラは陽乃にステンレス性のブラと皮で作られた貞操帯を渡した。

「どうしたんですか？」

何か可笑しいですか？」

サクラは笑みを浮かべて陽乃に質問をした。

「別に。」

陽乃は与えられた物を着るとサクラが鍵を締め、満足し脱衣場をすぐに出ていった。

これでサクラの持つてる鍵がなければ脱ぐことができなくなった。

そして陽乃も自分の部屋に戻った。

部屋に入ると部屋はアロマテラピーが炊いており、甘い匂いがしていたが、疲れている陽乃は気にすることもなくベットにダイブした。

そのまま寝ようと目を瞑るが中々寝れず、逆にまたも体が熱くなり目が覚めていた。



この部屋が盗撮されている可能性が限りなく高いため、陽乃はベットに入り陰部を触った。

しかし貞操帯が邪魔をしており全く気持ちよくなれない。

「何よこれ!」

怒りながらもつと強い力を加えるが、それでも絶頂には程遠い刺激しかなく余計にムラムラした。

胸も同様でステンレス性のカップが邪魔し胸を揉むことすらできなかつた。

「クソ!!」

このまま相手の術中にはまりたくないため、無理にでも寝ようと意識を集中しようとするが甘い匂いを嗅ぐたびに体が熱くなった。

どうにか気を紛らわせようと、匂いの種類を調べることにした。

匂いの種類はイランイランだとすぐわかつた。

「えーとイランイランは誘眠作用にも優れているため、眠れないときにも効果的つと。これなら寝るには効果的なのね。」

他にはイランイランは催淫作用により、官能的な高揚感を高めることでも有名です。・・」

説明文を読み終わった陽乃はアロマテラピーを消し、ゴミ箱に投げ入れた。

しかし、すでに部屋の壁やベットに匂いが染み付いていた。

「どこまでバカにして!!」

陽乃は再びベットに入り甘い匂いを鍵ながら眠ろうとした。

それを監視カメラで見ている、百花は明日の予定を考えていた。

## 刷毛水車

陽乃はいブキに連れられて廊下を歩いていった。

陽乃が百花の奴隷となり、ずいぶん時間が立つていった。

その間、陽乃を見世物として様々なショーを開催され、今宵もまた陽乃を辱めるためのショーが開催されていた。

「それでは本日も開催致します。絶世の美女達の熱き戦いを！」

司会の女性が高らかに声をあげた。

部屋は中央にステージがあり、その周りに10名程度の観客が酒を飲みながらスタートを待っていた。

「それでは選手の入場です。」

1人女性がステージに上がり言葉を詰まらせながらも自己紹介を始め、

女性がステージで喋る度に観客から歓声が飛んだ。

そして自己紹介が終わるとステージの端に移動し別の女性がステージに上った。

「知っていますか、彼女アイドル志望だったみたいですけど全く売れずに借金が増えて払いきれずにここの来たみたいですよ。」

「それは初めて知りました。通りで可愛いんですね。」

それでもやっぱり最後に出てくるアノ子が一番ですけどね。」

「あくアノ子ですか、確かに彗星の様に現れて今日も一番人気ですね。」

観客の男性たちが選手の女性を品定めするように見ていると2人目の女性が入場した。

1人目の女性同様に自己紹介を顔を赤らめながら行った。

そして最後に陽乃がステージに上がり、晒し者にするようにスポットライトを浴びせた。

「それでは3人目の方の自己紹介です。」

「どうもハルです。私はピチピチの大学生でアピールポイントはプロモーションです。」

まずは胸はFカップから成長しGカップになりました、お尻もも桃尻言われるほど綺麗にハリがあります。

どうか応援お願いします。」

(相変わらず最低な自己紹介っ！)

本心では悪態を突きながらも覚えさせられた言葉で観客を沸かせた。

「それでは参加者の紹介も終わりましたので、本日のゲームの発表です。」

本日のゲームは耐久ビリビリエアロバイクです。

お客様には10分間頑張つて漕ぎ続けた距離を予想して頂きます。

もし見事に1位から3位まで全体的の中しましたら最下位の女の子の罰ゲームを受ける姿を見ることができません。

また、ゲーム前に女の子を一人決めて課金すると、その子以外に金額に応じて妨害が加わりますので押しの子を勝たせるためにどんどん課金してください。

それではシンキングタイムです!!」

説明が終わると観客達は順位を予想していき、ゲームが始まるのを待っていた。

(何回みてもクソみたいな光景ね、人を晒し者にして楽しむなんて。

まあ良いわ今度こそ勝ってみせる。)

「時間になりましたので締め切りさせて頂きます。

それでは皆様方ステージに注目してください。」

観客がステージを見ると、エアロバイクに陽乃と二人の女性が跨っており、

3人ともスパッツにスポーツブラとおへそを丸出した官能的な姿をしていた。

「では、耐久ビリビリエアロバイクスタート!!!」

スタートの合図で3人とも一斉にエアロバイクを漕ぎ始め、ステージ上のディスプレイ

イにいろんな角度から彼女たちを撮影した映像が映し出されていた。

「さあ、3人とも良いスタートを切りました。」

特に3番のハルが良いスタート、少しだけですがリードしています。」

3人とも一心不乱に漕ぎ続けているが1分、2分と時間が経つにつれ少しずつ陽乃が差を広げ始めた、5分もすると陽乃以外は最初の勢いが無くなり陽乃の独壇場になり始めていた。

しかし陽乃は手を抜かず、もう一段ギアを上げた。

(もつと今の内にリードしないと、どうせもうそろそろ妨害がくるはず。)

「それでは制限時間が半分になりましたので、最初の妨害を起動です！

お客様が選んだ推しの女の子は何位かな??

「ディスプレイに注目!!」

一番人気 ヒメ

二番人気 スズ

三番人気 ハル

ピリピリ

「ヒャア」

「キヤア」

「アアッ」

ディスプレイに結果が表示されると3人が着ていたブラから電気が流れ乳首に刺激を受けた、そのため3人とも漕ぐスピードが遅くなり始めた。

しかし特に陽乃は今までの調教の結果、弱い刺激にも反応してしまい他よりもペースを大きく下げた。

「最初の妨害は胸に電気が流れます」

ただし流れる強さに関してはハルさんが一番強くヒメさんが一番弱くなっております。

そしておやおや、ハルさんの乳首が立っているように見えますね」

「ハアハア、ツク！」

（くっ胸への刺激で手中出来ない）

「おいおい、本当に立ってるぜ。」

「こんな刺激で感じるって感度良いな。」

「だな、あのプロモーションでこの感度は探してもそうはいない。」

電流が胸に電気が流れ集中できなくなり陽乃はどんどん漕ぐスピードが遅くなり、ほかの2名と同じ程度までスピードが落ちていた。

「さあ、残り3分となりましたねので2つ目の妨害が発動します。」

司会者の掛け声と共に今度は座っているサドルから電流が流れクリトリスを刺激し始めた。

ビリビリ

「アアアアン!!」

(まずいこれ……!、いく……!)

「おっとー!!」

ただいまハルちゃんが絶頂を迎えましたかね!?

他の子もメス顔になっています、今度は誰が絶頂するのかー!!」

(ヤバい、力が入らない……でも、このペースなら勝てるはず!)

陽乃の漕ぐスピードはどうとう他の2人に抜かれ、残り時間を最初に作ったリードが保てるかの状況になっていた。

しかし陽乃の努力を誰も評価しなかった。

7分間全力で漕いでいたため汗が滲み絶頂したことにより顔が赤くなり、とても官能的な姿をしているため観客たちは陽乃を性の対象としか見てなかった。

観客は股間を大きくしたただ早く陽乃が罰ゲームを受けるのを望んでいた。

「さあ残り1分、一番はハル、二番はヒメ、三番目はスズ





VIPルームには先ほどの当選者が今か今かと罰ゲームが始まるのを楽しみにしていた。

すると奥の扉が開き司会の女性と陽乃が一緒に入ってきた。

陽乃は全身を覆い隠すようにマントを纏いながら、首輪を付けられ伸びる鎖は司会の女性が握っていた。

「それでは皆様お持たせしました、罰ゲームの始まりです。

ではハルさんどうぞ。」

陽乃が観客の前に立つとマントを脱ぎ、その瞬間観客がざわめき始めた。

中に着ていたのは面積が小さい黒のマイクロ水着のみで、陽乃のプロモーションを完璧に引き出していた。

観客が撮影を始めると司会は鎖を少し引つ張り陽乃に合図を送り

気が付いた陽乃は手を頭の後ろで組み、足を少し開き自己紹介を始めた。

「どうもハルです。私はピチピチの大学生です。

先ほど説明した通り胸はGカップもありますが乳輪は小さくて、こんな小さいビキニでも隠れます。

あとお尻もも桃尻言われるほど綺麗にハリがあります、前の方は陰毛を全剃りのパイ

パです。」

(クソ、私がこんな良いように使われるなんて・・・)

自己紹介をしながら腰を振ったり、胸をアピールしながら行った。

そこに居たのは凛とした過去の陽乃の姿はなかったただ男を喜ばせるだけの性奴隷になつていた。

「はい、それでは写真撮影はこれまでです。」

今から準備をしますので、こちらも撮影のチャンスですよ〜」

天井からアームが下りてくると、そのアームを使い陽乃を拘束した。

陽乃を拘束したのは開脚フレームバインダーと言われるもので、

足を蟹股で固定され、腕も頭の横に持っていき最後にフレームで挟み込んだ。

そして陽乃の拘束が終わると奥から陽乃の腰まである大きな箱を運んできて、足元に設置した。

「それでは準備が整いましたので罰ゲームを開始します!!」

クルクルクル、サワサワサワ。

「くう、はあ、くううううん」

合図と同時に足元の機械から刷毛水車が出てくるとマイクロピキ越しに陽乃のクリトリスに刺激を与え始めた。

「この刷毛水車は先ほど彼女たちが自転車を漕いたときに発電された電気であつて、  
ます、

なんとエコなシステム」

(なにがエコなシステムよ、くうくクリトリスへの刺激が強すぎる・

全くがまんできないー!!)

シユンシユンシユン、サワサワサワ

「はああつーんうつー! ああああつ」

「またこの刷毛水車は速度を調整でき、今は対象者が絶頂するたびに速度を上げる設定  
になつています。」

「このように連続絶頂を見ることができません。」

シユウウイイイイイー、サツサツサツサ

「ちよー! あひいひい!! ハアハア、アアアアアン!!!」

ものの数分のうちに陽乃は1回目の絶頂を迎える。

そしてそこからは地獄だった、一度絶頂したことにより敏感になつたクリトリスに刺  
激を与えられ続け連続で絶頂した。

今での調教のせいか陽乃の体は快楽に抵抗できなくなつており、

また最初は連続でイクことはでも体力が続かず意識を失つていたが、

今では意識を保てるように調教されてしまっていた。

「ハアハア」

「それでは本日の罰ゲームは終了です」

何度も絶頂したため全身汗をかいており、また暴れたことでビキニかた乳輪がはみ出て乳首も少しだけ見えていた。

股からは刷毛水車のローションや、汗以外の汗が垂れていた。

「えー、されでは退席をお願い致します。

またのお越しをお待ちしております。」

観客は陽乃の乱れた姿を見れ満足し、談笑しながら部屋を出て行った。

陽乃もやつと終われると安堵していたが違和感を覚えた。

(やつと終わった・・・でもなんで拘束をはずされないの?)

疲れた体に鞭を打ち体を動かすが、しつかり拘束されているため抜け出すことはできなかつた。

そこに司会者の女性と高級そうなスーツを着た観客の1人が戻ってきた。

「しかし本当にありがとうだよ。まさか追加の罰ゲームが見れるとは来た会があつたよ。」

「滅相もございませぬ。」

確かに同じ当選者ですが先生は一番大金をかけていました、

それで他の方と同じ扱いをしては松原家の面目が立ちません。」  
「ではじっくり楽しむとするか。」

ハル君元気かな？」

男は顔を伏せている陽乃に声をかけるが返答はなかった。

しかし男は笑みを崩さに陽乃の顎を持ち無理やり顔を上げた。

「やはり素晴らしく整っている顔だね、この顔が女の顔に変わっていくのが楽しみだよ。」

「この子は心が折れてもすぐに復活する松原家でも格別な一品です。」

特に1対1の状況だと反抗心が芽生えるのか楽しめると思います。」

男は人差し指を使いゆっくりと陽乃の胸に近づけ、

胸に到達するとビキニ越しに乳首の周りを触り始めた。

少し時間が経っていたため縮んでいた乳首が復活し、存在を示し始めた。

サワサワサワ

「うううううん！」

そして今度は男は陽乃の柔らかいGカップを揉み始めた。

わずかな力で形が変形するが、力を抜くと元の形に戻る弾力性を持っており男を満足させた。

モミモミモミ

「きゃ!! なにすんよ!! 離しなさいよ んんんんつつつ」

「柔らかいと思っていたが、まるで巨大なマシユマロを揉んでいる感触だ。」

男はビキニの中に手を入れると可愛らしいピンク色をした突起を探し、

そして発見すると摘み、爪で軽く引つ掻いで弄り始めると乳首はさらに熱を帯びた。

「それに乳首の感度も良し。」

少し生意気なところも素人感があつて良い。

「どうだい簡単に気持ち良く感想は？」

「ハアハア、気持ちいい良いと思う？」

「気持ち悪いだけよ」

「そうかい、では私と意見が違うので確認した方が良いかね」

プルン

「止めて!、離して!!」

男はマイクロビキニを下にずらすと、ピンと立った乳首が姿を現した。

男は満足すると乳首を何度も突き、時には胸の中にまで押し込んだ、

その度に胸は元の形に戻り男を楽しませた。

「おやおや、こんなに乳首を立てているのに感じてないとは、

嘘つきにはお仕置きが必要だね。」

「ちよつと待つて。」

男はむき出しになつてゐる陽乃の乳首を口に啜えようと顔を近づけると、

陽乃は必死に体を揺らして逃げようとすが、

バインダーが少し揺れた程度で簡単に捕まり、左の乳首を啜えられた。

「止めて、お願い！嫌あつ…ふううつ！」

チュパ チュツチュ

ミルクも出てないのに何か甘い味がするよ。」

陽乃は必死に体を揺らし抵抗するが、それをあざ笑うかのように乳首を攻め続けた。

ペロペロペロ

ザラザラした下で乳首を嘗め回し、

「うろうろうん！」

カリコリコリ

乳首を甘噛みしたり

「ああああん！！」

チュパチュパチュパ

吸つたり色々な攻め方をした。



「んんんっ!!!」

シユウウイイイイイーン

チユoooooooooooooooo

そして最後に陽乃の大きな胸を使い両方の乳首を啜え、同時に刷毛水車を動かし陽乃を攻め立てた。

「~~~~~!!!」

陽乃が絶頂し体が跳ね上がるのを直で感じると満足し顔を離した。

「どうだったかね？」

私のテクニクもなかなかだろう？」

陽乃は何も言い返さず必死に睨むが、その目はとろけて顔が赤くなっており余計に男を発情させるだけだった。

そして男は次なる目標であるクリトリスに目を向け、陽乃も視線に気が付いた。

「優秀な君なら次はどこかわかるだろう、

ぜひ君の口から聞いてみたんだが？」

「ハアハア、さっさと私の目の前から消えて」

男は陽乃の返答を聞くとビキニの紐に手をかけて無理やり引つ張り奪い去った。

トロンと陰部から液体が垂れ、バキバキに勃起しているクリトリスが姿を現した。

「絶景、絶景」

男は笑いながら屈みこみ陽乃の性器に先ほどと同様に顔近づけ、陽乃に尋ねた。

「先にどちらが良いかい？」

クリトリスか膣どちらを攻めて欲しい？」

「勝手にすれば良いじゃない」

「まだ心が保っているのは素晴らしい」

男はクリトリスに顔を近づけると丁寧に皮を剥ぎ戻らないように押さえながら勃起したクリトリスを舐めた。

ペロペロペロ

先ほどの乳首とは比較できないほどの刺激が陽乃の頭を襲った。

「ふぎゆうゆうつつ!!」

その光景を見て喜びながら男はクリトリスを舐め続け、とうとう軽い絶頂を迎えた。

絶景を確認すると男は膣に狙いを定めた。

ペチャピチャピチャ レロれるチュチュツ ツくくピチャ

まず膣に下を入れGスポット探すように内壁をゆつくりと四方八方を舐めまわし、どんどん奥に入れていった。

「くうつ…止めてつ…んああっ!んうつ…くうつ…!」

ちゅうううううううっ……ちゅうううううううっ

小陰唇を開きながら膣を覆うように口を当てると思いつきり吸い込んだ。

「ああああああん、ハアハア、ああああああん」

そしてその瞬間、今まで我慢していた限界が来たのか大量の潮を吹いた。

ビュビューツブシャッ

「ひゃんやー」

陽乃が出した大量の潮は男の顔やスーツをビチャビチャに濡らすほどだった、

さすがの男も予想外だったのか驚いた、そしてさらに攻めようとした矢先司会の女性が声をかけた。

「すみません、先生お時間です。」

さすがにこれ以上は申し訳ございませんがお客様でも許可は出来ません。」

「せっかくもり上がってきたのにかい？」

「はい、大変申し訳ございませんが退出をお願い致します。」

男が司会の女性が一步も引きさがらないので、どうするか考えていると。

「帰れって言われてるんだから早く帰ったら。」

「本当に素晴らしいよ、雪ノ下陽乃

ここでもまだ、そんな言葉が出てくるとは!!

司会の人少し相談があるのだが」

男は喜びながら司会の女性と少し離れた場所まで行き話し始めた。

話している途中、視界が電話で何か確認を取り許可を貰えたのか男は煙草を吸い一服していた。

すると奥の扉からカートを押しながら誰かが入ってくると丁度一服が終わった男も戻ってきた。

「ハル君、君のせいで私の大切な一帳羅を汚したからね、特別に短い間だが許可を貰えたよ。」

男は話しながら陽乃の口にO型の口枷を嵌めた。

「んー、んんーッ」(いきなり何すんのよ)

陽乃が抗議するが男はどんどん準備を進め口枷により空いた口にホースを入れ喉の奥まで入れた。

それを陽乃も吐き出そうとするが全く意味がなかく、そしてホースを伝い何か液体が胃に流し込み始めた。

陽乃もこの時点で相手が何をするのか理解したためどうにか液体を体の外に出そうとした。

「やはり、今君が飲んでいる液体が何かわかつてるね。

なら君のやることは一つこれ以上抵抗しないことだ。」

男はある程度液体を飲ませると、またも煙草で一服を行いリラックスを始めた。

しかし陽乃は逆に液体の効果でどんどん尿意が高まり少しでも力を抜を抜けない状態だった。

「うー、ううーん」

「もうそろそろ効き目がでて来たころかな。」

ただ、念には念を入れよう。」

男はもう一度ホースを使い追加で利尿剤を流し込むと、必要のなくなった口枷を外した。

「それで、どうだい準備はできているかい？」

「なんのこと？」

スーリースーリー

陽乃は利尿剤が効いて内容に振るまつた。

男は司会者にビーカーを陽乃の陰部前で持たせ、自分は陽乃の後ろに回った。

わき腹から脇までなぞるように動かし、脇にまで到達すると今度は脇下から乳輪を円を描くように撫でた。

「あぁっ……んうっ……くうっ……んあぁっ！」

乳輪からの刺激に慣れる直前で男は乳首を摘みながら胸を揉んだ。

陽乃もはを食い絞りながら胸を左右に振りどうにか抵抗した、

そして男が胸から手を離し、股の下に手を通そうとした時

「先生、大変申し訳ございません時間です、

主が戻られましたこれ以上の延長はできません。」

「あと少しだったのに残念だよ、全くスーツが汚れただけじゃないか・・

ハル君やっぱり気に入ったよ、また近いうちに会えると思うから楽しみにいといてくれ。」

そう言葉を残すと男は司会の女性と一緒に扉を出た、

そして司会が扉を閉めた瞬間、我慢していた尿が滝のように流れだした。